

---

**あるがままに生きる 真・恋姫†無双**

kuzu

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あるがままに生きる 真・恋姫十無双

### 【Nコード】

N61710

### 【作者名】

kuzu

### 【あらすじ】

大学も無事卒業し社会人になり平々凡々と過ごしていた男の人生がとある出来事を経て一変する。果たして彼の人生はどうなってしまうのか!? 波乱万丈の人生があるがままに生きるとある男の物語である。

## プロローグ（前書き）

初めての創作、投稿させていただきます。  
なにぶん、処女作なので生暖かい目で見守ってくださるとありがたいです。

## プロローグ

(なんでこうなった……)

混乱する頭を整理するために、とりあえず現状を把握してみよう。

( 辺り一面真っ暗 )

以上、現状把握終了。……いや、これ以上説明しようがない。  
じゃあ、なぜこういう状況になったのかを考えよう。あれはたしか  
……

大学も無事卒業し社会人になり早半年。特に問題もなく平々凡々と  
過ごし現状にも慣れてきた。  
そして、久々の休日に家で過ごすのもさすがにどうかと街をブラブ  
ラとしていたとき……  
どっかのドラマやアニメよろしくボール追いかけ道路に子供が飛び  
出す。猛スピード迫り来る車。  
俺、何も考えず飛び込み子供を押し出し俺ドーン。

飛んだね。ものすごく飛んだ。飛んでるときにいろいろ考えたよ。まじで世界がスローになるんだね。

（やべーな、死んだかな？ 子供無事だったかな？ つか、飛び込むとき物凄い力発揮しなかったか？  
火事場のクソ力か？ あー、死んだらどうするか、明日の仕事大丈夫か？ おふくろ、親父ごめんな……）

などなど一瞬とは思えないほど思考がフル回転した。  
なるほど、当たり前のことだが世界がスローになるのではなくて思考が早くなるのか一つ勉強になった。

そう考えてるうちに体すべてに衝撃がきたかと思えばいきなり激痛が走る。

（イタイイタイイタイ……）

思考がそれに支配される。そして、それも徐々に体から消えていく。いや、体の感覚自体がなくなっていく。

（これ、死んだ！ 絶対死んだ！！ 思い残すことは ものすごくある）

もう、どうしようもないと諦めが脳裏によぎるが最後の最後にこれだけは絶対に確認したかった。

最後の力を振り絞り吹き飛ばされた地点を見る。子供が泣いていた。擦り傷はありそうだが無事だった。

（あー、よかった。無駄ではなかった。俺の命も何かの誰かの役にたったのなら……）

無駄ではなかったのなら浮かばれるというものだ。

そう安心したら視界が暗くなりそこで意識が途絶えた。

そして、気が付けばこの暗闇。

え？　もしかして死んでない？　植物状態？　いや、それとも死ん

でここが死後の世界？

原因を考えてみても現状は絞れたがさすがに理解まではできなかった。

いや、まじで困った。一生このままなのかどうなのかすらもわからない。

自分の状態といえば思考のみ。体の感覚がない。

まぶたの感覚もなく目が開いているのか閉じているのかすらも不明。声もでないものすごく怖い。

（誰かばすけて……）

ここで小説やら何やらなら現状説明に神様や死神様や天使様などができて

天国やら地獄やら輪廻の輪やらに連れていってくれるのだろうかそんなこともなく時だけが過ぎていった。

時が過ぎたといっても時間の感覚などわかるわけもなく何時間なのか何日たったのかもわからないが

時間というものは残酷であり優しいもので現状にも慣れてしまった。何かわからない不安や恐怖に慣れていき、ひたすら暇だった。

そこで思考しかできないのなら妄想すればいいじゃないとばかりに妄想で暇をつぶした。

(妄想力なら誰にも負けない自身がある……そうだ、体の感覚がないなら妄想すればいいじゃない)

もう、すでに頭は末期だったのかもしれない……

とりあえず、脳だ。脳から全てに伝達するイメージする。

脳から目に電気信号を送り瞼を開き目から情報を得る。そう強く強く想像する。

何か瞼があるような感じがした。さらにイメージを強くする。

俺の持つてるものは既に思考のみ。ならば思考だけで為さねばならない。

(目を開け視ろ！　そして、情報を得ろ！！)

瞼が開いた感じがした……が目に見えるのは闇ばかり。

いや、諦めるな。目は見えてると確信するんだ。次は手だ。手をイメージする。

光も何もない闇なのに手が見える気がした。

(もっと想像しろ！　そう創造するんだ！)

手を動かせと脳から少しずつ信号を送る。指が動くのが見える。少しずつ手の感覚が戻った感じがする。何度も何度も繰り返す。どうせ時間などあり余っている。一つのこと熱中することは時間を忘れ暇をつぶさせる。

これが唯一の遊びだと言わんばかりに集中した。

その甲斐もあって自分の目の前には自由に動く右手が出来上がっていった。

同じ要領で左手も創造し両手が完成した。

次は両手を叩き音を聞くための耳を、声を出すための口を喉を舌を

……

一つ出来上がると次、また次と一つ一つ丹念に創りあげる。



全身ができるあがるまでいくらの時間を費やしたかはわからないが自由に動き回れる体を手に入れた。人の妄想力は神をも勝るのかもしれない。

ただ、何かがおかしい。こう手を動かし足を動かしてみる。

全て自分でつくったため細部まで動かせるのだがこうなんというか生命が宿ってる感じがしない。

血かな？ と血さえも造り全身に流してみても違和感を感じる。

その後、いろいろ何か足りない気がして試してはみるが一向に違和感がぬぐえない。

体のつくりとは別に生命の根源的な力というものがあるのではないか？

とりあえず生命力という曖昧なものを想像し創造しようとするが曖昧すぎたのか創造するのが困難なようだ。

(生命力……命の力……うーん、気か？ 試してみる価値はあるかもしれない)

たしか、丹田　へその下あたりに力を込める。そして、全ての意識を集中する。

なにやら小さい火がともったような気がする。

その火を消さないように廻す廻す廻す。

だんだん、大きくなるような気がする。それを何度も何度も廻し練る。

暖かい……確かにこれは生命力の力かもしれない。

練って大きくなった気を全身に廻す。体に熱が入り生命の鼓動を感じる。

(そうだ、これが生きるということなんだ)

今まで体を支配していた違和感がすべて消え去る。

それにしても妄想や想像とはいえここまで生きるということを実感できるとは……

死んでいたとしたら本当に生き返るのでは？ 植物状態ならば動けるのでは？

そう勘違いさせてくれる。淡い期待を抱かせてくれる。

期待すれば絶望させられるという不安に心がざわめくもすぐに心を落ち着かせる。

ここでグダグダ悩んでいても仕方ないことだ。我ながらなかなか精神的に強くなった気がする。

(この場合は図太くなったのか？)

それはさておき、これで体は手に入ったわけだが……はて？ なんでこんなことをしていたのか？

そういうえば単なる暇つぶしだったような？ それにしてもとんでもないことをやったような気がする。

夢のような感じだったのが今は実体を実感するようになった。

(実はこれ物凄いことなんじゃ……)

まあ、それでも誰に自慢できるような状況でもないのが残念だ。

それにしても目的の暇つぶしは達成できたがまた暇になってしまった。

(いや、体もできたことだしこの黒い空間を探索してみるか?)

考えてみれば実はすぐそこに壁があつて壁を壊せば……なんてこともあるかもしれない。

そう思うと俄然やる気がでてきた。どう移動しようか？ 今の状態？ なんか浮いてる感じ。

とりあえず泳ぐ、泳ぐ、泳ぐ。前に進んでるか微妙。

うーん、気を放出できないか？ 出来たらそれを推進力として進めるかもしれない。

とりあえず、丹田で練った気を手に集めてみる。それを手のひらに集め……出ないな。うーん、要訓練かな？

まあ、仕方ない気を足と手に注ぎながら泳いでみようか。

平泳ぎ、背泳ぎ、クロール、バタフライツ！！ と適当に泳ぎながら進む。

今なら世界新をとれる気がする。まあ、こんなところでとったとしても誰にも評価してもらえないのだが。

そんなことを考えながら進んでいるとかなり遠くの方にだが、ぼんやり光つているところがある。

(おおっ！ ただの黒い空間ではなかったみたいだ！)

とりあえず、その光を目指し進む、進む、息継ぎ、進む！　つてか遠っ！

まあ、それでも進むしかないわけで……なぜかはわからないが疲れないのがせめてもの救いかな。

近づけば近づくほど光の巨大さがわかる。やっとのことで少しずつ全容がわかるようになってきた。

(……すげえ)

それは一つの光ではなく何個もの光が線を為してうごめいている。言うなれば光の玉が流れる大河つといったところ。

様々な場所から何百何千もの光が生み出され線を為し一つの線に流れ込み

そしてまた枝分かれして消えていく。それはとても幻想的な光景だった。

しばらくぼーっと眺めていると、ふと一際輝く光生み出されたのが目にうつる。

俺はそれを自然と追いかけた。その光が消える場所へと流れていく。俺はなんとはなしにそれを止めようと流れに手をつ込み流れに飲み込まれた。

流れは強くどうあがいても逃れられそうにない。

(まあ、このまま流れに身をまかせてみるのもいいか)

どうせ、ここに居ても特に何もできそうもないしね。

そう諦めに似た考えをしているうちに追いかけていた光が消えるのが見えた。

追いかけていた俺も当然その消えた地点へ吸い込まれるわけで……

鬼が出るか蛇が出るかはわからないが覚悟は決まった。

南無三つとその消えた点へたどつた瞬間に俺の意識は途絶えた……

そして、次に気が付いたとき俺は赤ん坊になっていた。

え？ どういうこと……？

## プロローグ（後書き）

神様なんて存在しなかったのだ！！

あの世界は運が悪ければ即、死に繋がるような世界なので  
主人公にはチート能力をつけさせてもらいました。

どのような能力かは察しの良い方には気づかれると思われませんが……

## 第一話（前書き）

いざ自分が投稿するとなると緊張しますね。  
どうか寛大な心で見守っていただけると有難いです。

## 第一話

気がつけば誰かに抱かれていた。

もしかして、俺は意識不明の重態で……今、病院で目を覚ましたのか？

いや、でもそんな重態ならば抱かれてる状態はおかしい……  
とりあえず、状況を確認しようと抱いてるであろう人に声をかけようとしたのだが

「ああーっ」

あれ？ 上手く喋れない？ 舌が上手くまわらない。

舌がまずいのか？ もう一度声をだしてみよう。

「ああっ、あうあー!!」

無理っばい。……いや、まじで何この状態？

もしかして、長い間眠ってたとかで舌が鈍ってるのか？

それとも、怪我かなにかでうまく発声できなくなってるのか？

そんな風にいろいろな考えが頭をよぎり混乱してると……

俺を抱いていた人が衝撃の事実を言った



「奥様、よく頑張りましたね!……男の子ですよ」

えつとどういうこと? 奥様? 生まれたばかり?  
誰が? 俺が???

「はあはあ……そう?よかったわ。フー……でも、産まれたばかりの子は泣かないと駄目なんじゃないかしら?」

「いえいえ、大丈夫ですよ、泣かずとも元気に声を出してます。呼吸もすっかりしていますからご安心ください……」

頭が混乱し何がなんだかわからない。

ーから整理しよう とりあえず再確認……もう一度声を出す。

「あー、うー!」

うん、俺が出してるね。声。ってことはこれは俺の声。  
聞きようによっては赤ん坊の声に聞こえないくもない。

「ね」

「うふふ、これだけ元気だと安心ね」

「ほら、抱いてあげてくださいな」

そして、恰幅のいいおばちゃんから金髪美女に手渡される俺。

(おー……なんか落ち着く?)

「こんにちは。あなたの母ですよ。無事生まれてきてくれてありがとうございます」

少し涙声ながらに俺に礼を述べる女性。

混乱していてもわかる。あー、この人が俺の母なんだなとそう頭ではなく感情でわかる。

混乱していた頭もすっかり平静を取り戻し、現状を理解し始める。

俺はやっぱりあの事故で死に、そして、また生まれたのだと……。

そして、今、生まれ　この人が俺を生んでくれた母親なのだ……

…。

安心できる場所　俺にこんなにも簡単に安心させてくれる人。

安らぎを、温かみを与えてくれる人……今、それを得たのだと　。

それを理解したとき俺はあの世界に入ってから隠し誤魔化し封印していた心が爆発した。

「おぎゃっ、おぎゃっ、おぎゃっ、おぎゃっ！」

世界中に届きそうな声で泣き叫ぶ。

そう、やはり不安だったのだと怖かったのだと寂しかったのだと……様々な感情が吹き出し俺にはどうしようもなかった。

やはり独りは本当に怖かった。人に会いたかった。不安だった。話  
がしたかった。

「あら？どうしたのかしらね。よしよしよし、大丈夫ですよ」

そして、また生まれることができて嬉しかった。

また、人と触れ合える。暖かさをくれる。母が抱いてくれるのだ。笑いかけて声をかけてくれる。こんなにこんなに嬉しいことはない。

散々、感情を吐き出したあと　やはり赤ん坊の体力だったのだろう  
そして、やはり人の温もりに心から安心したのだろうか？

俺は睡魔に襲われそのまま母の安らぎにつつまれながらひさしぶりの眠りについた。

目を覚ますと目の前に金髪おっさんがいた。  
思わず叫びそつになる……誰だ？このおっさん……

「ほら、目を覚ましたぞ！みる！私を見てるぞ！！」

「はいはい、そんなに大声出したらこの子もびっくりして泣いちゃいますよ」

「おお、そうだったな。すまんすまん。うんうん、さすが我が子だな。とてもかわいいぞ！」

どうやらこのハイテンションなのが父親のようである。激しくウルサイ。

俺は顔をしかめながら二人をつぶさに観察する。

あのときは気にもしなかったが 母も父も金髪であり目が碧眼であつた。

どうみても西洋人、それも白人に見える。……ホリはそんなに深くはないか？

(……俺も金髪、碧眼なのだろうか？)

どうやら俺はおそらく西洋のどこかに生まれおちたらしい。

……いや、さて。今まで疑問にすら思ってたなかったがこの人たち普通に日本語しゃべってね？

「そういえば、あなた？もう、名前は決まったのかしら？」

「それがなあ。まだ候補がありすぎてまだまだ決め切れないのだよ」

ふーむ、どう聞いても日本語だよな？つてことは血は西洋人だけでも日本なのかな？

なるほど、ここは未来の日本で国際化がだいぶ進んだのかな？

「へえ、例えばどういう名前を考えているのかしら？」

「えつとな、ちょっと待ってる。ごほんっ……………まずは朱雀、そして、青龍に白虎に……………」

ぶーっ！！！！なにそのDQNネーム！！！！

いやいやいや 待て待て待て！無理無理無理っ！！！！！！

俺は体ごと振りながら「ぶーぶー」と必死に抵抗する。

……………ん？ あれ？ 漢字の名前なのか？

「あらあら？気に入らないみたいよ？」

「そうなのか？かつこいいのに……………そうとなると麒麟、玄武とか」

いやいやいや、四神とかから離れよ？　ね？　俺、そんなに立派じゃないから！！！

それにしてもやはり、漢字を扱った名前のようである。

やっぱり、ここが日本だからなのか？　いや、中国という可能性もあるのか？

「これもお気に召さないか……うーん、どうしたものか……神とかいれるか？」

「あなた？　かつこいいではなくて……そう、この子にどういう風に育ってもらいたいのか、どう生きてほしいのか？　そういうことを考えつけた方がいいのではないかしら？」

「おお、そうだな……うん、確かにそうだ」

少し暴走気味だった父を母がたしなめる。

父も落ち着いたのかあごに手をあて母に言われたことを考えはじめる。

（さすがは俺の母上、あなたの子でよかった！　愛してるよ！　母上！）

そんな風に心の中で母を褒め称え熱い視線をおくり

「あーうー」と母に礼を述べておく　伝わってるかどうかはわからないが

母はニコニコと私を眺めているので少しは伝わっているのかもしれない。

そんなとき父がおもむろに

「……この子が生きる時代はとても生きづらいものになるだろう。すでにその兆しがみえはじめている。なればこそ、そのような時代でものびのびと元気に変わらず自然のままに生きてほしい、育てあってほしい。それが俺のこの子に対しての唯一の願いだ」

そう、俺を優しく見つめながら語ってくれた。

父親、うん……初めてやっぱりこの人が俺の父親なのだと感じた。

「そうね。あるがまま……然……然でどうかしら？」

ぜん……然ですか？いやそれも少し……

「そつだな！あるがままに生きてほしい！然とする！　お前の真名は然だ！」

……おおう、決まっちゃった。

でも、まあ母と父が俺のことを真剣に考えてつけてくれたんだ。

父母の想いが……願いがこもった名前である。どんな名前だろうと  
ありがたく受け取るべきだ。

よし、俺の真名は然<sup>ぜん</sup>。然<sup>ぜん</sup>だ！

……ん？ あれ？ 真名？ 真名ってなんだ???

「それでいて思いやりをもった子でいてほしいと思う。だから、名  
を……仁<sup>じん</sup>とする！」

「ふふ、仁<sup>じん</sup>……曹<sup>そう</sup>仁<sup>じん</sup>ね……いいんじゃないかしら？」

二人は何やら心に響くものがあつたのか互いに頷きあい俺を見る。  
そして、父は俺をおもむろに抱き上げ天高くかざし

「お前は姓は曹、名は仁、真名は然だ！ どうだ！ 気に入ったか  
？」

え？ いや、うん？ 気に入った……？

「そうか気に入ったか!!! よしよし、さっそく皆のものに知ら  
せてくる!!--!」



そういうと父は俺を母に預けどこかへ走っていった。

え？ ……曹仁？ え？？ いやいや……まさかね？

……というか中国？？ 金髪で日本語で名前は中国っぽい？？

え？ どこなの？ どこどこ？ ……まじでどこなんだよーっ！！！！

「あーっ！！！！！！」

「あらあら、元気ね。」

俺の叫び声はただの赤ん坊の声として虚しく部屋に響き渡るのだった。

## 第一話（後書き）

転生先は実は魏最強の将と言っても過言ではない曹仁さんです。

いろいろな作品では劉備や曹操を際立たせるために

損な役回りになってしまふことが多い人物ですが……

史実では曹操によく助言をし曹丕にも信頼を置かれた人物である。

作者的になぜ恋姫にいなかったのか不思議である人物その一である。

## 第二話（前書き）

今回は世界設定話です。

ほぼオリジナル設定ですので恋姫原作とは違いかもかもしれません。  
どうか暖かく見守ってくださいな。

## 第二話

おはようございます。然ぜんこと……曹そうじん仁と申します。  
まだまだ赤ん坊です。でも、この世に生れ落ちて早三ヶ月ほどたち  
ました。

いろいろありましたよ。ええ……本当にいろいろと  
嬉し恥ずかし食事タイムやら悲し恥ずかしオムツ変えやら……。

（仕方ないじゃない、だって赤ん坊だもの。）

まあ、それはさて置いて三ヶ月たったわけだが  
俺は自らの疑問を解消するためにいろいろな方法で情報収集を開始  
した。

情報収集といってもただ大人たちの会話に聞き耳をたてたり  
周りを観察するぐらいしかできないのだけれどもね。

それで気が付いたこと、わかったことが数点ある。

まず、一つ目は体のこと。

赤ん坊にしては目がはつきり見え、耳もしっかり聞こえる。

これ自体が産まれたばかりの赤ん坊にしては異常すぎることだっ  
た  
りするのだが

どうやらあの真っ暗な世界で為したことは無駄ではなかったら  
しい。

脳から電気信号らしきものを自由に送れるとどうか己の意思で全てを動かせるというか

俺の意思で体の機能を十全と使える、使いこなせることが可能みたいなのだ。

おかげで産まれてすぐさま混乱した状況を把握するためだろうか？情報を得ようと無意識に目や耳などは強化し発達させていたらしい。

意識してやればかなり遠くまで見えたり聞こえたりもする。

体や声なども同じように動かせたり話せたりはできるのだろうかそれは止めている。

はつきりいっていきなり赤ん坊が立ち上がり普通にはなしたら気持ち悪いことこの上ない。

正直、この世界が、この時代がどういったものであるかわからない限り

鬼子として捨てられたりする可能性がある　あの親に限っては可能性はないと思うのだが

されど、周りはまだ解らないし親に迷惑がかかるのは間違いないだろう。

それとは別にあの世界で操っていた生命力的な何か　これを仮に氣とする。

あの世界と同様、この氣も同じように感じる事ができた。いや、あの世界のときよりもより感じられるように思う。

この世界が氣というものを感じやすい世界なのだろうか？

これは試してみた限りでは体の機能を爆発的に強化するようなものらしい。

例えば、前述の体の機能を十全に使える能力は人間の能力を限界まで引き出せるのに対して

この氣は限界を突破できるのである。この氣を使えば岩や壁なども簡単に壊せるのだろう。

もしかしたら、漫画のように何メートルも飛び上がることも可能かもしれない。

とりあえず、何らかの役には立つだろうと今はこの氣を練る練習を毎日している。

体の機能は制限してるためやれることがすくないのだ……

二つ目はこの世界のこと。

俺の予想はことごとく外れたというべきなのか全て当たっていたと  
いふべきのかは解らないが

どうやらこの世界は言うなれば 古代中華風異世界またはパラレルワールドであるらしい。

自分の名をつけられたとき、曹仁であるということまでまさかな…

…とは思ってはいいたのだが

俺の祖父の名が曹騰そうとうであると判明したとき俺は確信をした。

つまり、この時代は三国志の時代であるということ。

じゃあ、過去の世界　　タイムスリップではなくなぜ異世界なのか  
って？

いやいや、三国志時代の中国に金髪碧眼はないだろう？

いや、いたのかもしれないがそれが曹家なのはあきらかにおか  
しいだろ？

もっと言うならば、食事のときに見ることになったのだが　　あく  
まで食事だぞ？

母がブラジャーをしていた。この時代に明らかに異質すぎるだろう？  
前世の意匠となんら変わらないブラとかあり得なさすぎると思わな  
いか？

だから、今いるこの世界は異世界　　パラレルワールドの一種なん  
だろうと思っている。

三つ目は家族　　曹家のこと。

この家族のことを知れば知るほどこの世界はパラレルワールドなの  
だとよくわかる。

前世では三国志系のゲームなどをしていたのでいろいろ調べたこと  
がある。

……そのときに曹家の家系図はネットでみたことがあるの  
だが

この世界の家族構成が史実とは違いめちゃくちゃなのだ。

さつきいったとおり……あの曹騰せうてんが俺の祖父なのである。

しかしながら、曹仁の祖父はたしか曹騰の兄弟で曹騰ではなかったはず。

んで、俺の親は父が曹熾せうしで母が曹胤せういん。

もう何かが決定的に間違ってる気がする。

俺の記憶が間違ってる可能性もあるのだが……あれ？兄弟じゃなかったっけかこの二人。

俺の記憶違いなのかこの世界だからなのかはわからないがどうやら従兄妹という間柄になる模様。

そして、何より三国志のメインキャラである曹操せうそうさん。それが俺の従姉である。

そう、従姉　女の子なのだ。

……何かの間違いじゃないかと思ったがどうやら事実らしい。

曹操さんの親である曹嵩せうそうさんも女性だったり本当に完全にパラレルワールドである。

曹嵩さんは元々、夏侯嵩かほうそうつまりは夏侯の人である。

曹一門の本家の跡取りさんがそれはあまりにも情けない人らしく



見るに見かねた曹騰さんが優秀だった夏侯嵩に嫁に来てもらい曹一門の本家を立派に支え、引っ張ってもらったことにならしい。

うちの父が後を継ぐという話もあったらしいが兄弟の仲は非常によくそれでは兄に申し訳がたないと断ったらしい。

それはさておき、そう夏侯一族のことである。

曹嵩さんには血の繋がった姪　あの有名な夏侯惇と夏侯淵がいるみたいだ。

うん、姪　やっぱり、この二人も女の子なんだ。

もしかしたら三国志のメインキャラ達は俺以外すべて女性なのかもしれない。

そういう覚悟はしておいた方がいいだろう。いちいち驚いてもらえない。

こういうところがもう完全にパラレルワールドであることをしめしている。

四つ目は現在地と親の仕事のこと。

現在地は豫州沛国？県。父はこの県令という役職をしている。母はその補佐で父を助けているらしい。

この地は都から遠くもなく近くもない。のどかで過ごしやすい平和な地である。

そして、ここが曹家発祥の地でもあるのだ。

そこでここには曹一門の余暇を楽しむ場所として別荘みたいな場所があり

身重の曹一門のものが子を産むためにここで過ごす場所でもある。

曹家、曹家の関係者にとっては重要な場所、拠点であるらしい。

曹操や夏侯姉妹もこの地で生まれらしい。

俺が生まれる半年前に曹操が、その半月後に夏侯惇、夏侯淵が双子の姉妹として誕生した。

つまり、俺より曹操や夏侯姉妹は半年ほど年上になるようだ。

現在は、各々の別宅で健やかに過ごしているらしい。いつか会えればいいと思う。

五つ目、真名という風習について。

どうやらこの世界では真名まなという風習がありとても神聖に扱われているようだ。

真名とは生み親以外は本人が許した相手のみが呼べる名である。

例え、その人の真名を知っていたとしても許しが無い限りは決して呼んではならない。

呼んだ場合は首をはねられても文句はいえないらしい。

つまり呼ばないように心に刻んでおこう。

命と同等に扱われるぐらい重要かつ神聖に扱われており  
簡単に、気軽に真名を許してはならないとまだ赤ん坊の俺にすら言  
い聞かせている。

逆に真名を許されるということは最上級の信頼の証であり  
命すらも預けるといった意味合いを持つのである。  
この世界においてかなり重要な意味合いを持つ風習である。

今わかっていることといえばこれぐらいである。  
俺自身、出歩けない身なので大人たちが会話してるの見聞きし  
自分なりにいろいろ組み立て考察してみた。  
パラレルワールドだったり史実に忠実だったりとわけのわからない  
感じではあるけど

俺はやはりあの曹操四天王の一人の曹仁で間違いないらしい。

自分のことながら何やらおかしなことになっているがあの世界のこ  
とをかんがえると  
こうやって生を受け、今、生きていることだけでも儲け物というも  
のである。  
だからこそ、今生がどんな困難な人生だろうと『生きている』これ  
だけで満足しなければならぬ。

何はともあれ、これから先は俺はどうなるのかどう生きるのかはど

うなるかわからないが

とりあえずは『曹仁』として生き抜いてみますか  
そう、これから生きる未来へと決意を固めていたのだが

「はい、然くん おしめ代えましょうね」

……うん、曹仁として強く生きよう。

そう再度、新たに決意を固めるのだった。あ、母上そこはちょ（ry

## 第二話（後書き）

然くんは三国志の知識にはそれなりのものを有しています。

三国志系のゲームからはまり学生のと看ネットでいろいる調べてた  
ようです。

……私自身がそうなのでこういふ人も多々いると思つのですがどう  
でしょうか？

まあ、あくまでネットの知識なので抜けていたり間違つていたりす  
るかと思ひますが。

曹家の設定と氣に關してはこの世界オリジナルなものだと思つてい  
ただければ幸いです。

### 第三話（前書き）

初の原作キャラ登場の話。

最初の原作キャラはあの人……

ってさすがにわかりますよね？

### 第三話

赤ん坊の生活にも慣れ健やかに過ごしていたある日、なにやら朝っぱらから家中が騒がしい。

何事か起きたのかと耳をすましているとどうやら都から曹騰様祖父がやってくるみたいだ。

ふむ、なんとというか産まれた俺のお披露目らしい。

生れ落ちて半年たち生後も何も問題なかったので皆に俺を紹介しようとのことらしい。

曹操はすでにお披露目済みで一歳になり曹嵩様ももう大丈夫だろうと俺のお披露目のあとついでに曹操を連れ曹騰様と共に都に戻られるらしい。

ふむふむ、曹操親子は都で暮らすみたいだね。

祖父は大長秋というのは宮中を仕切る宦官の長みたいな仕事をしてるとても偉い人である。

まあ、去勢されたりするらしいのだが祖父は子供を為したあとに宦官になったのだろうと思う。

そして、俺は母に抱きかかえられ現在、父と共に移動中である。祖父が到着したようなのである。

「父上、ようお越しになりました」

「なに気にするでない。わしは孫の顔を見に来ただけだ」

お？この爺さんがあの曹騰様なのかな？

白い立派なあごひげに優しそうな眉、しかしながら目は鋭い眼光を放ち

存在するだけで威厳というものを感じさせるたたずまい。

なるほど、確かに宦官のトップなことだけはあるのかもいしれない。

「ほう、この子が曹仁か？」

「はい、おじ様。抱いてあげてくださいな」

俺は母から祖父に渡される。祖父は俺の顔をじっと見つめ一撫でする。

瞬間、何か威厳が祖父からあふれ出しまわりの空気を圧迫する。

何かわからんがやる気か？ゴルァ！！

と俺はそれをじっと見つめ返す。俺と祖父　じじいととの闘いである。

……いや、俺が勝手にそう思っただけだけども。



そして、ほうと声を上げると祖父から威厳は消え口元を吊り上げニヤリと笑う。

「ふむふむ、中々の眼をしよるの。曹嵩の娘といいこの子といい将来が楽しみだわい」

そういつと大声で笑いはじめた　　どうやら気に入られたようである。

闘いは俺の勝利のようだ。などと意味のない優越感に浸ってみる。いや、何がしたかったのかほんとうにわからないんだけどもね。

「さて、広間に行こう。すでに曹嵩達もあつまっているのではろう？」

「はい、皆、父上の到着を待っておいでです」

そついつと家の大広間に皆で移動する。曹嵩さんやら曹操にも会えるらしい。

何気に楽しみだ。どんな子なのかな？　想像がつかない。後の世に『治世の能臣、乱世の奸雄』とも呼ばれる有名な人物である。

小さいころから威厳があるのかもしれない……いや、一歳児に威厳があったら怖すぎるが

「父様、お久しぶりでございます」

「おお、久しぶりだな。元気になっておったか？」

「はい、お蔭様で産後も問題なく元気しております。吉利も挨拶なさい」

吉利……たしか曹操の幼名である。

実は曹嵩さんは、一度、長子を生後すぐに亡くしており曹操は次子に当たる。

長子は閻魔に連れて行かれたとし、だからこそ次子は連れ行かれてなるものかと

阿瞞、吉利などの仮の名で呼び本当の名は隠しているそつだ。

それにしても曹嵩さん、一歳児に挨拶なんてできるわけ……

「おひさしぶりです。おじいさま」

……え？普通にしゃべってる。いやそれどころか何の支えもなく普通に立ってらっしゃる。

おいおいおい、何この子？ すごいとかいうレベルじゃないよね？ それにわずか一歳にしてこの覇気。なんだこれ、大人顔負けすぎるだろ。

「久しぶりじゃな、吉利。もう喋れるようになったか。さすがは我が孫じゃな」

いや、もっと驚こうよ！さすが我が孫どころじゃないよ！万国びつくりシヨーだよ！

「ほれ、この子がお前の従弟になる仁じゃ。お前の弟みたいなものだ見てやってくれ」

そういつて俺を曹操の目線までもっていく。

驚いてる場合ではない俺も改めて後の英雄の顔を拝ましてもらいますか。

俺と同じ金髪の髪を両側に　いわゆるツインテールにし少し癖があるのか縦ロールとなっている。

目はこれも俺と同じ碧眼、少しつり眼ではあるがかわいい顔立ちをしている。

うむ、まごうことなき美少女である。絵になっている。

そんな彼女はなぜか俺をみて眼を見開いている……

俺の顔に何かついてたりするのだろうか？

そして、何やらうなづいたあと俺に笑顔を見せながら

「はじめまして、あなたがじんなのね。ふふ、かわいらしいものね」

……とのたまった。これが一歳児のいう言葉なのか？  
なんか物凄いやというかなんというか強烈な一言である。  
とりあえず、俺も挨拶を返さねば心を込めて言葉を発する。

「あぶー」

すいません。今はこんな言葉しか返せません。申し訳ないです。

「あら？ありがとうございます」

どうやら伝わったようである。やっぱり、挨拶は心だね！  
心を込めればどんな言葉でも伝わるものだよ！

……それにしても気になることがある。

この女の子 曹操とどこかで会った気がするのだ。

いや、実際生まれてから一度も顔をあわせたことがない。  
しかし、どうにも初めて会ったようにも思えない。

記憶を辿るがやはり会った記憶はない。

生まれる前か？ 前世？

いや、こんな美女なら前世でもはっきり覚えてるはずだ。

あの世界か？ でも、人は存在しなかった。

いや、待て。

もしかしたら……あの大きな光か！

そうだ！あれだ！見た目ではなくて感覚が覚えている。

この美幼女からあふれ出す生命力があつたの光に似ているのだ。

なるほど、あの光はもしかしたら曹操の魂だったのかもしれない。

そして、あの大きな川は輪廻の……そう考えるといろいろと辻褃があつた。

俺は死んだときあの輪廻の川から外れてしまっていたのだろう。

そして、なぜか意識が存在し魂のまま彷徨っていた。

つまりは魂の形を変え体を作り上げてしまったのかもしれない。

そして、あの大きな川で流れる曹操の魂の輝きに惹かれ

着いていつてしまったため曹操の近いもの 曹仁として生れ落

ちたのかもしれない。

「なにかたのしそうね」

そういうとニコリと笑い俺の頬をひと撫でした。

うん、ありがとう。君のおかげで喉につかえてたものがとれた感じ  
です。

いや、ある意味で彼女のおかげでこの世に生まれたのかもしれない。  
俺は彼女への感謝の気持ちをごめて彼女の手をぎゅっと握る。

「あらあら、然くんは吉利ちゃんがお気に入りみたいね」

「そ、そうかしら？」

母のそんな一言に吉利ちゃんは頬を染める。うむ、実にかわいらしい。

そんな風に美幼女を堪能していると俺は再び母に抱きかかえられた。他の親族にも挨拶をするために連れて行かれたのである。

会ってみたかったがさすがに夏侯姉妹はいなかったみたいだ。

一通り周った後、宴会をするので俺は寝室につれていかれ食事タイム。

そして、布団へ寝かしつけられた。まあ、さすがに赤ん坊が宴会できるわけではないわな。

俺は寝た振りをし、母が出ていくの確認した後、今日会ったことに考えを巡らせた。

（さすが曹操だな。一歳児なのにしっかりしてる。いやしすぎてるのか？）

この世界の人はある意味特殊なのかもしれない。

恐らくは曹操は自然と氣というものを上手く扱っている。

だから、一歳児にしてあのたたずまいなのだろう。

恐らくこの世界は氣というものが発達した世界なのかもしれないな。

ん？ ……ということは俺、別に隠さなくていいんじゃない？

一歳児で歩き回ってることだし、俺も同じことできたんじゃない？

あれ？ 隠そつとしたのって完全に無駄な努力だったのか…？

まあ…一歳児ぐらいで動きまわっても変に思われないとわかっただけでも収穫だ。

明日から急にというと変に思われるだろうから徐々に体を動かしていこう。

歩いたり話したりできればいろいろ行動範囲も広げることができるだろう。

そんなことを考えるうちにだんだん睡魔が襲いかかってきて俺は眠りについた。

あれから数日、祖父は何度か俺を見にきたのだが  
他の親族とは会うこともなく俺は変わらず寝所でゴロゴロ過ごしていた。

それからしばらくして祖父と伯母達 曹本家の人たちが都へ帰っ

たらしい。

どうやら夏侯姉妹たちも将来、曹操の従者とするために一緒に連れていくことになり

夏侯姉妹とは一度も会うことなく別れることになった。

（同じ曹操四天王って呼ばれてる夏侯姉妹には一度会ってみたかったな）

惜しいことをしたような気分になったが仕方がないことである。

いずれまた何処かで会う機会はあるだろう。そのときまで楽しみにしていればいいのだ。

それまで俺はどんな風に成長しているだろうか？

そんな未来を夢想しながら今日も母上におしめをかえられていた。

うん、もう慣れたよ



### 第三話（後書き）

スーパーチート幼女、華琳さん登場。一歳児で一人で歩き流暢に話しております。

ある意味、そんじょそこらのオリ主を超えております。

幼名に関してのことは史実やらをぐちゃまぜて適当にでっちあげてます。

幼名つけるのが一般的な場合、曹仁とかにもつけなきゃですからね。さすがにぶっちゃん曹仁とかの幼名は知らないもので……

ともあれ、夏侯姉妹とは会えずに華麗に去っていきました。いつかまた会えることでしょう。

## 第四話（前書き）

恋姫の設定が頭からすっぽりぬけてる部分が存在した。

もっと確認しなければ駄目だなと猛省中。

なんかあれば感想欄で知らせていただけるとありがたいです。

## 第四話

あれから一年がたち俺も生まれて一年半になる。

曹操たちが都へ発った次の日から俺は徐々に体を自由に動かすようにした。

まあ、本当ならすぐに立ち上がり歩き回ることもできることはできるのだが

さすがにそれは異常すぎるだろうと初めはゴロゴロ寝返りをつち動けることを周りにアピール。

次の週にはハイハイをし動きまわる。そして、さらに次の週には掴まり立ちを披露した。

すべて母親がいるときにしているため、たいそう喜んでくれた。

あまりに喜んでくれるので初めの言葉も

「はー」

と呼んでみた。初め母上は物凄くびっくりしたような顔をし次に顔をほころばせ

とても綺麗な笑顔をみせてくれた。

(うわぁ……この笑顔たまらん。父上あんたうらやましますぎる)

母上はいつまでもなく美女である。

前世の世界ではアイドルとして活躍していてもおかしくはないほどに……

そんな美女のスマイルである。それだけで幸せな気持ちになる。

その後も何度も母上に催促されるので何度も何度も呼んであげた。うんうん、その笑顔見れるだけで俺も満足だよ。

「父!!!ちちっ! ほら、ちーちー!!! ほら父ですよー!」

横で必死に頑張ってる男がうるさい。いや、嫉妬じゃないよ? こんな綺麗な母上を嫁さんにした男なんて イケメン死ねとか思っ  
つてないよ?

うん、この父上……物凄くイケメンなんだ。でもなんか残念なんだ。まあ、俺を愛してくれているのは確かだし、いい加減うざいので軽く

「ちち?」

そう呼んであげると飛び上がるほど喜びどこかへ走っていった。おいおい……

やはり、イケメンだけど残念なのである。

「あらあら、しょうのない人ね」

母上も少し呆れているようだ。それにしてもこの母上、何事にも動じないな。

なんともいかものすごくのんびり屋さんというかすごく大人というか……

父と比べてすごく大物な感じがする。父と比べては失礼かもしれないけどもね。

それにしてもあんなのでよく県令をしていられるものだ……

母の補佐が思いのほか大きな役割をしているのか？

いや、父も仕事になると変わるのかもしれない。

きっと、昼間の父はちよつと違うのだろう。おそらく……たぶん……

そして、今は母上と一緒によちよちと歩きまわってます。

吉利ちゃんという前例があったからなのか俺も別に不審に思われずにすんでいるようだ。

本当にいいのか？ それで……？ 俺が言つのも変だけれども……

まあ、そのおかげで歩きまわれることができるのだけど

それにしても我が家とはいえなかなか立派なお屋敷である。日本人だった頃とは大違いで広い庭まであったりする。

「ははうえ、あれはなに？」

「あれはね〜」

疑問に思うことがあれば即座に聞くことにしている。  
この世界の常識が未だにわからないこの身の上では  
聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥なのである。  
まあ、一歳児が聞くことは恥でもなんでもないんだけどね。

「然くんは勉強熱心ね」

……てなもんである。

そんな風にこの世界の常識や知識などをめきめきと吸収していく。  
子供の脳みそだからなのかあの能力のおかげなのかはわからないが  
物覚えや理解力は前世よりは数段によく感じる。  
頭の中がすつきりするというか整理しやすく理解力もあり昔の自分  
を思い出すと  
なんでこんなに簡単なことができなかったのだともどかしく思うぐ  
らいである。

そんな風に母上とのんびり散歩をしていると前から父が走ってくる  
のが見えた。

父上は走らずにはいられないのだろうか？

「あらあら、どうしたの？そんなに急いで……」

「ハアハア、ここにいたか！産まれたらしいぞ！」

「あらまあ、それはお祝いしなくてはいけないわね」

どうやら前から身重でこちらに滞在している曹鼎さんに待望の子が産まれたらしい。

曹鼎さんは父の妹にあたり俺の叔母にあたる人だ。

「それでどちらだったの？」

「元気な女の子だ！」

どうやらまた女の子らしい。

さて、この女の子が誰に当たるのやら。曹鼎さんという名には覚えはない。

名前を見たことはあるのかもしれないが思い出すことができない。しかし、曹家で俺の同年代というとは限られてくるだろう。

「すでに名も決めてるらしい。洪こうだそうだ」

「曹洪……うん、いい名前ね」

やはり、曹操四天王の最後の一人である曹洪その人である。

これで曹操四天王は俺以外全て女性であることが決定してしまった。  
った。

一人ぐらいは……と期待していたのだがそれも叶わぬ願いとなった。  
前に危惧したとおり有名どころは全て女性なのではないかと不吉な  
予感が頭をよぎる。

「然くん、よかったわね。あなたより年下だから妹ができたような  
ものね」

「いもうと?」

「そう、妹よ?ちゃんとかわいがってあげなさいね」

おお、前世では一人っ子だったので妹という響きはなんだか新鮮で  
ある。

実の妹というわけではないがなんだか嬉しいものだ。

いつ会えるのだろうか? 今すぐというわけにはいかないだろう。  
一応、聞いてみると……



「うーん、今は会えないけど落ち着いたら一緒に会いにいきましょうね」

やはり、しばらくは会えないらしい。

この時代、無菌室やそういった設備そのものが存在しない。

だから、菌という概念がなくとも今までの経験則から

産まれたばかりの赤ん坊をあまり人と接触させないのだろう。

それもまた仕方ないことである。

子供が生まれその後、無事育つということはこの時代では難しいことなのである。

曹操の兄のように産まれてすぐに病にかかり亡くなるなんてケースはこの世界ではよくある話の一つにすぎない。

産まれたばかりの曹洪が無事に育つことを祈らずにはいられない。たとえ、史実では成人まで生きていた人物だとしても不安になる。この世界はパラレルワールドなのである。史実の通りになるなんて保障はなにひとつない。

「それじゃ、今日はこれぐらいにしてお部屋にかえりましょうね」

そういつて部屋に戻りまた布団に寝かすつけられる。

このぐらいの歳というのはよく眠らなければいけないらしい。

眠る前に日課となった気を練ることを忘れずにする。

気がすばやく練られるようになった。……何事も積み重ねが大事だ

ね。

日課が終わると睡魔が襲ってきたので今日はこのまま寝ることにする。

義妹がどんな子を想像しながらそして、無事でありますようにと願いながら

俺は徐々に深い眠りに誘われた。

後日、俺の願いが叶ったのか無事、曹洪に会うことができた。母に連れられ見た曹洪はそれは可愛らしい女の子だった。

まあ、赤子は皆かわいいものなのだろうけど……

それにしても曹家は皆、金髪なのか？俺も金髪だし……  
西洋の血が流れてるといっわけでもないらしい。

……というのもこの世界では髪の色は比較的多種多様である。

どういった原理なのかはわからないが青髪や緑髪といった髪の色も存在し

この前などはピンク色の髪をした女性を見る機会があった。

見たことはないがピンク色の髪の男性も存在するのだろうか？

そんなことを考えながらジーツと洪を見つめているとニコッと笑顔  
顔を返してくれた。

物凄く和む。赤子はいいものだ。見ているだけで幸せになる。

俺を見つめながらキヤツキヤと笑うこの子を見てどんな娘に育つか  
はまだわからないが

この義妹を教え導き守るためには俺ももっと頑張れねばなと自分に  
活をいれる。

そんな俺の姿を両親は生暖かく見守っていたのだった……

#### 第四話（後書き）

曹操四天王の最後の一人、曹洪さんです。曹仁の従妹としました。他にも史実には曹休や曹純といった人がいますが

曹一族としてのメインキャラは曹洪さんで打ち止めとさせていただきます。

理由としては作者が絶対に混乱するためです；

だから、曹洪さんには後々いろいろな役割を担ってもらおうかと思えます。

## 第五話（前書き）

原作キャラクター二人目。  
例のあの人です。

## 第五話

生まれて六年も経つといろいろな変化が起こる。

例えば、親の監視というものがほぼなくなる。

つまりは一人の時間を得られるということ。

母も今では政務に復帰しており一人の時間が比較的増えた。

それでも、幼い義妹の面倒を見ることが多いので完全に一人というのは中々にないのだが……

そして、何より文字の習得である。

話し言葉が日本語なのにこの世界での文章は漢文であったりする。

どうやら平仮名という文化はなく変なところは古代中国に準拠するらしい。

まあ、これでも前世はそれなりの大学まで出た身である。

そして、今世は前世よりも記憶力、理解力などは勝っているのだ。あつという間に文字は習得できた。

親はかなり驚き　父はまたどこかへ走り去ったりしたが　とても喜んでくれた。

文字を習得するとできることの幅が広がる。

例えば、読書である。今まで伝聞で得ていた知識が本からも得ることが可能になった。

これは己の世界をさらに広げることが可能になるということ。

父曰く、いろいろな知識を仕入れておくことは将来の糧になることとらしく。

曹家の書庫を開放して普通の人には読むことができないであろう本まで読ませてくれた。

いろいろ手配してくれた父にはとても感謝している。

しかし、官能本は子供の目の届かない場所においてくれると助かるのですが……

そして、手紙を書き読むこともできる。これも情報を得る一つの手段である。

今ではたまに都に住む曹操と手紙のやり取りをしている。

どうやら都では袁家の息女である袁紹　やはり女性である　と  
友誼を結んでいるらしく。

二人でいろいろ若さゆえにやんちゃなことを仕出かしているらしい。  
今は家のしがらみも少なく悪友として付き合ってるのであろう。

たまに詩のような表現も見られ彼女は芸術に関してもチートなのかもしれない。

得られる知識の幅が広がったことでわかったことが数点ある。

気については推測交じりだがある程度理解することができた。

気は一般的には気功のことで治療などに用いられることが多い。

後は発勁といい気を発し相手を攻撃する者も存在し達人にもなると  
気弾を飛ばし相手を吹き飛ばすことも可能なのだそうだ。

リアル格闘ゲームですか……俺も練習すればできるのかもしれない。  
それでも自分のように体内の気を自由に操ることは難しいらしい。

発勁や気弾というものは練った気をそのまま放出するものであって操  
っているわけではない。

体内の気を無意識に扱って強化しているのが普通らしい。

気というのは己の実体験を踏まえると掛け算である。

元々の腕力が5なら気で10、10ならば気で20になる。

そして、気量は人によって違い掛ける数が2の人かもしれない5の人

いる。

同じ腕力が5でも掛ける数が多ければ多いほど力の差がでてくるということである。

まあ、それでも0はどこまでいっても0だし1にどんな数字を掛けたとしても少ないのだが……

曹操などはこの氣の量が馬鹿でかい。意図せず漏れ出すほどに……。そして、曹操自身のスペックも高いのだろう。しかもその才は偏らず全てにおいて発揮する。

それが莫大な氣によって掛け算されるのだ。まさにチートここに極まりつといったところだろう。

そして、人を観察してわかったことがある。氣の量は男性より女性の方が多いのだ。

つまり、腕力が乏しい女性の身でも氣というファクターが加わることで男性と対等になるわけだ。

故に、この世界では女性蔑視、軽視といった概念が少しはあるみたのだがほぼないと言ってもいい。

俺の前世である世界においては氣というファクターがなく平均的に言えば腕力は男性が勝ってしまう。

だから、男性は闘い女性を守るという概念が生まれたのであろうがこの世界においてそれは通用しない。

何しろ女性と男性の力関係が同じなのだ。むしろ、男性が女性に守られることもある。

そういったわけで女性が家長になったり上に立つことに対して誰も違和感を覚えないのである。

話は戻るが氣というものは何も身体能力を上げるといふ単純なものではないようだ。



脳に廻せば回転が速くなり体中から漏れ出ればそれは威厳やカリスマといったものになる。

うちの母や父などは頭に氣がよく流れている。要するに頭脳派といったところだろう。

かといってどちらかと言えばという話で腕力がないわけでもなく身体能力も底上げしているのだろう。

さて、そこで俺のことだが……前述からわかるように氣が自分のものも他人のものも見える。

自分の氣を一から探したからかどうかかわからないが氣というものを敏感に感じるができる。

その人の氣の流れや氣の量まで解るのだ。これは一つのアドバンテージである。

要するに氣の量や流れでその人物が有能か何にむいているのか確実ではないが解るといふもの。

それと、人は大小はあるが氣を必ず持っているのでそれを頼りに限られた範囲内ではあるが人を探知できる。

要するに、漫画みたいに「む、誰か来た」と気配を察知できる優れたもの。

これは親が部屋にくるのを部屋に入る前に感じ取れるのでかなり重宝している。

そして、最後に氣の量だがこれは生まれもつての才能がものをいうらしい。

年齢の増加によって増える量の方が多く人為的に増やすことは難しい。

ただ、増やすこと自体は可能ではある。可能ではあるが少量の増加しか見込めない。

氣を増やす方法としては氣を使いきり倒れるように眠り超回復させるといった方法がある。

だが、前述の通りこれでも少量しか増加しないのだ。

まあ、チリも積もればなんとやらなのでやってはいるが……

そして、自分が毎晩やってる氣を練ることでは氣の増加はみられない。

ただ、決して無駄であったというわけではなく氣を自由に操るのに最適な訓練方法だったみたいだ。

例えば、氣が10必要ならば10を15必要ならば15をとった風に氣の分配の最適化ができ

無駄な氣を使わなくてすみ氣の省エネ化といった利点があったようだ。

これならば氣の無駄を省くことで氣の量が相対的に増えたことになる。

では、あとはどうすればいいのかといえば……

(ソフトがダメならハードを鍛えればいいじゃない)

つまり、ハード 身体自体を鍛えればいいのである。

自分の利点といえば氣の量は女性並であるのに男性であること。筋肉も体力もつきやすい。

そして、自分だけの利点といえば自らの意志だけで身体の全てを手や足、さらにいうならば筋肉や内臓、血の流れでさえも操れるということ。

体を鍛えるにはもってこいの能力であることには間違いない。

まだ、自分は六歳であり近くの山を駆け上がり駆け下りる程度では

あるが……。

まあ、知識を仕入れ体を適度に鍛えるといった日々を過ごしている。そんな自分にも現在、友と呼べる人物が出来た。

「おーい、然！ また山にいこうぜー」

「なんだよ。凱。また薬草でもとりにいくのか？」

赤毛の熱血少年 凱である。何を隠そう将来の伝説の名医とよばれる華佗である。

熱血具合といい名前といいなんと獅子のサイボーグな人を連想させるのは仕方のないことだろう。

彼はこの町生まれである。そういえば、歴史上でも彼はこの町に本籍があつたようではあるが……

なんとというか有名な人物は全て女性であると思ひ込んでいた俺には衝撃の事実である。

あまりに嬉しくて初対面でいろいろ話しかけ年齢も近いということもあり意気投合し真名を許しあつたのだ。

「ああ、薬草がまた切れちまってな。また手伝ってくれ」

そう、彼はこの歳 俺の一個上になるが でもう薬学を学び医療の道を志している。

彼の両親も医者であり彼も両親から医学を吸収している最中だそう  
だ。

将来は五斗米道を極めるため漢中に修行に行きその後各地を放浪し  
病に苦しむ人を助けたいのだそうだ。

いまは、薬草の調合の勉強をしているらしく、度々山にはいる。そ  
こで俺とも知り合ったわけだが……

「いいよ。いろいろ勉強にもなるしな」

俺も彼から薬草の生の知識を仕入れている。

本でも知識を仕入れられるのだが文字でしか書かれずあったとして  
も挿絵なのだ。

写真などの技術がない時代では実物を見れる生の知識は大切なので  
ある。

それになにより、周りが女性ばかりの俺にとっては男友達というも  
のは貴重なのだ。

「そうそう、またいろいろ聞かせてくれ。然の話はかなり役にたつ  
からな」

俺は彼の将来に少しでも役に立てばと前世での医療知識を教えてい  
る。

まあでも、俺の前世は医者というわけでも専門というわけでもない  
ので一般的な医療知識である。

あまりに荒唐無稽なものは妖術やら何やらと言われ忌避される時代  
である。

この世界の医学というものは薬草などの処方などによる漢方、氣を用いた氣功によるものがある。

要するに体を漢方により元気にし氣で生命力を活性化させるといったものである。

彼の五斗米道という宗派は針で体を突き氣を流しこみ病魔を倒す。

まあ、氣の流れが悪くなっている所を活性化させるといっものだろう。

俺が教えたのは目に見えないほど小さな生き物　菌が存在すること。

それが体に入り込み身体を蝕み病になるといった概念である。

そういった菌は生き物の死骸や腐ったものから生まれだすこと。

そして、どこにでも存在していること。そして、大概のものは熱に弱いこと。

故に医療に携わるものはまず清潔を心がけるべしといったことである。

彼は目から鱗が飛び出すように感動しそれ以来いろいろと聞いてくる。

「それにしてもどこから仕入れてくるんだ？　そんな知識……」

「秘密だ。まあ、西のさらに西……遠い場所からきた情報だといっておこうかな？」

もちろん、嘘である。彼はそれを鵜呑みにしてくれている。

まあ、前世でとか別の世界のとか言う方がおかしいと自覚しているので仕方がない。

いずれ彼が放浪したときに各地にそれとなく知識を披露していけば

医学は発展していくのかもしれない。  
他人任せかもしれないが俺の手はそんなに広くはなく何でもできるわけではない。  
これに関しては一介の県令の息子より実際に医師として治療を施す彼の方が信憑性が増すというものだ。  
俺は別方面で彼の手助けをすればいい。人には人の役割というものがあると思うのだ。

「おい、あの木の上のやつとれるか？」

「おう、まかせとけ！」

こういった風である。俺は木をすすると登り目的のものを獲り彼に渡す。  
身体能力が同年代と比べ優れてる俺だからこそできることも存在するのだ。

「ありがとな。……っとこれは磨り潰して飲めばお腹の調子を整える効果があるんだ」

そして、彼は持ってきたものをどういった用途で使用するかを教えてくれる。  
互いの能力をいかした持ちつ持たれつの関係であるのだ。

山というのは何も薬草や木の実、キノコといったものだけが存在するわけではない。

何が言いたいかというと動物である。兎や鹿などならまだいいのだが熊や虎といった猛獣まで存在する。

「凱、あつち駄目だ。迂回してこっちの道をいこう」

「わかった。熊か？」

「いや、虎っぽい気がする」

こういうとき氣の察知能力に助けられている。生物である限り氣というものが存在するからだ。

これのおかげで猛獣と遭遇するということはないので凱も俺を頼りにしてくれている。

目的のものを全て入手した俺たちは山を降り彼の家で実際の調査をみせてもらう。

凱自身もまだまだ修行中の身であり時折失敗はするのだがそれも仕方がないだろう。

出来上がった薬などのいくらかは俺の取り分として俺に渡してくれる。

まあ、俺はそれを母に町の皆に役立ててくれるよう渡す。

母はあまり山に入ることを快くは思っていないのだがこうして人の為になることをしているのだ

「あんまり無茶なことはしては駄目よ。危ないと思ったたらすぐ引き返しなさい」

……というに留まっている。理解のある親でとても感謝している。実際に俺の渡した薬などは貧しい人たちに無料で配りたいへん感謝されているようだ。父も母も喜んでくれている。前世においての親には親孝行と呼べるものはできなかったのだから。あの後悔を二度と味わわぬように今世ではなるべく親孝行をしようと心がけている。この時代、親にしる俺にしる本当にいつ死ぬかなんてのはわからないからだ。

（厳しい時代に産まれたものだな）

だからこそ、俺は知識を詰めるだけ詰め、身体を鍛えるだけ鍛える。家族を守るために、知り合いを守るために、己を守るために。そう、誰かを助けたとしても己が死んでしまつては意味がない。前世において俺が後悔したことはその一点である。親を悲しませ親に何も返せないままいったことが唯一の後悔である。

（絶対に今世では生き抜いて生き抜いて生き抜いてやる！）



日々を生き、皆と過ごし、この世界で暮らし、この世界のことを知れば知るほど

自分の中に信念や覚悟といったものが徐々に固まっていくながら、あつたあつたの狂おしいほどの後悔を二度としないために

## 第五話（後書き）

華佗って勇者王世代にはやっぱり凱ですよ。原作でもパロってますし。

華佗さんは産まれた場所はどうかはわからないけども

彼の本籍も沛国？県。曹操たちと同じだったりするんですね。

ゆえに捏造して幼馴染として登場させてみました。

## 第六話（前書き）

連日投稿とは難しいもので……  
のんびり自分のペースで投稿していきたいと思えます。  
どうかよろしくお願いします。

## 第六話

出会いもあれば別れもある。

九歳という年齢に達したある日、一つの別れが待っていた。

「行くのか？」

「ああ、俺は俺の目指す道に行く」

遠くを見つめ拳を握っている熱血少年　凱こと華佗が漢中へ修行に行くのだ。

彼は年齢的に言えば俺の一つ上で十歳になる。

十歳にもなると彼は「元化」という字をもらい成人に一步近づいた。

名前というものは前世では姓名のみであったがこの世界では複数もつ。

例えば、華佗。彼は姓は華、名を佗、字を元化、真名を凱という。

姓は彼を華一族であるということとを証明するもの。

名というものは親族や親しいものが呼ぶものであり字とは公的な呼び名である。

そして、真名というものは命と同じぐらい大切なもので

それを預けるといことは命すらも預けるといったことと同義である。

親以外の親族ですらも許可なしには呼ぶことは許されない神聖なも

のである。

この世界に置いて名前というものがどれだけ重要視されているかわかる。

字は仕事をするうえで公的に呼ばれるものであり成人し職につけば必要になるものである。

中には字をつけずに名をそのまま公的に使う者もいるが稀である。だから、字をもらうということは大人に近づくということと同義であるのだ。

まあ、貰ったからといって即成人であるというわけではないのだが……。

「……もう一生会えないというわけではないだろうか？」

「そうだな。修行の間は会うことはできないが放浪の旅をするときには会いに行こう」

「約束だぞ？ 物騒な世の中だし……気を付けていけよ」

「大丈夫だ！ まかせろ、俺は死なん！ きつとやり遂げてみせる」

目から炎がでてるように見える気がする。

あいかわらずの熱血ぶりである……でも、まあ……

「その熱血ぶりが見れなくなるなと思うとさびしいな」

「俺も子供の癖にその妙に達観したような顔をみれなくなると思うとさびしくなるな」

そんなに達観しているようにみえるのだろうか？

たしかに、精神年齢はそこらの子供にくらべりや雲泥の差かもしれないが……

「いろいろ世話になったな！ お前から教えられた知識、必ず人の役にたたせてみせる」

「ああ、頼むよ。……じゃあな、また会おう、凱！」

「おう、また会おう！ 然！」

最後に俺たちは笑顔で大切な真名を呼び合い約束をした。必ずまた会うのだと……。

そして、彼は両親にも別れを告げ商人とともに漢中へ向かっていった。

しばらくして、彼の両親から彼が無事に漢中に着き修行を開始した

ことを聞いた。

何はともあれ無事つくことが出来て一安心である。

彼の修行がうまくいくことを祈っておこう。

さて、俺は俺で日々を忙しく過ごしている。

最近では父や父の部下とともに狩りを教えてもらっている。

この世界においては娯楽の一つであり食料調達の一つでもある。

狩りをする事 動物とはいえ命を奪うということに忌避感はないが、  
あまりない。

相手が人間となるとそれはまた別のことなのかもしれないが……  
元現代人としてはそれはおかしいのではないかと思われるが現代人  
とて他の命を糧に生きている。

それに現代人だからといって他の命を奪った経験がないというわけ  
でもない。

前世において俺が生まれた場所は都会というわけでもなく  
ものすごい田舎というわけでもないが近くに山があり川や海もある。  
子供のころはその川で釣りをしそれを焼き友達と一緒に食べたもの  
である。

父の趣味が海釣りということもあり休みの日には海で釣ってきた魚  
を家に持ち帰ってくる。

そして、それを父とともにさばく手伝いをよくさせられた。

生き物というものは他の命を奪い日々の糧にする。

「だからこそ、命を頂いたことへの感謝を忘れないようにしなさい」

そう祖父母や父母には教えられた。前世の家族には本当に感謝の念がつかない。

彼らのおかげでこの世界でも充分やっていけるのだと……

そして、同じ事をこの親からも教えられた。俺は家族にはとても恵まれていたようだ。

まあ、狩りといっても初めは本当について見るだけだった。

ただ見るだけでも勉強にはなる。弓を放つ動作　手や腕の動きなどを観察する。

俺は能力によりイメージ通り身体を動かせる。逆に言えばイメージが大切なのだ。

イメージを固めるためにはやはり見ること　熟練の扱いを観察することが大事なのである。

そして、狩り休憩の時間に父に許可をもらい弓の練習をすることにしました。

「然にはまだまだ早いよ。ほら、人のいない方……あの木に向かって撃つてごらん」

父はやはり失敗すると思っっているようだ。まあ、当たり前のことだが……



普通ならば弓なんてコツがいるものを初心者　ましてや子供が簡単にあつかえるものではない。

(そう、普通ならばね)

俺は目をつぶりさきほどのイメージを反芻する。

俺は俺の意思どおりに身体を動せることができる。

つまりは俺の意思力　イメージがとても重要なのだ。

そして、イメージができたらもうそれは射たっているも同然。

イメージも固まり左手で弓を持ち、右手で矢をもつ。玄に弓をかけた引き始める。

足りない力は氣で補う。イメージ通りに筋肉を動かし玄を引き絞る。

狙いを父が言っていた木に定めそして、矢を木に向け放つ。

矢はイメージ通りの弾道を通り木に突き刺さる。

もう一度。

同じような動作で矢を番え放つ。番え放つ。番え放つ。

三度放った矢は自分の狙い通りの場所にささった。

(不安だったけど実際やってみるとできるものなんだな……)

ふと、周りを見てみると大口をあけて呆然とみている大人たち

(やべっ……やりすぎたか?)

ちよつと背中に冷たい汗をかきながらさてどつこまかそうかと思案する。

だが、そんな思考に関係なく

「おお！ さすが私の息子！ 一発で弓を扱ってみせるとはな！」

「あ、ああ、いえ……すばらしいお手本となる人たちがいましたから」

そういつて父やその部下たちを見回す。

いや、本当に彼らはいい腕をしていると思う。

「ハハハッ、坊ちゃんは謙虚ですな？ 熾殿。これは将来が楽しみですな」

「うむうむ、俺の息子だからな」

「そうですな、さすがは胤殿の息子でございますな」

「おいおい、そこは俺の息子だからだろ？」

とお互い冗談を飛ばしながら笑いあっている。上司と部下の関係も良好のようだ。

まあ、驚かせはしたけど引かれはしなかったのでよしとする。

その後、休憩も終わり……俺は弓で狩りをするときの注意を受け狩りに参加することになった。

だが、矢は狙い通りに飛ばせるものの獲物にはあたらない。当たり前のことだが、獲物は木の的と違い動くのだ。

「坊ちゃん、坊ちゃん」

「あ、はい。なんですか？」

「どっちら苦戦してるみたいですね」

「そうなんですよ。やはり、動く相手にあてるのは難しいみたいですよ」

「その通りですよ……相手は動きます。だからこそ、呼吸を読み、

先を読み、そこを狙うのですよ」

なるほど、呼吸を読み、先を読むか……  
確かに俺は自分の矢をあてることをイメージするだけで相手の動き  
まではイメージしていなかった。

「助言感謝します」

「いやいや、気にせんでください。ほら、ちょうどあそこに兎が

」

俺は兎を見る。観察する。……相手の動き、氣の流れ、呼吸全てを  
つぶさに観察する。

そして、次にどう動くか予測しそれをイメージする。  
矢を番え狙いを定める。大切なのは呼吸。吸う吐く。兎の呼吸を読  
む。

兎は息を吸い吐く、吸い吐く、吸い吐く、吸い吐

(今っ!!)

兎が息を吐いた瞬間を狙い矢を放つ。

さすがは小動物、本能からか兎はこちらの氣に気づいたのか動こう  
とするが

それはわずかに遅い、俺が放った矢は寸分たがわず兎の頭を貫いた。

「やりましたなっ！坊ちゃん初の獲物ですぞ」

「いえ、あなたの助言のおかげですよ。」

そついい矢がささった兎に近づく、それは既に絶命していた。

罪悪感というものはあるが俺は俺の糧になるこの兎に感謝する。

俺は兎を父たちに渡し、そして、血抜きなどの処理の仕方を学んだ。

その後も鳥や兎などを狩りそろそろ日も暮れるだろうということので  
山を降りた。

そして、狩ってきた獲物はさばき調理し家の食卓に並ぶ。

それを心から感謝の念を込め「いただきます」と丁寧に手を合わせ  
食す。

あまつた肉などは部下や領民などに振舞われた。

今日はいろいろ学ぶことがあった。

弓の扱いや相手の動きを読むということ……そして、命を奪うとい  
うこと。

今はまだ狩りとして食料の調達として日々生きる糧として命を奪う  
ことしかないが

いずれ、人の命を奪う日がくるかもしれない いや、確実に来る  
だろう。

家族や友を守るため、己が生き延びるために……

いつかくるその日のために俺はさらなる覚悟を決めなければいけな

いのかもしれない。

ただ、今は今を懸命に生きることしかできない……しかし、いずれはきつと

## 第六話（後書き）

華佗さんは本来、徐州で学ぶらしいのだけど五斗米道ということで漢中あたりに修行という形にしました。字をつけ方は捏造です。

命に関しては賛否両論あるだろうけど釣りとかしますよね？

海釣り云々は実は俺の友達の話で「魚、捌かなきゃいけないから待つて」とよく待たされた覚えがある。

違う友達のうちは養鶏所をしております子供の頃から鳥をしめてたそう  
な……

俺自身も仕事で肉を扱っており慣れてたりする。

だから、現代人だからといってそこまでやわじゃないぞって人も多数いるんじゃないかと……。

## 第七話（前書き）

曹仁は若い頃から弓馬と狩りを得手としていたらしい。

それにしても動きのあるシーンは難しいね。

これで戦いのシーンとかできるのかと不安になりますね。要勉強です。



## 第七話

あと半年もたてば俺も十歳になる。そんなある日、一通の手紙がきた。

吉利 曹操からである。内容は要約すれば……

『十歳になったら名と字を名乗ることを許されたわ。だから、あなたにも教えてあげる』

……といったようなものである。

本来は時勢の挨拶やら詩的表現やらも加わった長々とした文章なのだがここは割愛する。

どうやら吉利といった仮名からは卒業するようである。

姓は曹、名は操、字は孟徳

それが彼女に与えられた名前。俺が知っている乱世の英雄の名前。やはり……俺の知っている史実の名前がつけられた。

内心、異世界だし実は違った名前がつくこともあるんじゃないか？  
と思っではいたが

その期待は全くもって裏切られたようである。

『真名を交換してもよいのだけど……手紙でするようなやり取りではないわね。だから次に会ったときにでも教えてあげるわ』

どつやら俺は真名を許されるほどに信頼されてるらしい。なぜかはわからないので今度会ったら一度聞いてみよう。

「兄さん、誰からの手紙ですか？」

「都の曹操からだよ」

この俺を兄と呼ぶ少女は曹洪 前に言った曹鼎さんの娘さんで俺の妹分である。

曹家の血が濃いのかやはり金髪で可愛らしい女の子だ。

「……曹操？ どなたですか？」

「あー、吉利だよ。名乗ることを許されたい……ほら」

文字を読めるようになった妹分に手紙をみせる。

ふむふむ……と頷きながら読む姿はとても可愛らしかった。

「ならば、これからは操姉様と呼ぶべきでしょうか？」

「あー、どうだろうね。次にあったときは真名を許されそうだし真名で呼ぶかもしれないね。……。というより姉と呼べそうなのは曹操しかいないから普通に姉さんか姉さまじゃないのか？」

「なるほど……そういえばそうですね」

彼女の性格は言うなればまっすぐだ。

何事も素直に吸収してくれるのでいろいろ教えがいがあるというものの。

俺のことは兄と慕ってくれ真名をゆるしてもらっている。

「愛華は会いたいかな？」

「そうですね。私は手紙のやりとりだけで実際に会ったことはないですし……」

愛華それが彼女の真名である。曹家の女性には華あれと「華」の一字が入る。

曹操の真名も華の一字が入った真名なのだろう。

「んー、一度……都に会いに行くのもいいかもしれないな」

「そうですね。そのときは是非にも……」

どうやらまだ見ぬ曹操にはそれなりに憧れをもっているらしい。

まあ、あのチートぶりを聞かされては無理もないだろう。

愛華もそれなりにチートではあるのだが華琳と比べるのは酷というものだろう。

「そういえばその髪型、今日もしてるんだ？」

「はい、兄さんが編んでくれたので……それに動きやすいですし……」

「気に入ってもらってなによりだな」

俺がふと思いつきで一度、彼女の長い髪をいじったのだがそれを気に入ってくれたようだ。

金髪でストレートをすべてお団子にし、あまつた髪を三つ編みにしてお団子に巻いたもの。

うん、彼女のストレートの金髪を見てなんとなく某剣の英霊を思い浮かべてやっちゃったのだ。

思いのほか似合っていたし、彼女もとても気に入ってくれたので無問題だろう。

これで剣なんか扱いだしたらモロなんだろうが……あまり気にしないようにする。

「さて、今日も勉強しようか？」

「はい、よろしく願います」

俺は度々、といっても週に一度か二度なのだが彼女の勉強を見ている。

勉強とはいっても今では同じ部屋で二人で別々に本を読んでいるだけであり

そして、彼女がわからない箇所を俺に聞くといった感じである

彼女は特に軍事関連の本を好んで読む。やはり、将来は武将になることに憧れているらしい。

母である曹鼎さんはうちの両親とは違い武将と呼んでも差し支えない。

結局、曹鼎さんはこの街から離れず今はうちの街の警備隊長をしている。

その腕っ節はかなりすごいといえる。そんじやそこらの暴漢は相手にすらならない。

休みの日などは娘の愛華にいろいろ仕込んでいるようだ。

まあ、まだ愛華は子供なので無理なことはさせていないらしいが……

俺はといえば何もかわらずに過ごしている。凱がいなくなっても薬草をとり山へ行く。

少し変わった事といえば薬草の他にも一人で狩りをするようになった

たぐらうである。

やはり、初めは反対されたのだが弓の腕を知られているのでそんなに強くは反対はされなかった。

よく気をつけるようにと言い含められた程度である。

勿論、獲った薬草や獲物などは親に渡しているのだが……

最近では弓の扱いにも慣れ、獲物を見つけては即撃つという芸当ができるようになった。

獲物も氣を探知すればすぐに見つけられる。狩人にむいているのかもしれない。

そして、狩りの他にも近くの川で魚を獲るようになった。

前世でも趣味ではあったのでポーっと釣りをするのも好きなのだが今は川の中に立ち、熊のように手づかみで魚を岸へ投げるといった方法をとっている。

身体と動きと読む力を鍛える一貫である。初めはやはり何度か失敗したのだが今では大漁である。

(……俺、なんか野生化してないか?)

そんな日々を過ごしていたのだが今、俺はかなり焦っている。

それは狩りをした帰りのことである。

いつもどおり狩りをし、獲物が結構な手に入ったので帰路についていたのだが……

帰る方向にやばい気配がする　おそらく虎だろう。

いつもならここで迂回して帰ればすむのだが今日は少し違った。

虎が向かう先に誰かがいるのである。それも小さな反応　恐らくは子供



俺はその隙をみて子供に駆け寄り声をかけた。

「おい、大丈夫か？」

「え？へ？あ……」

混乱した頭で俺の姿を確認したあと安心したのか気絶したようだ。無駄に騒がれるよりはましだと虎を視界に入れる。

まだ矢を抜こうともがいている虎が見える。

俺はすぐさま弓に矢を番え狙いをつけ、もう二射放つ。今度は正確に虎の眉間と喉元に刺さる。矢はなくなった。そして、トドメとばかりに短剣を投げつける。もう武器はない念のため少女を抱え逃げる用意をする。

グオオオオオオオオオオオオオオオオ……

しかし、その心配をよそに虎は断末魔の声をあげ、その場に倒れ伏した。

だが、ここで迂闊に近寄るといふ油断はしない。前に獲物であった小動物に迂闊に近寄って手を噛まれたことがあるからだ。

俺は慎重を期し、虎の氣の流れを確認し氣が完全に消えているのを確認する。



「ハア……どうやら大丈夫みたいだな」

一度、女の子を地面におろし虎に近寄り念のためもう一度トドメをさす。

猛獣を狩るのは初めてではあるがなんとかあったようだ。

やはり、緊張からか額と手には汗が噴出していた。

俺は持っていた手ぬぐいで汗を拭くと気絶してる子供に元に戻る。

「おい、大丈夫かー？」

「ん…ん？」

揺り動かしてやるとどうやら目が覚めたようだ。

彼女はボーっとしてあたりを見回し……やっと状況を思い出したらしく

「と、ととと虎がととと……」

「はいはい、大丈夫。大丈夫だからもう虎はいないよ。ほら、もう大丈夫だ」

妹をあやすように頭に手を置き落ち着かせる。

そして、彼女は虎が倒れてる方を見るとやっと安心したようだ。まあ、そこまではよかった。そうそこまでは……

「うえ……ふえ、ふえええ〜ん」

「あ、お…おい、ほらもう大丈夫だろ？ な？」

安心からか泣き出したのである。

いくら精神年齢が高くとも男にとって女と子供の涙は鬼門である。どうしたものかとオロオロとしつつ考えを巡らせる。

ふと母親の言葉を思い出し即座に実行する。

『女が泣いてるときは胸を貸してあげるのが男の子の仕事ですよ』

うん、焦っていたんだ。まず間違いなく違うような気がするが……  
やってしまったものは仕方がない。胸で泣きじゃくる子供の背中を  
ポンポンと叩き

「大丈夫だよ。もう何も怖くないから」

と声をかけ続ける。これぐらいしかもうやれることはないのだ。  
しばらくたちやっとな落ち着いたのか泣き止んでくれた。

母上、あなたの言葉は間違ってたかった。疑ってごめんなさい！

「さてと、君はなんでこんなところにいたのかな？」

「母さんが病気で……薬がなくて……それで山に薬草が……」

なるほど、たどたどしくだが語ってくれたものを要約すると……  
母親が病気で倒れその母のために薬草を取りに来たということなん  
だろう。

父親もおらず、母子二人で暮らしているようだ。

それで、母が苦しんでいるのを家で見ていて我慢ができなくなっ  
たらしい。

医者に行こうにもお金がなく自分で薬を取りに行くしかないと判断  
した。

そこは子供の判断力。山ならば母と何度か行っていたのでなんとか  
なると思っただらしい。

「山は危ないことが多いからね。駄目だよ、もう一人で入っちゃ……」

……

「うん……でも、母さんが」

「薬はうちの県令に訴えればいくらかは分けてくれるはずだよ」

「でも、県令様に迷惑をかけちゃ……」

やはり、子供には敷居が高いのだろうか？ あんな親なんだが……  
まあ、それは近い俺だからこそ言えることなんだろうか？

「さて、んじゃ母さんのところに帰ろうか？」

「でも、薬草がまだ……」

「薬草なら……ほら、俺が持つてる。これを持って早くお母さんに  
飲ませてあげようね」

「ほんと？　ありがとうーっ！ーっ！」

不安そうな顔が花のような笑顔に変わる。母親が本当に大好きなん  
だろう。

今日狩った獲物と虎を背負い女の子を連れて帰路につく。

「すごいね。お兄ちゃん！」

虎を担いで歩く俺の姿を見てそういつ。

たしかに、九歳児が虎を背負ってる姿は物凄いものだろうと客観的に考えるが仕方がない。命を無駄には出来ない。虎もいろいろ役にたつのだ。毛皮とか肉とか……

町に着いた頃には日はすでに陰っていた。

虎を担ぐ俺の姿をみて周りの人は大騒ぎ　　ついには警備の兵まで現れた

顔見知りの人だったのでなんとか騒ぎは落ち着かせてもらいかなり驚かれたが虎と他の荷物を預け家に持って帰ってくれるよう頼む。

そして、俺は手持ちの薬草を持ち女の子の家に急いだ。

「ここか？」

「うん」

家に入ると布団の上に苦しそうに眠る女の人がいた。

俺はすぐさま彼女の容態を確認　　気が少し弱ってる。

彼女のお腹に手を当て気をゆっくりゆっくりと流し込む。

そして、彼女の氣の流れに沿うように優しく流す。

数分そうしていると彼女の氣力も少しは回復したらしく。

顔色も少しもどったように思う。

とりあえず、その間に薬草を煎じて薬をつくる。

凱にきちんと教わっていてよかった。  
ジツと立って母の様子を伺う女の子に水を用意するように頼む。  
そして、持ってきた水にも氣を流し薬を流し込み混ぜる。  
それを母親に飲ませようとするが意識のない彼女は上手く飲ませられない。

( 仕方ない )

俺は薬を口に含み彼女の口へと流し込む。ようやく飲んでくれたよ  
うだ……

「たぶん、もう大丈夫。あと少しの間、氣を流せば体力も回復して  
薬も効いてくるはずだから」

そういつて不安そうな女の子を安心させ母親のお腹に手をあてさっ  
きのように氣を流し続ける。  
うん、だいぶ氣の流れも回復した。この分ならすぐによくなるな。

「よしっと。これでお母さんはもう大丈夫だよ」

「お兄ちゃん。ありがとう！ありがとう！！」

そういう礼をいう彼女に何かあれば訪ねてきなさいと家の場所を教

え別れを告げた。

帰りに凱の実家に寄り、凱の親御さんに今日のことを教え様子を見に行ってくれるよう頼む。

考えてみれば初めから凱の親に頼めばよかったと、ここで気づく。

(俺も今日は相当疲れていたんだな……)

まあ、いろいろあったから仕方がないか。

とりあえず家に戻り中に入ろうとしたところで玄関に立つ人物を見て冷や汗が吹き出る。

「ゼーんーくーん……」

鬼のような顔をした母上が目の前に立っておられた。

とりあえず、謝罪し怒る母上に事情を一から丁寧に説明する。

「もう、危ないことはしちや駄目っていったのに……」

そういうと優しい目で見つめ……俺を抱きしめて

「よくやったわね。それでこそ私の息子よ。無事でよかった……」

そう褒めてくれた。少し涙声だった。心配をかけてしまったようで心苦しい。  
あれほど親に心配かけないと自分の命を大切にしようと思えば二度としまいと  
心に誓っていたのにまた同じことを繰り返してしまった。  
あそこで見捨ててしまうことは更なる後悔を生むのだろうか  
それでも親に心配をかけたことに心に痛みが走る。

まだまだ、俺も未熟なのだろうな……  
いろいろ母に言いたかったが氣を使い身体を酷使してしまったからだ  
ろうか……  
俺は母に抱かれたまま意識が遠くなり気絶するかのように眠りにつ  
いた。

例の母親は翌日には元気になったらしく、親子揃って俺に礼をいい  
にきてくれた。  
あまりに恐縮する母親に俺は

「県令の息子として当たり前のことをしたまで。過度な礼は必要ない  
ですよ。もし、それでも礼をといたらその子と幸せな姿を見  
せてください。それが私にとって何よりの礼です」



……と少しかっこつけて言ってみた。

言ったあと恥ずかしさのあまり耳まで真っ赤だったそうだ。

後ろでニヤニヤしている父上はあとでしめようかと思う。

そうそう、あの虎は毛皮となり俺の部屋の敷物として活躍している。街では県令の息子、曹仁が齡九歳にて虎を退治すと噂になっているらしい。

その噂が商人を通して他の町にまで伝わり人づてにいろいろな場所へと流れ

各諸侯の関心を得るのだがそれはまた別のお話。

## 第七話（後書き）

曹洪、金にがめつく……ってイメージをもたれますがあれって曹丕から「金の貸せ」「嫌だ」からですよ。曹洪悪くないね？

むしろ曹丕が力のあつた曹洪を落とすためにつけた言いがかりの気が……  
あの曹丕さんですしね。

そんな曹洪さんこと愛華さんは真面目キャラになつてもらおうかと……。  
イメージ的に一番近かつたのは同じ金髪の剣キャラの剣の英霊だったの  
イメージさせやすく髪型を同じにさせてみました。

## 第八話（前書き）

八話でまだ十歳。

されど物語は少しずつだが着実に進んでいく。

## 第八話

産まれてちょうど節目の十年である。

この世界では十五歳を成人扱いとし一人立ちし職に就くことが多い。つまりはあと五年で大人の扱いをうける。

十歳ともなると親の手伝いや凱のように本格的な訓練などをうける。そして

「然、少し早いかもしれないがお前に字を贈ろうと思う」

「はい、有難く頂戴いたします」

「お前の字は子考。これよりは子考と名乗りなさい」

「ハッ、曹子考 承りました」

曹操の前例もあり虎退治のこともあったのかもしれないが俺も早熟だと判断したらしく字を頂戴することとなった。

あの父上だからまた朱雀だのなんだとつけられるのではないかと内心、戦々恐々としていたのだが史実通りで安心した

「うむ、本来ならば朱雀とかカツコいい字を」

「いりませんっ！」

あぶねえ！！ この人まじでつけるところだったのかよ！！！！  
この人のカッコいいはなぜか厨二的すぎる。

「かつこいいのになあ……んっごほん、……この字はな父上が贈っ  
てくれたものだよ」

「お爺様が？」

さすが曹騰様！ ……ありがとうお爺様！ あなたへのご恩は生涯  
忘れません！！

「それでだな。お前が十歳になったら一度都に送ってくれと言われ  
ていてだな……」

「は？ 都にですか？」

「うむ、そろそろ父上も歳でな……隠居する前にいろいろ教えてお  
きたいらしい」

「なるほど……私一人ですか？」

「いや、曹洪もともにだ」

「愛華……曹洪もですか？ まだ早いのでは……？」

「いや、お前とたった一つ違いでしかないだろう？ それに重ねて  
いうが父上ももう歳なのだよ……」

なるほど……あと一年も待ってられないのかもしれない。  
それほどに祖父の身体はすでに衰えているのだろう。  
だから、身体がまだもっている今のうちに二人まとめて  
いや、曹操や夏侯姉妹もまとめて教え込みたいのかもしれない。  
どうやら、字もこの件に関して早めに頂戴したのだろう。

「では、いつ頃に出立すれば？」

「早くても一月後、昇華 曹鼎を護衛について行ってもらう」

昇華とは曹鼎さんの真名である。

一応、俺にも愛華の兄として真名を許されている。  
なるほど、護衛という名目で親子を離さずに都に行かせるわけか……

それなら安心ではある。

「帰りはいつになるかわからないから母には甘えておけよ」

「はい、わかりました。それでは失礼します」

俺の場合は親ともしばしの別れか……。

まさか、自分が十歳で旅に出るとは思いもよらなかったが  
まあ、それもまた人生。なにが起こるかわかったもんじゃない。  
さて、母上にも早急に挨拶にいくべきだな。これは

「母上、都の件聞きましたか？」

母の部屋を訪ね、珍しく機嫌の悪そうな母に話しかける。

「はい、聞いていますよ。ほんとに……伯父様ったら何で私と然く  
んを引き離そうとするのかしら だいたい……」

どうやらかなり重症のようだ。

さっき父親がいった母に甘えておけというのは要するに  
母の機嫌をとつてくださいといった懇願に近いものだった。  
父の頬にあった引っかけ傷はあえて触れないようにしていたのだが

……

つまりはそういうことである。

普段は温厚でのおんびり屋の母も俺のこととなると人が変わるようだ。愛されてるのがわかるので嬉しいような恥ずかしいような妙な感覚である。

「仕方がないことですよ。爺様も恐らくはそう長くは……」

「うん、わかってるわ。それが然くんのためになるってこともね」

「一応、理解はしている様子。まあ、聡明な母だからね。」

「私もついていこうかしら……」

「いやいや、さすがに政務があるでしょ？」

「ぶー、然くんのいじわる……」

なにこのかわいい母上……じゃなかった。それはあまりに父が不憫すぎる。



「それにまだ一ヶ月も先のことですよ」

「一ヶ月なんてすぐよ」

あーいえばこういう……ならば仕方がない。最終兵器を使おう。

「なら、一ヶ月の間、何かなんでもいうことを聞きますよ」

「ほんと？ なら、一ヶ月ずーっと一緒に寝てね？ ずっとよ？」

やはり、こう来たか。この歳で一緒に寝るといふのは恥ずかしく度々、お願いされてもずっと断っていたのだが……

「はあ……いいですよ」

「やったあー！」

しばらく会えなくなるのでそれもいいかと考え直した。

一ヶ月の辛抱である。それに自分もさびしいとは感じてはいる。

父のいったように存分に甘えておこうと思う。

男っていうものはいくつになっても母離れはできないのかもしれない  
い……

どうせ同じ布団に入って寝るだけだたいしたことはない。

そう思っていた時期が俺にもありました。

現在、抱き枕状態。柔らかい感覚が体中を襲っています。はつきり言おう、この母、とても美人である。

息子の俺が言っても信じられないかもしれないが客観的に見ても美人だろう。

そして、十歳児の母であることが信じられないくらい若い。どう見ても二十歳前ぐらいにしか見えないのである。

いや、母だけではなくこの世界において女性は総じて若くみえる。某戦闘民族のように青年期が長く老化現象がほとんど見られないのだ。

だから、女性は見た目と実年齢がともなっていないのである。

これも氣の作用なのではないかと俺は思う。なんて万能なんだ……氣……。

前世の世界の女性たちが泣いて喜ぶような美容能力である。

そんな母親に抱かれながら眠る俺。身体は十歳とて中身はもう大人である。

身体に精神が引っ張られるのかもっと幼いときは変な気持ちすら起きなかったが

十歳とはいえば第二次性徴が始まる頃　つまりは子供から男へと成長していくのである。

母親とはいえ、美人でスタイルもよい女性に抱きつかれて反応しそ  
うになった。

……なんとというかかなりへこむ。母親ですよ？　母親……

(そうだ。母親だ。母親なんだ。隣の美女は母親なんだ……)

ぶつぶつと心の中で繰り返す。

アレも身体の一部。血の流れをコントロールしなんとか治める。

こんなことに能力を発揮させなければならぬとはおもわなかった

……

あとはあの空間で養った精神力で押さえ込む。

(ふう……なんとも情けなさすぎる……)

こうして俺は精神コントロールのすべてを学んでいくのだった……  
いいのか？ これで……

一ヶ月というものはとても早く過ぎていくものであったという間に出  
立の時となった。

母上は一ヶ月の間、俺と夜を過ごすことで徐々に機嫌が戻りいつも  
のニコニコ顔に戻っていった。

俺はといえば毎晩、精神訓練(?)をさせられたおかげで精神が鍛  
えられたような気がする。

「それでは父上、母上……行ってまいります」

俺は護身用にいつも狩りで使っている短剣を装備し弓を背負っている。

「気をつけていきなさい。この辺りはまだ比較的、賊が少ないとはいえ出ないとも限らない。最近では賊の報告も多いと聞く」

この時代、やはりというべきか山賊など賊が存在する。

これも乱世の予兆なのか賊による被害が各地で増加の傾向にあるらしい。

道中なにがあるかわからない。

「はい、父上。油断はしませんが昇華様もいらっしゃいます」

「うむ、昇華……息子を頼むぞ」

「解っていますよ、兄上。賊など出ても蹴散らせてみせます」

「ハハッ、それは頼もしいな。私などよりよっぽど強いからな昇華は……」

今回、旅に同行するのは昇華様とその部下二名、そして、馬三頭である。

部下の腕前は氣の量からするとそこそこの腕だろう。

少人数ではあるが相手がよっぽどの多人数でない限り昇華様の腕ならばそんなじゃそこらの賊など相手にならないだろう。

俺ならば多人数ならば氣配でなんとか遭遇を回避できるだろうし…  
…そんなに心配はしていない。

「然くん、昇華ちゃんのことをよく聞いて危なくなったら逃げなさい。あなたがいくら強いと言ってもまだ子供なんですからね」

「はい、承知しております。母上もお体にはお気をつけて」

母上はやはり心配なのだろう。不安そうな顔をしている。

俺は俺に出来る精一杯の笑顔を彼女に向け

「いってまいります」

そついい馬に乗せてもらい　　後ろ髪を引かれる思いだが振り返らずにいく。

後ろから母が声を殺した泣き声が聞こえる……父の胸で泣いているのであるうつか？

それでも俺は振り返らない。母に心配をかけぬため

大丈夫、心配はいらないと俺は母に背をむける。

この旅が父母を守るため、後悔しないために  
そして、曹仁として生きるためにいずれ必要なことであろうから……

## 第八話（後書き）

かわいい子には旅をさせるの回でした。

恋姫世界の字と名の違いがわかりにくいですよね。

名の役割を真名が奪い取ったせいで少しわかりにくくなりましたね。  
なので公的な場は字で名はそれなりに親しいものならOKといった  
感じに……。

## 第九話（前書き）

そろそろ原作のキャラがチラホラと現れはじめます。

原作キャラってこれで話し方あってるのかなと不安になりますね。



## 第九話

故郷の町を出立し俺たちはひたすらに馬を進ませていた。俺はもちろん馬を扱ったことはなく部下の人の前に乗せてもらっている。

愛華はもちろん母親の昇華様の馬に乗っている。

道中、村や町などがあれば泊めてもらうこともあったが基本は野宿である。

山で狩りなどを経験していた俺は特に問題なく過ごせた。

現在は豫州を抜け？州 濟陰郡に入ったところだ。

ここから陳留の方角……つまり西へ抜け洛陽を目指すことになる。

道中は賊にあうこともなく無事に旅を続けることができています。

だが、ここに来て慣れない長旅からか愛華に疲れが見える。

昇華様もそれに気づいてどうしたものかと悩んでいるようだ。

「急ぐ旅でもなく何処かの町か村でしばらく休ませてはどうでしょうか？」

そう昇華様に告げると本人もそう考えていたのか

近くに町はないか探らせるため部下に斥候に行かせる。

ここは中心部とはずれているので

愛華は大丈夫だというのがここは一度休んだ方がいい。

まだ旅は続く。現在でまだ半分もいってないのである。

「愛華、無理をして体を壊す方が周りに迷惑をかけることもあるんだぞ」

それでも大丈夫と言い張る愛華に厳しいことをいう。  
無理をして身体を壊されては元も子もないのだ。  
言われた愛華はしゅんとしてしてはいるが納得してくれたようだ。

「それに馬も休ませてあげなきゃね？」

そんなやり取りをしてしていると昇華様の部下が戻ってくる。  
どうやら近くに村があるらしい。部下の案内でその村へ向かうことにする。

それなりの大きさの村らしいのでいい宿とは言い難いが宿は存在するみたいだ。

村につくとすぐさま宿の手配をし愛華を休ませることにする

宿に着くとやはり、疲れていたのか愛華は部屋につくなり眠ってしまっただようだ。

俺は軽く愛華に気功をほどこし氣の流れをよくしておく。  
多用すると今度は俺が倒れるハメになるのでほどほどにだが……

どうやら三日ほど滞在し様子を見るらしい。

手持ち無沙汰になった俺はとりあえず村を探索することにする。

こういう人々生の暮らしを見ることも大事なことなのである。

しばらく村を見てまわっていると一人の少女をみかける。  
年のころは俺と同じぐらいだろうか？

スパナやらペンチなどを片手になにやら一生懸命に何かを造っている……。

なんでこの時代にスパナやらが存在するのはもう驚かない。  
この世界で生きてきて謎のオーパーツが存在するのは何度もみている。

少女は氣の量もたいしたもので将来はよほどの人物になるのかもしれない。

何を造っているのか気になり近づき声をかけることにする。

「それは何を造ってるんだ？」

「これか？　これはなあ……ってにーちゃん誰や？」

作業していた手を止めこちらを振り向いて首をかしげている。

少女は紫色という変わった髪色をしているがまだ幼いといった顔立ちで少女というよりはんちゃん坊主といった感じである。

「あー、旅してるものだよ。この村に三日ほどやつかいになる」

「ほうか……あ、そうそうこれやったな。これはなこころをこころしてこころやれば……」

手に持った人形を動かしながら説明してくれる  
おお……手足が動く　からくり人形か！

「たいしたものだな？　君がつくったのか？」

「そや。まだまだやけどなあ」

「そうなのか？　たいしたものだと思うけどな」

「いやいや、一度街でみたことあるんやけど……とあるからくり師が造ったからくり有名な人形がそれは秀逸でなあ。あれに比べたらウチのはまだまだや……」

「……からくり有名な人形？」

「そや、有名人に似せたからくり人形や。今は馬寿成人形が人気らしいでえ」

馬騰人形ですか……もしかしたら爺さんや曹一族の誰かの人形もあるのかもしれない

いずれ俺のからくり人形もそのうちに出てしまふのだろうか……

曹操あたりは確実につくられそうだが

「ふん、それにしてもそういうの造るのが好きなのか？」

「そや。こつやって物をいじって造るんは楽しいやん？」

どうやら彼女はいつもこつやっているいろいろな物をいじっているらしい。

時たま失敗し爆発するらしいのだが　なぜ爆発するかはわからない。

彼女とその爆発の原理についていろいろ討論していると……

「おーい、真桜！　こんなところにいたのか……」

「おおー、凧。どないしたん？　そんなに急いで……」

銀髪を後ろに束ねた三つ編みの少女が真名らしきものを呼びこちらに向け走ってくる。

ふむ、彼女も中々の氣をお持ちである。

「村長がなにか真桜を探していた。なにか鍛冶がどうとか言っていたが……」

「なんや、また包丁でもかけたんかいな……うちは鍛冶屋とちゃうで。まったく……」

この歳にして鍛冶までこなすのか……もしかしてあのスパナとかはこの少女の自作なのかもしれない。

「ん？ こちらの方は？」

「ん、なんや旅してるらしいで。この村にちょっとの間おるらしいわ」

なにやら急ぎの用らしくお互いに軽く挨拶をし二人は走り去った

おそらく村長の下へむかったのだろう。

そういえば、自己紹介もしていなかったな……

まあ、三日もあればまた会うだろうと俺も宿へ戻ることにする。

宿に帰り部屋で一息ついていると眠気がしたので昇華様に先に休むと告げ布団に入る。

そして、気がつけば次の日の朝になっていた。

どうやら人のことは言えず、俺も疲れが溜まっていたらしい。

夕食も食わずに寝たせいかぐっつと腹の虫がなる。

「……朝食の用意をさせようか？」

後ろから声がしたので振り向くとニヤニヤとこちらを見てらした。

「はい、お願いします……」

見られていたことに恥ずかしくはあったが腹は誰しも減るものだ。俺は起き上がると外へ行き顔を洗い眠気をとばす。

朝食の用意ができたころには愛華も目を覚まし皆で一緒にとることにした。

言い忘れていたが部屋割りには俺と昇華様と愛華が同じ部屋であり部下である二人は別の部屋だ。

まあ、この部屋割りはやはりどこから見ても俺は子供なのだから仕方がない。

朝食をとり終わると愛華は体調を整えるため部屋へ戻りおとなしく本でも読んでおくらしい。

昇華様は身体がなまると部下を連れ訓練に勤しむそうだ。

俺は昼までは愛華と勉強をしていたのだがせつなくなのでもた村を探索することにする。

しばらくぶらぶらと歩いていると昨日の少女たちと見知らぬ少女が話しているのが見えた。

「こんにちは。昨日はどうも」

「お、昨日のいちちゃん」

「だれだれ？だれなの？真桜ちゃん」

真桜と呼ばれる少女はサイドポニーの三つ編み少女に俺のことを説明する。

「はじめましてだね。そういえば他の二人にも名すら名乗ってなかったな」

「そついやーそつやな、ウチは李典ちゅ〜ねんよろしくな」

「沙和はねえ。于禁っていつの〜。よろしくなの〜」

「……………楽進と言います」

かなり驚いた。まさかこの三人が李典、于禁、楽進だとは……この世界においてはわからないが史実においてこの三人は曹操の部下になる。

……人の縁というものは本当に不思議なものである。



「俺は曹仁、字は子孝。曹仁でいいぞ」

「へえー……字がもつついてるってことはええとこの坊ちゃんかなんかか？」

「いいところかどうかはわからないが曹家という豪族の生まれではあるかな　まあ分家だけだね」

「曹家というと……大秋長の」

「うん、それは祖父だね。」

畏まられそうになるが俺自身が偉いわけでもなんでもない。だから、気にしないでいいこと伝えると

「気に入ったで！にいちちゃん」

……といった感じで李典と于禁は普通に話しかけてくれた。楽進は少しまだ堅いがしぶしぶ納得はしてくれたようだ。そして、気を取り直し三人の話を聞くとする。

どうやら三人は元々この村で生まれたわけではないらしい。それぞれ別のところで生まれこの村に移り住んできたそうだが、畑の不作、賊の増加……それぞれの理由があったが概ねこのような理由だ。

そして、三人それぞれの両親はすでに他界しこの世にはいないそうだ。

身寄りのない三人は今は村長の家でお世話になっている。

李典と于禁の親は病気や事故で亡くなっているのだが、楽進は両親ともに賊に殺されたらしい。

両親の必死の抵抗もあり命からがら一人でこの村まで逃げこんだらしい……

そして、村長に保護されこの村ですむことになったということである。

腕などに見える切り傷などはそのときのものなのだろう。

同じく両親を亡くした李典と于禁が一緒にいたおかげか元気になることができ

そして、今では自分のような悲しみを少しでも減らしたいと

将来、誰かを守るための力を得るために身体を鍛えているそうだ。

「……君は強いんだな」

「いえ、私はまだまだ未熟です」

いや、彼女は強い。心がとても強い。

普通ならば復讐に燃え眼に暗い炎をもやしているもおかしくはない。

しかし、その眼は力強く未来を見据えている。

そして、復讐のためではなく守るための力とはつきりといった。

おそらくは楽進と李典と于禁　　三人で支えあって生きてきたのだらう。

互いが互いを想い支え励ましあって生きてきた。

眼には見えないがそこには確かに強い絆がかいまみえた。

楽進にひっぱられる形で李典と于禁も同じく鍛えているそうだ。

そこで訓練をみせてもらうことにした。俺も何かの役にたてるかもしれない。

「私は死の狭間をみました。そのおかげが自分の生命の力を感じることができたのです」

そついうと楽進は身体に力を込め　　氣の流れが活発になりそれを溜める。

「はあああああーっ」

そして、溜め込んだ氣を手から一気に放出する。

手から放出された氣は塊となり勢いよく前方にあった木にめり込んだ。

驚いた……氣弾の使い手をこんなところで見ることになるとは……。

「ハアハア……その生命の力　　氣を練り塊にして弾として放つことが出来るようになったんです」

「な……なるほど、その氣彈の練習をしているんだね」

「はい、まだコントロールが未熟なのと連続では放てないもので……」

たしかに、これは鍛えれば確かにひとつの武器になる。

俺は今までできなかった氣彈の成り立ちをみせてもらった。

まあ、出来るかどうかはまた別の話だろうけど手順はわかった。

「あと、まだ思ったほどの威力も出ないのです」

木をえぐるぐらいなら充分だと思っただがどうやら彼女にはまだ納得がいかないようである。

武に関しては今の俺は素人なので何も言えないが氣に関してなら助言を与えられる。

「氣は感じられるんだよね？」

氣を練るということは普通の人は実は無自覚にやっている。

あのチートな従姉でさえ無自覚であり意識的に扱えてるわけではな

いはずだ。

氣を感じられ意識的に氣を練るといふことができる人の方が稀である。

「あ、はい」

「俺の感覚では」

氣を練るときに廻す。イメージの問題かもしれないがどういう原理なのかはわからないが氣を練るとき廻すことによって氣が激しく練られる。そういったことを楽進に説明する。

「氣を……廻すですか？」

「うん、できるかどうかは別として一度意識してやってみるといいよ」

「はいっ」

彼女はそう返事すると目を閉じ氣を練り始めた。

どうやら、彼女は氣に関してはある種の天才だったようで……言われたことをすぐさま実践できるようになっていた

「これは……たしかに」

そういつと氣を練ることに集中しはじめた。しばらく目で見つめていたのだが……

「で？どうなの？凧ちゃん」

どうやら于禁が我慢できなかったようでそわそわしながら凧に詰め寄っていた。

「あ、ごめん、沙和。……うん、氣を練りやすくなった感じがする」

そういつと俺に向き直り……

「曹仁殿、ありがとうございます」

……と頭を下げてきた。どうやら俺の助言は役に立ったみたいだ。

「いや、気にしないでいいよ。俺も氣弾とかいいものをみせてもらったしね」

それに照れくさくて言えないがやっぱし彼女の夢の少しでも手助けもしてあげたかった。

「んー、あとは氣弾やらは素人だから威力や精度が上がるかどうかはわからないけどそのまま放出するんじゃないかって腕の力で投げついたり蹴りだしたりしてみてもいいんじゃないかな？」

「けり……蹴り出すですか？」

そう、風の氣弾がサッカーボールぐらいの塊だったので……ふと雷11人のとんでもサッカーアニメが頭をよぎったので思いつきでいつてみたんだが……。  
風が目を見開いてこっちを見ている　そんなに驚くようなことだったんだらうか？

「あ……いえ、すいません。足から氣弾を放つ。そんなこと考えたこともなかったの……」

あー、確かにそうか……足からカメハメ波的な発想はそうそうできるもんじゃないか  
彼女は一度試してみますとまた氣を練り始める。氣を回転させ練り続ける。

そして

「はあああああつ!!!!!!」

気合一閃。足から放たれる氣弾を蹴り上げた。

強化された足で勢いよく蹴り出された氣弾は先ほどの木に当たるとその木をなぎ倒し

さらにさきの木をもなぎ倒しそして、最後には大きな岩にあたったところでやつと止まった。

岩を粉々に砕くまではいかなかったが岩に大きな亀裂が入っている。

「すごいのおー！風ちゃん!!」

「こら、とんでもない威力になったで……」

単純に飛び跳ねて喜ぶ于禁とその威力に冷や汗をかく李典。

そして、楽進はというと……自分で放ったにも関わらず呆然と立ち尽くしていた。

かくいう俺もあまりの威力に口をあけ啞然としてしまっていた。

「う、上手くいったみたいだね。威力がありすぎる気がしなくはないけど……」

「あ……はい、ありがとうございます。威力には自分でも驚いてま



す

その後も四人でいろいろアイディアを出し合ったり試してみたりと充実した時間を過ごした。

そして、日も陰りはじめた頃、解散ということになった。

「今日は本当にありがとうございました」

「いやいや、こっちもいろいろ勉強になったよ」

「こっちも楽しかったで〜」

「うん、沙和もおもしろかったのお〜」

大方、今日の結果には皆満足したらしかった。

「そういや、明日にはでていくんとちゃうかったか？」

「ああ、そうだな。連れの体力も回復したことだし明日にはここを立つと思っつ」

急ぐ旅ではないがあまり長居はできないだろう。先はまだまだ長いのだ。

「そうか、なんや寂しいな」

「そうですね。短い間でしたがとても充実しました」

「明日は見送りにいくのお」

そんな風に別れを惜しんでくれる。

確かに短い期間だったが俺もとても充実していた。

「ああ、でもまたどこかで会えると俺は思ってるよ」

「そうですね。私もそんな感じがします」

「そのときまでお互い頑張ろう」

そついうと楽進たちは元気よく返事をしてくれた。そして、別れもそこそこにしお互いに帰路についた。

宿に帰ると皆揃っておりちよと夕食の時間のようだ。今晚は夕食が食いっぱいではないですんだ。

そして、部屋に戻り本を読み時間を潰し夜も更けてきた頃、布団に入り今日のことを思い返していた。

今の時代、楽進たちのように親がいない子が増えてきている。

それはやはり、国自体が疲弊していつてるのだろう。

楽進たちは大丈夫であったがそういった恨みやつらみ妬みなどが国全体にたまっけていつてる気がする。

そして、それはいつ暴発、爆発するかわからない。

その暴発に疲弊したこの漢という国は押さえ込むだけの力をまだ有しているのか？

この世界は史実と似ている。だが、史実通りではない。

(結局は俺の前世の知識も参考程度にしかならないんだよね……)

そう、最終的には自分の目で見、生の声を聞くまでは判断はつかない。

都についたら実際に見てみるのもいいだろう。

そして、国がそれすら為せないほどに腐っているならば、混沌としたものになっていくのだろう。

それはとてもとても暗い未来を指しているようで俺はどうすれば

そんなとき楽進たちのまっすぐな決意を思い出した……

うん、大丈夫。きっと彼女達のようなものが立ち上がる。

だから、俺は俺の為すべきを 為せることを為していけばいい。

俺は俺たちは結局は一步一步、確実に歩いていくしかないのだから

……

## 第九話（後書き）

魏の三羽烏の登場。一応、彼女らの過去やら出身は捏造ですよ？

真桜一人が関西弁ってのはおかしかなと産まれた場所は別とさせてもらいました。

後に義勇軍として立ち上がるだろう彼女たちの根本的な信念の話でした。

彼女達の在り方は然くんには結構な影響を与えています。

いずれ再び彼らが出会うはどこなのか……頑張って描いていこうと思います。

## 第十話（前書き）

年末に向けてもう忙しい時期になってきた……。  
気がつけばあっという間に年末になってるんだろな  
頑張って更新していきます。

## 第十話

あの村を出立して陳留を抜け今は司隸に入ったところである。

村を出るとき于禁が言った通り見送りにきてくれた。

またどこかで会う約束をかわし俺たちは三人に見送られながら村を出た。

見知らぬ二人に見送られた愛華は頭にハテナマークを浮かべていたが事情を話すと……

「ずるいです。私も話がしたかった……」

……と拗ねられたときはどうしたものかと頭を悩ませた。

仲間はずれにされた気分なのだろう。

どうにか機嫌を直してもらおうとあれやこれやと話しかけている。

……拗ねた妹は虎よりも強敵に思えた。

それから道中は無事に何事もなく進む。

旅にも慣れたのか愛華は疲れをみせるようなことはもうなかった。

俺はというと楽進たちに感化されたのか  
何かをしたくてたまらなくなり休憩の時間に馬を習うことにした。  
これから先、絶対に必要なスキルである。  
見よう見真似で乗ることはできるのだが相手は生き物である。  
自分の身体ならまだしも馬の身体はどうにも自在に操ることができ  
なかった。  
昇華様に上手く操れないことを告げると……

「馬は生き物。操るのではなく馬と共にあるのですよ」

……と助言をいただいた。

馬の気持ちになって考えろということだろう。  
早速、俺は馬に乗り馬の様子を伺う。馬の動きを見、馬の呼吸を  
読む。  
そして、馬を歩かせる

なるほど、馬の行きたい方向へと誘導すると馬は機嫌よく進んでく  
れる。  
これを自分の行きたい方へ無理に誘導していたから操れなかったの  
か……  
そして、自分が行きたければ馬をそちらへ行きたいと思わせればい  
いということ。

コツを掴むと格段に上達した。馬にのるということは面白い。  
馬の氣に波長を合わせてやると馬も俺の意を汲み取ってくれるのか



面白いように動いてくれるのだ。  
馬に乗り始めて数日、馬を乗りこなせることができた。

周りはさほど驚きもしなかった。  
なにやら「まあ、あの然なら仕方がない」といろいろ悟っておられるようだ。

俺はもうすでに変人扱いですか？　そうですか……

俺がそうやって馬の訓練をしているのと同じくして  
愛華も俺の真似をしたいのか昇華様に習い馬の訓練を受けている。  
俺のようにすぐさまとは言いがたいが曹家の血か彼女の才能か  
乗馬のセンスがよくそれなりに乗りこなせるようになっていた。  
やはり、曹家の女はチートだと俺は思う。

今……目の前には大きな関所が存在している。

三国志でも有名なかの『水関』である。

この世界においては？水関と虎牢関は別の場所に存在する。  
本来、この二つは同一の場所に存在した関所であり別の場所には存在しないのである。

これもまた俺の史実との違いである。演義とは同じだが……

？水関、虎牢関それは関所というにはあまりにも大きい。  
秦の時代、ここには要塞が置かれ次第に防衛施設を建設し  
防衛の要としての役割を果たすこととなる。

前世においてはどんな要塞だったのか知らないため比べようがないが  
この世界の？水関、虎牢関は周りを崖に覆われ道幅はそれなりはあ  
るが

道はここで行き止まりだと言わんばかりに大きな壁が存在する。

「こんなところに籠城でもされたらたまらないな……」

「だからこそ都の防衛の要なのだよ」

俺の独り言に反応した昇華様が答えてくれる　確かにそうである。  
いずれ俺もここで闘うことになるのだろうか？

二つの大きな関所を通り俺たちは一路、都を目指す。

そして、都まであと一日といったところで

部下の一人が前触れとして到着を知らせるため都まで馬を走らせ先  
行していった。

「それにしても旅ももう終わりですね」

「旅ははじめてであるう？ どうだった？」

「長かったのか短かったのか……とても勉強になりました」

いろいろな出会いがありいろいろな生の知識を得られただけでもこの旅路はとても有意義なものだった。

いずれ、今度は一人旅を試してみるのもいいかもしれない。

次の日、朝から馬を歩かせていると昼頃には遠くに街らしきものが見えた。

あれが後漢、現在では東漢ともいうがその都 洛陽である。  
さすがに都、故郷の街とは比べ物にならない大きな街だ。

俺たちは馬を降り門をくぐり迎えの者と合流し一路、曹本家へと向かうことにする。

都というだけあって人は多いのだがやはりどことなく活気がないように思う。

そうやって都の状況を観察しながら歩いていると一際大きなお屋敷の前についた。

どうやらここが曹家のお屋敷なのだろう。うちの実家より大きい。

「よくきたな、仁、洪、昇華よ」

門をくぐるとお爺様　曹騰様自ら迎えに出てこられていた。  
久しぶりに見る曹騰様はやはりお歳なのか目に見えて老いを感じた。

「おひさしぶりでございます。お呼びにより参上しました」

「よいよい、今日は疲れたであろう。風呂を用意させた故、今日のところは旅の疲れを落とすがよい」

「ありがとうございます。では、お言葉に甘えて……」

俺たちは挨拶もそこそこに長旅の疲れを落とすために風呂に入った。  
やはり、旅の途中は風呂にはいるなんて贅沢なことではできず  
身体を拭く程度にしかできなかったため結構汚れていたようだ。  
俺はゴシゴシと旅の汚れを丁寧に落としてから湯船につかる。

「ふう……」

やっぱり風呂はいい。たまりにたまった旅の疲れがおちていくようだ。

前世では毎日入れるがこの世界ではそんなには入れない贅沢なもの

なのだ。

ちなみに、隣には愛華も一緒にはいつていたりする。

九歳児なのでなんら問題はないし俺も子供を風呂にいれてるような感覚である。

昇華様はお爺様と何やら少し話があるとのことではないので一緒にはいないが

いたらそれはまた精神修行の場とかすだろう……

昇華様も一児の母であるにもかかわらず若くスレンダー美人なのである。

俺たちは風呂を十分に堪能したあと体を拭き用意された真新しい服に身をつつんだ。

そして、侍女らしき人に案内され部屋に通された。

愛華は昇華様と同じ部屋であつたが俺は個室をあてがわれた。

それにしても大きい屋敷である。客室の数が半端なく多い。

やはり、遠方の客をもてなすために用意されたものだろう。

部屋にはベッド……というか天蓋らしきものが一つ鎮座し、

職務をこなすためのものなのか机と椅子が一对あり

窓際にはよく旅館でみるような椅子二つ、それをはさんで丸机が置かれてる。

個人に使うには充分すぎるぐらいの広さである。

俺は早速、荷を解き持っていた弓を壁にかけ布団に腰掛ける。

これからどれぐらいになるかは知らないがこの部屋が俺の仮住まいになる。

今はこれぐらいだが、そのうち俺の住みやすい部屋作りをしよう

思う。

「あ、そうだ……」

俺はベッドから起き上がり荷の中からとあるものをとりだし机に向かう。

そう、無事に都についたことを両親に知らせるための手紙を書くのだ。

俺は旅であったことを思い出しながら書き最後に身体を気をつけるように付け加えた。

そして、部屋をでて侍女を見かけると声をかけ実家にこれを出す旨を伝え預ける。

こういうものはまだ勝手がわからないのでその家のものに託すのが一番なのだ。

さて、用事も住んだし部屋に帰ってすこしゆっくりしようと部屋に戻ろうとすると

「ちょっとそこのあなた」

ふいに声をかけられた。

こんな気配にも気づかないとは少々気が緩んでいたようだ。

振り返るとそこには長い黒髪をストレートにしたの少女と青髪のシヨートの少女を

後ろに引きつれた少々小柄などこかで見覚えがある金髪の少女が立っていた。

「ひさしぶりね」

「ああ、よくわかったね」

たしかに昔にあったころの面影がある　曹操その人の御登場である。

「今、この屋敷にいる子供　さらにいうなら男の子はあなただけですもの。あなたこそよく私だとわかったわね」

「そんな覇気を漂わせてる少女なんてそうそういるものでもないと思うけど……」

カリスマというべきか昔にあった頃よりも威厳感じさせる。こんな十歳児はそうそういるもんじゃない。

「あら？そうかしら……立ち話もなんだからあちらで少し話さない？」

そういうと中庭に設置されている机を指さす。

大きな公園などにある屋根付きの休憩所のようなようである　みるからに中華風ではあるが

「ああ、そうだね」

そういうと曹操は侍女にお茶をもってくるようにいい少女二人を引き連れて中庭にむかった。

そして、俺も中庭に向かおうと歩き出そうとしふと思いつきお茶をとりにいこうとしている侍女を呼び止め愛華も連れて来るように頼む。

また、あとで仲間はずれにされたと拗ねられては困るからだ……

「さてと、まずは改めて自己紹介した方がいいかしら？」

「そうだね。そろそろ後ろのお嬢さんが我慢の限界みたいだ……」

そう、さっきから黒髪の少女が不審人物をみるような目でこちらをずっと見ていたのだ。

曹操が普通に対応していたためになんとか堪えていたようだが……青髪の少女が額に手をあてため息をついている……なんだか苦労してそうな気がする。

二人の正体はだいたい察しがついている　夏侯姉妹だろう。

「はあ……まったく、春蘭、彼は　」



「姓は曹、名は仁、字は子孝……曹操の従弟にあたるものだ」

黒髪の少女は目を見開いて驚いている。いや、来ること知ってたんじゃないのか？

もう片方の少女が驚いていないところを見ると彼女は察しがついていたらしい。

「……今日来ることはつたえてあつたはずなのだけど？ まあ、いいわ。春蘭、秋蘭、自己紹介なさい」

「はい、華琳様！ わたしの名前は夏侯惇、字は元讓です」

「そして、私は夏侯淵、字は妙才と申します」

黒髪の方が夏侯惇で、青髪の方が夏侯淵だったか……  
夏侯惇姉妹であることはわかつてはいたのだがさすがにどっちがどっちかはまでは解らなかつた。

「そして、私は曹操、字は孟徳よ。真名は」

「ちよつとまつた！」

俺は真名を名乗ろうとしたところで止めた。

「あら？　なにかしら？　まさか真名を交換したくないとでも？」

「いや、そういうわけではないけど……」

曹操の後ろで夏侯惇が何か言おうとしたところを夏侯淵に止められているのが見える。

「じゃあ、なぜ止めたのかしら？　手紙にも真名を教えてあげるといっておいたはずだけど？」

「……ほぼ初対面の相手に真名を預けてもいいのか？　なぜ、そこまです信をおいてくれるのが不思議だね」

そう、前にもいったがいつか会ったら直接、聞こうと思っていたことである。

真名とはその人にとってとても神聖なものだ。だからこそ、なぜこんな簡単に教えてくれるのが本当に疑問だったのだ。

「あら、そんなこと？　簡単なことよ。あなたと私が同類だからよ」

同類？ ……まさかつ、同じ転生者なのか？  
あり得なくはない。こんなチートな能力の持ち主である。  
いや、でもあの世界では俺以外の魂が意思があったようには見えな  
かったが……

「ふふふ、一目見て気がついたわ。あなたは私と同じ、生まれつい  
ての異端 異才をはなっていた」

「……異端？」

「そう、異端よ。私はすぐに理解したわ。他の人とは違うのだとい  
うことを……」

なるほど、要するにチート 天才すぎる故の孤独ということなの  
だろう。

理解力や把握力が凄すぎたのだろう 産まれてまもなくして自分  
が周りと違いすぎることに気がついた。

そう、気がついてしまった。他人とは明らかに違う成長スピード。  
赤子とは思えない頭脳。

なにもかもが周りとの差を生んだ。そして、すぐに自分の異質を知  
ったのだろう。

もはや、赤ん坊の悩むようなことではない。

「そこであなたに出会った」

あるときだろう。俺が曹操と初めて会ったあとき  
そういえば、彼女は初め驚いたような顔をしていた

「周りのいうことを理解し周りをつぶさに観察している眼。それだ  
けでこの子も私と同じなのだ」と理解した」

自分が同じようにしていたからなのだろう。  
俺が赤子の頃にしていたことに気がついた。

俺は転生という名の異端。彼女は天才という名の異端。  
どちらも、周りとは違いすぎた 異端過ぎたのだ。

「だからこそ、私の傍にほしかったのよ」

そう、誰しも独りはやはり嫌なのだ。

孤独はとても苦しいのだ 俺がそうであったように……

「あなたならば私を理解してくれると思ってね」

理解者など存在しなければその孤独や苦しみに封をし耐えられたの  
かもしれない。

知らないものを求めるようなことはないからだ  
……では、知ってしまったら？

自分の理解者に足る人物を見つけてしまったらどうするだろう？

「これが理由よ……どう？ 納得したかしら？」

求めずにはいられないのではないか？

俺が母のぬくもりを知ったように失って初めて己の命の大切さを学んだように……  
知ってしまったのなら求めずにはいられない

「ああ、納得したよ」

「なら、あなたは私と真名を交換してもらえるのかしら？」

彼女は表情を変えずに尊大に言い放つ。

だが、俺にはそれは泣きそうな顔をして懇願しているように見える。  
眼が俺に訴えかけている。断らないで……と

そんな彼女はとて小さく壊れそうなほど儚く見え……

「……ああ、喜んで」

それを振り払うほどの理由などなかった。俺もまた彼女の孤独

を理解できるからだ。

彼女の眼が確かに安堵を色を浮かべたようにみえた。

俺はこの孤独の少女を　　心で泣いている少女を見捨てられない

「ならもう一度名乗るわ」

そう言うと彼女はおもむろに立ち上がり俺の眼の前までくる。

俺も彼女に合わせ立ち上がり視線を合わせる。

「我が名は曹操、字は孟徳。真名は華琳よ」

「俺の名は曹仁、字は子孝。真名は然だ。よろしく頼む」

お互いに見つめあいゆっくりと握手をかわす。それがとてもとても大切な儀式であるかのように……。

思えばあの彼女の強く光り輝く魂に魅せられたときにもうすでに決まっていたのかもしれない。

彼女を支え共に生きることが　　そして、あの輝きを曇らせてはならないのだと……。

俺と曹操　　華琳との二度目の出会いは俺のこれからの人生に強く深く影響を与えた。

俺が知っている史実の曹仁の道筋をただ辿るのではなく

はつきりと今を生きる俺として己の足で独自に歩み出すきっかけとなった。

曹仁であることは関係なく俺は俺として彼女を支え生きるのだと…。

## 第十話（後書き）

春蘭は敬語にするとモはや誰かわからないね……。  
ともかくとして華琳と再会。

そして、然くんの生きる道が固まってきました。  
これからは華琳たちとしばらくともに行動かな？



## 第十一話（前書き）

いつの間にやら……総PV数12万、ユニークアクセス1万突破。  
とてもありがたいことです。

負けじと頑張って更新していきたいと思えます。

## 第十一話

華琳と真名を交換し握手を交わしお互いに席に座りなおそうとしたとき

向こうの方から愛華が侍女に連れられて歩いてくるのが見えた。

「愛華、遅かったじゃないか」

「すみません。母に話があると呼ばれていたもので……」

「なら仕方がないか……」

なにやら昇華さまと大事な話でもあったらしい。  
それならそれで邪魔して悪かったかもしれないな

「それで何か御用だったのですか？ それとそちらの方は……？」

「あー、彼女たちを紹介しようとな……な？」

そついうと華琳たちに向き直り俺の横に並べ愛華を華琳たちに紹介する。

「華琳、彼女が愛華　曹洪だ」

「そつ、あなたが曹洪なのね。始めまして、私が曹操よ」

「あ、あなたが……」

そつ紹介すると愛華は眼を見開き少しあわあわしていた。

話には聞いていたがやはり初めて会うので緊張しているのだろう。

俺は愛華を落ち着かせるために深呼吸をさせる。

しばらくすると落ち着いたので改めて名を名乗った。

「私は曹鼎の娘、曹洪と申します。字は子廉。宜しくお願いします」

……と丁寧に頭を下げた。我が妹ながら礼儀正しいものである。

史実を知る俺が幼いころからいろいろ叩きこんだことだけのことはある。

曹洪は性格に難があったとされそれが災いし最後には処刑されたと記憶している。

実際はどうだったのかわからないがそついう憂いは絶っておくに限る。

あれ？ そついえば

「ん？ 子廉？」

彼女には字はまだついてなかったはずだがいつのまにっただろう？

旅に出る前はなかったと記憶しているが……

「あ、兄さん。さきほど母から字を貰い受けました。無事に都にっいたら一人前として字を与える腹積もりだったみたいです」

なるほど、さきほどの昇華さまの話とは字に関してだったのか。

俺たちはこれから公的な立場に出るかもしれない。

されど字をつけるには愛華はまだまだ早く幼い。

だからこそ、この旅を経験することで一人前として認めようとしたのだろっつ。

昇華さまらしいといえば昇華さまらしいといえる。

「春蘭、秋蘭」

華琳が後ろの二人に声をかけると二人はすぐさま愛華と名を交換した。

言葉を交わさずともすでに以心伝心の仲ということみたいだ。

伊達に赤ん坊のころからずっと一緒にいるわけではないらしい。

「そうね。あなたにも私の真名を預けるわ」

「え？ いいんですか？」

「ええ、あなたが然の妹ということは同じ従姉妹の私にとっても妹のようなものよ」

そう華琳が愛華に告げ二人は真名を交換した。

俺とは違い愛華は素直に華琳から真名を受け取ったみたいだ。

二人とも握手をかわすと華琳は夏侯姉妹に向き直り……

「春蘭、秋蘭も二人と真名を交換なさい」

……と命令した。いや、真名は命令で交換するものではないだろう。それでは二人に対してあまりに失礼ではないかと伝えると……

「かまわないわ。二人は私のものなのだから」

「はい 私たちは華琳様のものです ん、ごほんっ……私は春蘭と  
います」

「……私は秋蘭と申します」

……なんか一瞬、百合っぽい空気が漂った気がした。  
まあ、二人がそれでいいのならいいだろう。いや、いいのか？  
まあここでお互いに今、交換しておくのはいいことなのかもしれない。

……  
どちらにしろこれから長い付き合いになるのは間違いないのだから  
俺も、彼女達には信をおくことはやぶさかではない。

「然だ。よろしく頼む」

そして、お互いに互いの真名を交換し自己紹介も終えたとき  
さきほどから疑問に思っていたことをぶつける。

「そういえばなんでそっちの二人は俺に敬語なんだ？ 二人とも俺  
より年上のはずなんだが……」

「それは華琳様から弟みたいなもの聞いていましたので……それに曹家のご子息であらせられるので」

なるほど、敬愛する主人である華琳の弟として同じく扱ったからこそ……

そして、曹家の人間に対しての敬語だったのか。

しかし、俺は例え曹家であったとしても本家の人間ではなく

「なら、必要ないよ。これからは敬語なしで頼む」

「しかし……」

納得がいかないのか春蘭が口ごもる。そして、チラチラと華琳を見  
てる。

やはり、華琳に対する遠慮というものがあるのだろう。

「俺たちは跡取りの華琳とは違って曹家では何の地位もないただの  
子供だぞ？ 立場的にいえば君たちと変わらない同じ従姉弟でしか  
ないんだよ」

そう、本家の跡取りである華琳を中心に考えると俺は従弟であり、  
曹嵩様の姪である夏侯姉妹もまた華琳の血の繋がった従妹であるの  
だ。

「……わかった。華琳様よろしいでしょうか？」

戸惑う春蘭を見かねてか妹の秋蘭が了承し、華琳に許可を求める。  
さつきから姉のフォロー役が多いな……秋蘭。

子供ながらにそういう役割に徹しているように思う。

なにやらこれから先の苦勞が目に見えかぶ。頑張れ、秋蘭！

「ええ、あなたたちの好きになさい」

「わかりました！ 華琳さま！ よろしくたのむぞ！ 然」

春蘭は許可がでたことですぐさま切り替えたのかすぐさま返事をかえした。

華琳を見る春蘭になにやら尻尾がブンブンと揺れるのが見えるようだ。

春蘭はまさに、華琳の忠犬つといったところなんだろう。

その姿は、己全ては華琳がためつと言わんばかりである。

「じゃあ、そういうことで改めてよろしくな」

「うむ、よろしくたのむ」

こうして、しばらくの間、お茶を楽しみながら交友を深めることにした。

愛華は華琳を姉さんと呼ぶことになったようだ。

華琳もそんな愛華を妹として扱うことはやぶさかではないようだ。

「愛華、その髪型はあなたに似合っていてかわいらしいわね」



「はい、ありがとうございます。兄さんにやってもらっただけですよ」

「そう、然が……さすがね。然」

何がさすがなのかはわからないが気に入ってもらった様子。  
某剣の英霊さんも草葉の陰から喜んでくれるだろう。

「なあ、然、聞いた話によると虎を弓のみ退治したと聞いたのだが  
……」

「……どこでそれを？」

どうやら、あの噂は都にまでながれているらしい。  
変な尾ひれなどはついてはいないが多少誇張はされているようだ。  
変に誤解されてもあれなので俺はあの日のことを話すことにする。

「そう、たいしたものね。大の大人でも一人で虎を倒せるものはそ  
うはいないのだけれど……」

「私も弓を扱つが……今はまだ然には及ばないだろう」

秋蘭が俺を見つめそういう。そうか、秋蘭は弓矢を主としているか。  
俺には及ばないとしつつも「今は」とつけるあたりは実は負けず嫌いなのだろうか

「俺は弓を主体にしているというよりは他のものを扱ったことがなく弓しか知らないからなただけど……」

そうである。俺は狩りをするのに弓矢を扱うのであって武の手ほどきは一度も受けたことがない。

父も母も武将というよりは文官であったしどちらかと言えば知の方を優先させてたようだ。

俺個人がやっていたことは体力をつけ筋肉をつけること主とした体の基礎作りである。

「だから、武に関しては素人も同然だよ」

「そうなの？ 愛華も同じなのかしら？」

「いえ、私は母に剣の手ほどきを受けてます。まだ基礎ではありませんが……」

昇華さまの教育方針はうちとは違うのか愛華は剣を昇華さまから学んでいる。

才能は昇華さま譲りなのかメキメキとその才を発揮しているようだ。そのうち私を超えるだろうとは昇華さまの弁である。

「いずれにしろ、ここに来たからには武もいずれ習うでしょう」

そうなのだ。おれもそう思う。

ここに来たのはおそらくは本格的な訓練などの手解きも受けさせるためだろう。

お爺さまはいずれ、この国が荒れることを予期しているのである。それにはきつと知の力だけではなく武の力も必要となってくる。

故に、腐っても都　そういう教材や人材には事欠かないここ洛陽でいろいろなことを学ばせることにしたのである。

俺たちはそれからも旅のこと、華琳たちの学んでいることなど話題は尽きなかった。

そこにはほぼ初対面であったということなど信じられないぐらい意気投合したのだ。

話はずみ、そろそろ夕餉であることを侍女が伝えにくるまで時間を忘れ歓談した。

夕食は俺たちの歓迎もかねてか豪華なものであった。

そして、さすがは都なのだろう各地から集まるのか食材が豊富である。

俺たちは食事に舌鼓を打ち会話を楽しんだ。

しかし、お爺さまはおらずどうやら今日は城で食事をとるようだ。明日の朝に広間に皆で集まるようにと言伝をもらっている。

俺たちは食事を終え名残惜しいが別れそれぞれの部屋へと戻る。

少し体を動かしたかったが今日のところは休むべきだろうとやめておく。

部屋に戻り布団に寝転がり今日のことを考える。

今日もいろいろなことがあった。華琳との再開がその最たるものだろう。

家族や己の命を守るためという目標はあったことはあったのだが将来の展望は特になく流されるままに曹操に仕えるのだろうと思っていた。

曹仁として生きることには否はなかったからだ。

結局は曹操に仕えるのだから一緒なのかもしれないが流されるままそうなるのと己の意思で歩むことは違う。

俺は曹操ではなく華琳を支えたいと己の意思で思ったのだ。

そして、その上で家族や己の命を守り通す。

目標も生きる道も定まった。俺にはこれから為すべきことが増えるのだろう。

焦ることはない、結局は己の為すべきことを一つずつ確実に為して

いくだけだ。

やることは何も変わらないが己の中では確かに何かが変わったように思う。

またひとつ、心に覚悟が打ち込まれ俺は確実に前へと進んでいることを実感するのであった。

## 第十一話（後書き）

秋蘭さんの弓の腕はまだまだ修行中。

これから先、然とは別方向で弓の才を発揮します。

なので、秋蘭さんの十八番を奪うなんてことはない……はず！

## 第十二話（前書き）

最近、疲れが溜まってるのかすぐ寝てしまいますが  
頑張って更新をしていきたいと思えます。

## 第十二話

昨夜はよく眠れ、朝はすつきりとした目覚めとなった。  
本来ならば朝、体を動かしていくのだがこの屋敷の勝手がまだわからない。

とりあえず、部屋から出て食堂を目指しがてら周りを観察する。  
それにしてもやはり、広いな……少し道に迷ったかもしれない。

「おっ？ 秋蘭か？」

「ん？ ああ、然か」

渡り廊下の向こうから秋蘭が歩いてくる。  
向こうもこちらに気づいたようで声をかける。

「おはよう。これから朝食か？ というか一人か？」

「ああ、おはよう。……姉者はまだ寝ている。あまり早く起こすと  
機嫌が悪いものでな。そちらも朝食か？」

「そうなんだが……少し迷ってしまっただけな」



「なるほど……それでか。この先は私達の寝所しかないぞ？」

おおう、危ないところだった。危うく変な疑いをつけるところだった。

知らない場所を無闇に歩き回るものではないな。

それにしても双子でも朝の強さは違うのだろうか？

それとも子供の癖に早起きの俺たちがおかしいだけなのだろうか？

「よかつたら、案内しようか？」

「……ああ、たのむ」

秋蘭に連れられ改めて食堂を目指す。

歩きながら秋蘭はいろいろと流れるように屋敷の説明をしてくれる。入ってはいけないところを聞いたのは収穫だ。

やっぱり、秋蘭は落ち着いていてしっかりした子である。

厠や今日行くであろう広間の場所などいろいろ把握していると食堂がに着いたようだ。

秋蘭に礼を言いながら食堂に入るとそこにはすでに華琳が朝食をとっていた。

「あら、二人ともおはよう」

「おはようございます、華琳さま」

俺たちは挨拶はそこそこに侍女に朝食を頼み席に着く。

曹家では朝食と昼食は皆揃って食べるという習慣がない。

各々が自由に食堂に集まり侍女に用意させるといったスタイルである。

まあ、これが曹家だけのスタイルなのかそうでないかは知らないのだが

曹家では朝早くに政務に出かけたりする者など人によって違うのでこういったスタイルに自然となつていようだ。

そうはいつでも食事の時間帯はだいたい決まってはいるのだが。

「華琳は朝は早いんだな」

「そうかしら？ この時間には自然と目が覚めるのよ」

どうやら朝はやはり強い方らしい。こんなところにも彼女の完璧さが伺える。

そんな他愛もない話をしながら俺も食事をとる。

そうこうしているうちに愛華たちも食堂に現れ食堂がにぎわい始める。

俺も食事が終わるうかとするとときにやっと春蘭が来てすぐ食事を取り始める。  
姉の起きる時間を計算してたのか、秋蘭が前もって侍女に食事を頼んでいたようだ。  
なんというかまさに出来る秘書といった感じである。  
なぜ、春蘭の起きる時間がわかったのかと聞くと……

「姉者のことだからな」

……と微笑みながらなんとも言い難い言葉が返ってきた。  
やはり双子のテレパシーみたいなものが存在するのだろうか？  
彼女のことはいまいち掴めない。

俺たちは春蘭が食事を終えるのを待ち広間へと向かう。  
そして、昨日の夜のお爺様からの言伝通りに広間で待つことにする。  
広間というか一族で話し合ったりする場所なのか  
真ん中に大きな長机があり椅子が並べてある。  
そして、部屋の奥側の長方形の辺の短い方に一つ席が設けられている。

俗に言うお誕生日席という場所である。ここに主が座るのだから。

しばらくの間、そこで座り静かに待っているとお爺さまが入ってくる。

俺たちは立ち上がりお爺さまを出迎える

「よい、座っていないさい……改めて、よく来たな。仁に洪よ」

お爺さまも席に付き俺たちに改めて歓迎の言葉をかけてくれる。

そして、俺と愛華……華琳たち一人一人を見つめおもむろに目を閉じる。

何か考えているのか、何事かに思いを馳せているのか……  
そして、ゆっくりと目を開きもう一度俺たちを見て

「儂も歳をとったものじゃな……」

……と静かに呟いた。

その目は酷く疲れていて　それでいて優しく俺たちを見守るかのようだった。

そして、もう一度目を閉じ次に目をあけるとときには当主の顔になっていた。

「さて、前もってお前たちにも一つ言っておくことがある」

その姿はさきほどの疲れたような姿ではなく威厳が　覇気があふれている。

さすが陰謀、策謀なんでもござれの伏魔殿、宮中で生きてきただけ  
のことはあるのだろう。

俺たちは居住まいを正し、お爺さまの声を聞く。

「僕は昨日、城に赴き官職を辞してきた」

華琳たちが目を見開き驚いている。

冷静沈着な秋蘭でさえ傍目からも衝撃を受けているのが見える。

かくいう俺も驚きのあまり一瞬、耳を疑った。

お爺さまは中常侍・大長秋という官職についている。

皇后府をとりしきる宦官の最高位であり皇帝の傍に侍り様々な取次ぎをする役職である。

政治には直接には参画できないが皇帝陛下の一番傍におり絶大な権力を誇っている。

簡単にいえば、皇帝直属の秘書の長であり皇帝を助言という形で意のまま操ることも可能な立場でもある。

漢王朝の現在の裏のトップとも言える人が職を辞したのだ。

それはまさに驚天動地の大事件といっても過言ではないだろう。

「なぜですか？お爺さま」

意を決して華琳がお爺さまに問いかける。声が少し上擦っている。

あの華琳がそうなるほどに驚くべき出来事だったのだろう。

「皆ももう知っておろう。……もう、漢という国自体が末期であることは」

「そ、それは……」

皆、一様に口ごもる。それは既に俺たちも理解している。しかし、それは声に大にして言えるようなことではない。

国は末期だとしても王朝の権力はいまだに絶大である。

もし、聞かれては国自体への不敬罪ともとれることだからだ。

「誰も聞いてはおらんよ。この部屋の話は外へは漏れぬようにしてある」

確かに、気配をさぐってみるがこの部屋の周辺には誰も人がいないがそのさらに外には人が近づけぬように警護をめぐらしてるようだ。それだけ重要な話を今するということなのだろう。

181

「宮中はすでに腐っておる。名ばかりの無能な官僚がのさばり権力争いに奔走しておるわ。……すでに賄賂を上に乗すことでしか出世すらできぬ。そして、その賄賂の出所は民から搾取されたもの」

そう、すでに才能あるものでさえ賄賂を渡さなければ上へは行けない。

才能や志があつたとしてもお金やコネがなければ出世できないのだ。あの才気あふれる曹嵩様でさえ賄賂を渡さねば官職にすらつけない。

もちろん、名誉のためにいうが曹嵩様は民から無理には搾取はして

はない。

賄賂を渡すことを断れば、左遷され閑職に追い込まれる。

「監視する立場の者たちがそうなのだ。各地の諸侯どもが私腹を肥やすため民から搾取しても咎めるものはおらん。それ故に徐々に民は飢え不満や恨みなどがこの国に拡がっておる」

俺たちが立ち寄った街や村にも暗い雰囲気が漂っていた。

そして、その飢えが人を凶行へと走らせ賊が蔓延する。

「お爺さまの立場でもなんとかできなかつたのですか？」

そう、華琳が尋ねる。しかし、それは無理だろう。

いくらお爺さまが権力を誇ったとしてもそれは不可能に近いことなのだろう。

「儂にはもう止められぬ。儂一人の力も限界がある。我が娘も頑張っておるがもう齒止めが利かぬじやろう」

お爺さまも年齢が年齢だ。信頼できるものはすでに亡くなり周りには居ないのだろう。

そう、結局は一人でやれることは小さい。ひとひとりの手はそんなに長くはないのだ。

どんなに頑張ってもどんなに手を伸ばしても周りが足を引っ張る。

お爺さまとはいえ出来ることはその流れを緩やかにする程度のこと  
だろう。

「先月、弁王子が誕生されたことで母であらせられる何皇后の外戚  
ども権力をもちはじめた。それに対抗するように宦官どもが張讓を  
中心に集まり始めておる」

そして、後に何進が台頭して張讓を筆頭に十常侍がそれに対抗し漢  
を滅ぼすほどの動乱が始まる。  
やはり、この世界でも正史と同じよう道筋を辿るのだろう。

「儂ももう長くはないだろう」

「いえ、お爺さまはまだまだお若く……」

「世辞はいらぬ。儂の体じゃ儂にはわかる　もって二年、長くて  
三年といったところじゃろう」

「そんな……」

今の覇気のたぎる姿からは想像はつかないが初めにみた疲れたよう  
な目が忘れられない。

おそらく気力のみで己の体を支えているのかもしれない。



「そこで僕は残された時間をどう使うか考えた。初めは命を賭して最後までこの国の流れを止めようとも思ったがそれではもうすでに応急処置にしなければならないじゃろう」

さつきもいったようにすでに止められるような時限の話ではなくなっている。

たとえ、命を賭したとしても不可能ともいえる状況だ。

「だから、残された時間、全てをかけて僕は後身を育てることとした。お主らのことじゃ。お主らの未来にかけることにした」

俺を　俺たちを見つめそういったお爺さまの眼は……

その意思は俺の心臓を驚づかみにするかのようだった。

残りの命をすべて俺たちに費やすと賭けるといったのだ。

生半可な覚悟ではないのだろう。

誰かがごくりと喉を鳴らす。

「そのために職を辞し己の全てをお前たちに叩き込む。……覚悟はよいか？」

そして、覇気を俺たちに叩きつけるかのように問うてきた。

生半可な覚悟ならいらぬということだろう。

俺は目を瞑り、母や父、そして……楽進たちのことを思い出す。

そして、目を開き華琳をみる　　うん、覚悟ならある。  
俺はひるむことなく立ち上がりお爺さまの方へと向き

「我が名は曹仁、真名は然！　我が真名、我が命、お爺様に預けま  
す」

己の覚悟の証として真名をあずけた。

今まであったこと全てが俺の血となり肉となっている。

まだ、未熟な身なれど華琳たちと出会い覚悟などとうに決まってい  
た。

今、それを見せるときだ。

「ふふ、弟に先を越されちゃったわね　お爺さま？　この華琳、  
そのような覚悟などすでに定まっております」

華琳が立ち上がり俺の見て微笑みお爺様に覚悟を示す。

次いで、春蘭、秋蘭、愛華も立ち上がりお爺さまを見つめ頷く。

皆、各々違えどもそれぞれ信念をもっているのだろう。

「然、確かに真名は受け取った。皆の覚悟もみせてもらった。……  
これより儂が全身全霊をもってお主らを育てる。よいな！」

思えばここが俺たちの　　後に魏という国の中心となる五人の出発  
点だったように思う。

これより先、俺たちには様々な苦難が待ち受けているのだがそれを  
知る由もなかった。

ただ、今は己の覚悟を、己の信念を糧に前に進むしかないのだから

……

## 第十二話（後書き）

中常侍・大長秋、曹騰さんは物凄く偉い人です。

中常侍というのは皇帝にはべってる人のことで

あとに出てくる十常侍ってのは12人の中常侍の集団のことなんです  
すね。

演義では10人に減っているらしいのですが……

## 第十三話（前書き）

今はもうちょっと先のことを書いていたのですがなかなか筆が進みにくい。

かなりの数の話数を書いていらっしやる作者さんは本当に尊敬に値しますよ……

## 第十三話

あの後、愛華も真名を預け俺たちはお爺さまに連れられ庭へと移動する。

そこには大小さまざまな武器が置かれていた。

「何事もまずは己の身を守れなければ話にならない」

まあ、そうだろう。これから先、必ず武の力は必要になる。

いずれ来るであろう乱世に立ち向かおうというのなら必須であろう。

「ここに多種多様な名のある武器を用意させた。各々に合った武器を探せ。まずはそこからだ」

華琳たちは元々、訓練をうけていたからなのだろう。すぐに自分にあつた武器を見繕う。

春蘭は大刀を、秋蘭は弓を、華琳は大鎌を  
いやちよつと待て！　なんで大鎌なんだ？

曹操といえは倚天いてんの剣……だよね？

「あの一、華琳さん？」

「なに？」

「なぜにそのような武器を……？」

恐る恐る聞いてみる。はつきり言って奇抜すぎる武器である。確かに戦鎌として武器として存在することはするのだが

「簡単よ？ 妙に手に馴染むのよ……」

そういつて大鎌を振り回す 確かに似合ってはいる。金髪の美少女が大鎌を振り回す姿は死神を連想させる。

なるほど、恐怖感を煽るには最適なのかもしれない。この時代に死神が鎌を振るう姿を思い浮かべる者がいるかは別として

「まあ、長剣も扱っただけけれど……こちらの方がしっくりくるのよ」

…… 本人がいいというならこれ以上は何もいうまい。愛華はさまざま長剣を振っては首をかしげている。どうやら自分にしっくりくるのがないのだろう。

「愛華は長剣を扱っのね……それなら少し待ってなさい」

華琳はそういってどこかへ去っていった。

俺も自分に合うものを探さねば……

弓でもいいのだがやはりここは違ったものを扱ってみたい  
長剣を手に持ち振るってみる……違う感じがする。

次に大刀を握るもこれも違う気がする。

なかなか難しいものである。扱っていけばしっくりくるのだろうか？

「待たせたわね」

たいして時間はたつてはいないがそういつて華琳は戻ってきた。  
その手には一振りの剣をもっていた……まさか

「これは私が護身用に作らせた宝剣の二振りの内のひとつ　青？  
の剣よ」

倚天の剣と対の宝剣の片割れ青？の剣。

史実においては曹操の寵愛をうけた夏侯恩に授けられ、後に趙雲に  
奪われた剣である。

愛華はそれを華琳から受け取ると手に握りじつと剣を見つめている。

「どうかしら？　性能は折り紙つきよ」

愛華はおもむろに剣を振るう。一振り、二振り、三振り……  
まるで、与えられた玩具に夢中になっている子供のようなのである。



いや、まだ本当に子供ではあるんだけど……

「はい、とても手に馴染みます。でも、いいのでしょうか？ 大事な宝剣なのではないのですか？」

「いいのよ。護身用としては剣はもう一振りあるわ。それに私にはこれがあるし、宝剣とはいえその性能を発揮できなければ文字通り宝の持ち腐れよ」

宝剣というのは宝のように大切に所蔵するから宝剣なんじゃないのか？

いや、現実主義の華琳らしいといえば華琳らしいのだろうけど……もう一振りというのはやはり倚天の剣でまず間違いないだろう。

「ありがとうございます。姉さん」

その例をいいたまた剣を振り始める愛華。よほど気に入ったらしいね。

さて、俺はといえば……ぜんぜん決まらない。

長剣、大刀、曲刀……どれも扱えそうな気がするのだが手に馴染む感覚がない。

刀剣類はちがうのかなと、槍を手にとってみる。

おっ？ いい感じである……長柄の武器が俺にあってるのか？

槍、薙刀、矛、戈、戟と手に握り振り回してみる。うん、なかなか手に馴染む。

あとはどれにするかなのだが……

「然は長柄武器なのかしら？」

「ああ、感覚としては長柄が合ってるように思うんだが……」

「これといったしっくりくる物がないと？」

そうなのである。手には馴染むのだがこれだっていうものがない。さっき愛華がさまざまな長剣を持ち振り回してたのもこんな気持ちだったのだろうか

「あれなんかどうかしら？ かなりの業物に見えるのだけれど……」

華琳が指さす方に目を向けるとそこにあっただのは少し変わった戟である。

戟というものは矛、戈が合わさった複合武器である。

矛の部分で突き、戈の部分で刈りとることができる武器である。

「ほう……それに目をつけたか」

お爺さまがなにやら感嘆したかのように呟く。

何やら華琳のいうかなりの業物なのだろうか？

……というか華琳、その年齢で武器の目利きもきくのか？

本当に何から何までチートな未恐ろしい子である。

矛の部分は長く太く延びており突くだけでなく斬ることも目的としてるように見える。

そして、戈の部分は両側についており鳥の翼のような形をしている。それでは鳥のような装飾がなされており美術品としても価値があるのではないだろうか？

「それはのう……物は最高なのじゃがな。様々な機能を求めるが故に扱いつらいものになってしまったものじゃ」

それっていわゆるひとつの不良品ってやつじゃ……？

多機能でも使われなくては華琳がさっき言ったようにそれこそ宝持ち腐れなんでは？

「物はいいのじゃよ。物は……」

本当に宝の持ち腐れのようにである。

まあ、華琳の推薦でもある。そして、俺も少し興味がある。とにかく、物は試しとその戟を手にとってみた。

衝撃が走った。

手に馴染む馴染まないというレベルではない。

手に吸い付くというか手の一部になったような感覚に陥る。

俺は思わず、その戟を振るう。

たしかにさきほどの長柄武器たちと重量のバランスが違う。

されども、これが俺にはしっくりくる。面白いように振るえる。

己の力で足りぬ分は氣で補ってはいるのだが

その己の氣すらもその戟には馴染んでいるかのように感じる。

「ほほう……お主にはそれが扱えるようじゃな」

愛華が青？の剣を手にもったとき夢中で振るってたのがわかる。

己のために作られたような感覚、ずっと使っていたかのような愛着感。

そこに技などなく無我夢中に振るう。

「気に入ったようじゃな」

「はい、とても初めて手にしたとは思えない感じですよ」

手をとめお爺さまに向き直る。

これはまさに相棒と呼べるものと出会えたように思う。

振るえば振るうほど手に馴染むようなのだ。

「うむ、その戟の名は『朱雀火戟』という」

ぶーっと思わず噴出しそうになる。なんとか踏みとどまったが……  
おい、ここにきてまた朱雀ですか？

なんだ？ 真名といいこれといい……なんか俺は四神に憑かれてたりするのかわ？

つてか、父上の呪いなのか？ 父上が初めに真名をそれにしようとしたからなのか？

「武器にはそれぞれ名がつけられておる。知っての通り名というものはとても大切なものだ」

なんとか気持ちを落ち着かせお爺さまの声に耳を傾ける。

たしかに、この世界では真名といい名を大切にする風習がある。

「名をつけるということは魂を吹き込むということじゃ。出来の良  
い武器には名をつけ魂をふきこむのじゃ」

そして、魂を吹き込むことによって己が武器を大切にし戦場では無  
二の友と為す。

とお爺さまは付け加え説明してくれた。

なるほど、カッコいいからとかいう理由ではないんだな……

「もちろん、華琳や春蘭たちの武器にも名はあるぞ」

そういつて各々の武器の名をつけていく。

華琳の持つ大鎌は『絶』 たしかに命を刈り取るということに関してはぴったりの名ではある。

そして、春蘭は『七星餓狼』、秋蘭の弓にも『餓狼爪』という名があった。

なぜ、弓なのに爪なのかはわからないが何かしら意味があるのだろう。

「ふむ、皆、各々に合う武器をみつけたようじゃな。それらはそなたら授ける。大切にするがよい」

ここに並べられた武器はどれも名剣、名槍なのだろう。俺たちのために集めてくれたのかがありがたい話である。

「今日のところは己の武器に慣れるために、各々、自由にせよ」

そういつと武器を家のものに片付けさせお爺さまは去っていった。ともあれ、俺たちはこれから長い間、共に戦場を駆ける相棒を手に入れた。

俺はこの朱雀火戟をもっていずれ人の命を奪うことになるのだろう。そのとき、俺は何を感じ、何を想うのだろう。

自分の覚悟はやわいものではないが揺らいでしまつのだろうか？  
実際に経験しなければわからぬことなのだろう。

「はっ！」

俺は迷いを振り払うように戟を振るう。今はただ己を磨くしかない  
だろう。

そして、そのことは心に留めておく、いずれくるだろうその日のた  
め……

### 第十三話（後書き）

ここで朱雀フラグを回収（違

然くんの武器はもの凄い悩みました。

剣にすべきか槍か偃月刀……もしくは己の拳か。

悩んだ結果、然くんの主な武器は戟と弓に決定しました。

魏に戟使いはたしかいなかったはずと……。

青？の剣は夏侯恩が登場する予定はないので愛華に持ってもらおう  
とになりました。

倚天の剣はさすがに鎌を（宮中などで）持ち歩くというのはどうか  
と思ったので

華琳が普段の護身用&儀礼用にもっていることになるかな？と……



## 第十四話（前書き）

都にいるなら出さねばならないキャラですよね。  
なんか私的には本当に難しいキャラ。  
ちやんとらしさがでているのか不安。

## 第十四話

突き、払い、打つ　長柄の武器の基本動作である。

あれから俺は毎朝、この基本となる動作を繰り返している。

何事も基本が大事であり、何度も何度も繰り返している。

そして、その動きから一つ一つ無駄を省いていく。

これを繰り返すことを朝の日課と決めた。

今はまだ朱雀火戟はまだ重く氣を多用するが

いずれは、氣を使わずとも扱えるほどになりたいものだ。

一汗かいたあと体を拭き朝食をとる。

そしてその後、皆で揃って机に向かい学問を学ぶ。

講師はお爺さまやその知り合いが招かれ教えを請うている。

本からの知識だけではなく現場の生の話はとてもためになるのだ。

その話は本には載っていない政治の話、有力諸侯の情報など多岐にわたる。

華琳、秋蘭などは質問など交わし積極的に参加している。

やはり、愛華には政治のことは難しいようで話についていくのがやつの様子。

春蘭は……頭から煙が見え、その顔からはすでに魂が抜けている。

なんというかこの世界の夏侯惇はお頭の方は残念のようだ。

昼になると今度は武の訓練に入る。

ここでも朝と同じくお爺さまやその知り合い、そして昇華さまからも学んでいる。

ほとんど実践形式であり、あえなく叩きのめされている。

氣があり体を自在に操れるから勝てるのでは？と思われるかもしれないが  
闘いとは必ず相手が存在するもので力だけではなくやはり経験がものをいうのだ。  
お爺さまもそれを知ってか経験が豊富な人物を招いてる。  
こうやって様々な闘いの経験を積みばいずれ隙がなくなろうとのと。

春蘭は頭脳ではなく本能で戦うタイプの人間なのだろう。  
この訓練では水を得た魚のように吸収している。  
戦いにおいての勘というものが非常にすぐれているのだ。

そして、夜になると各々が別々のことをしている。

華琳と秋蘭は本を読み、春蘭と愛華は互いに剣で打ち合っている。  
俺はといえば特に決まっておらず、一人で基礎の体作りをするのもあれば

氣の訓練などもするし、華琳たちと読書することもある。  
その日、足りないと思ったことを重点的にやることにしている。  
俺にはまだまだ足りないものが多すぎるからだ。

これが大体、俺たちの一日である。  
何事も毎日続けるべきだがさすがに休みというものがある。  
体や心に休息を与え、余裕をもつことも大切なことである。  
お爺さまはそう言い五日に一日は休みをいれるように命令した。  
そして、休みの日、まだここに来て日が浅く都には詳しくはないだろうと

華琳たちが俺たちに都の街を案内してくれることとなった。

華琳はたいへんな美食家でありおいしい食事処を教えてください。ただ、とても辛口なので悪い点などもはっきりという。その店の前で。頼むからそれだけはやめてほしいところである。

他にも服屋や小物の店、書店など様々な場所に案内してもらった。やはり、女性なのか買い物をする場所には詳しい。

今日は案内してくれるだけなのでいいが買い物となるとやはり長いのだろうか……

そして、今は華琳のお気に入りの茶屋でお茶をしている。

華琳曰く、ここの団子が絶品なのだそうだ。

「おお……確かにおいしそうだ」

そういつて持って持ってこられた団子を食べる。

確かにおいしい。甘すぎずさっぱりした味である。

そして、このお茶ともかなり合っている。

愛華も満足しているのか顔がほころんでいる。

「満足してくれたようね」

そういう華琳はやはり自信があったのか少し得意気である。

確かにいうだけのことはあるので頷いておく。

なんというか舌までチートとか本当に華琳は超チート人である。

そんな風に団子に舌鼓を打っているといきなり背後から物凄い笑い

声が聞こえる。

「おーっほっほっほ！ おーっほっほっほー！」

「……また、めんどくさいのが現れたわね」

俺は振り向くとそこにはなんとというか……

いや、本当になんと形容していいのかわからない人物がいた。

あえて形容すると、えーっと……中世かどつかのお嬢様？

金髪で縦ロール、華琳がいうなればドリルなら彼女はくるくる？

服も金ピカで豪華な服を身に纏い左手の甲を口元にあて高笑いをしてらっしやる。

………んたつか突っ込みどころ満載なお方である。

「お久しぶりね。華琳さん」

「ええ、久しぶりね、麗羽」

華琳が真名を呼び合っている。ただの知り合いどころではないのか？  
………友達は選んだ方がいいと俺は思うぞ。

「………あら？ 見慣れないお二人がいらっしやるわね」

「ええ、ふたりとも私の従弟妹よ」

「なるほど、華琳さんの……」

そういつて二人してこちらをみる。

おっと……あまりにあれな人物だったので思考が少し停止してしまっていた

「始めまして、華琳の従弟の曹仁、字は子孝です」

「同じく従妹の曹洪、字は子廉といます」

そう立ち上がり件の人物に向け二人して自己紹介をする。

一様、華琳が真名で呼び合うような人だ。そんじゃそこの人物ではないはず。

「わたくしがあの四代にわたって三公を輩出したため・い・も・ん袁家の袁紹、字は本初ですわ。二人ともよろしくしてあげてもよくてよ？ おーっほっほっほ！」

なんというかこれがあの袁紹なのか……？

そういえば、華琳からの手紙で仲良くなったとかそんな話があった

ように思う。

曹操に負けるまでは天下に最も近いとされた人物の一人のはずなのだが……

やはり、前世の知識はあまり当てにしない方がよさそうだ。

曹操と袁紹といい性別すら違うのだ……本当に参考程度にしとくのがいいのだろう。

いや……でも、あの袁紹ということだけはあるのかもしれない。

彼女の氣の量は華琳にも劣らないほど、破格だ　だがしかし、全然扱えてなさげである。

なんとというか巨大なタンクはあれども全く使えていない状態なのだ。このものすごいがっかり感はなんだろう……

「ほら、お二人も挨拶なさい」

そういつて後ろから二人が現れる。

袁紹がなんというかももの凄すぎて後ろに二人がいるのには気づかなかった。

「あたいは文醜、姫の従者をしてる。よろしくな!」

「すみません。わたしは顔良といいます。よろしくお願いします」

文醜は水色でショートの活発で幼さが残る少年のような少女である。そして、顔良はおかっぱでなにやら申し訳なさそうにしている。

なんとなく、顔良は物凄く苦労してるんだろうなあ……と傍目に見

てもすぐわかる。

「そんなことよりもこんなところ何をしてらっしゃるのかしら？」

「見てわからない？ お茶よ」

いや、そんなことって自分で挨拶なさいとかいってたよね？  
そして、華琳さんもなんか物凄くけんか腰なんですけど……

「顔良さん、顔良さん」

「あ、はい、なんですか？」

「この二人、仲いいの？ 悪いの？」

俺はこっそり一番まともそうな顔良さんの傍にいき訪ねる。  
いや、なんとなく話しかけやすいというか……ね？

「えーっと……昔は同じ先生に教えを請っていた同窓ということも  
あって仲良かったというか……常に二人で行動してたみたいなんです  
が……」



「……今はこんな感じと？」

「はい、仲が悪いというわけではないんですが……麗羽さまもなんだかんだ言っただけで声かけますし」

なるほど、ある意味では喧嘩友達というものなのかもしれない。華琳も気に入らなければ完全に無視をしてははずなのだがいちいち彼女の相手をしているところを見ると本当は仲がいいのかもしれない。

「まあ、なんとというか大変そうですね」

「いえ、もう慣れましたから……」

そういう彼女の目は諦めと憂いの色を宿していた。

ああ、頑張れ……俺は応援することしかできないが……  
そういう念をこめて肩をポンポンと叩く。

彼女もわかってくれますか……とさめざめと泣いていた。

「あー、てめえ！ あたいの斗詩をなかせたなあ！」

「あ、文ちゃん、違うよ。これは」

怒る文醜を必死に止めて事情を話してくれている。  
こっちでも苦勞してるのか……まさに四面楚歌だな。  
それにしても、あたいの……？ ここにも百合臭が漂ってらっしゃる。

なんというか華琳の周りにはそんな人物があつまってくるのだろうか？

「あー、文醜さん、すまん。ちょっとあの二人の話を聞かせてもらっていてな」

「なあ〜んだ。そういうことならあたいに聞けばいいのに……あたいのことは文醜でいいぜ」

「なら、俺も曹仁でいいよ」

なんとも切り替えが早いスカツとした男前な性格である  
この二人とはなんとか仲良くやっていけそうだ。

「なあ〜にをくっちゃべてるのかしら？ 文醜さん、顔良さん帰りますわよ！」

「はあ〜い、姫。じゃあな、仁のあんちゃん」

「すみません。曹仁さん。失礼します」

……仁のあんちゃんって呼ばれ方はなんか新鮮だな。

言い合いが終わったのかプリプリと怒りながら袁紹が二人を連れ去っていく。

最後に顔良が俺たちに頭を下げ二人に置いてかれないように小走りで追いかけていった。

いや、本当にいい子だな。顔良さん。今度会ったら胃に効く薬草を教えてください。

「それにしてもなんとというか凄い人でしたね、兄さん」

「ああ、手紙に仲良くしてると書いてたと記憶していたんだが……」

愛華も何か呆れ気味だ。俺は手紙のことを持ち出し華琳を見る。

華琳はさっきとは怒ってるような雰囲気とは打って変わってすっきりした顔をしていた。

「あら？ 仲はいいわよ？ からかうと楽しいでしょ？」

前々から思ってたけどこの人、ドSだ！ ものすごいドSだ！ 武器に大鎌選ぶようなところから薄々と感じてはいたが……

さすがは乱世の奸雄と呼ばれることだけはある……のか？

「まあ、昔はこんなでもなかったのよ？ 麗羽も昔は可愛らしくて素直な子だったのにどうしてあんなのになっちゃったのかしらね」

いやまあ、原因一つは確実に目の前にいるよ？

袁家っていうのは言うまでもない本当に名門中の名門なのである。

その名門の跡取り娘が格下の家とはいえチートな華琳とずっと一緒にいたのである。

いや、格下の家だからこそだろう、周りの重圧もあり何をやっても勝てないなんて地獄かと……。

勝てないと悟った相手に出来ることは三つ、無視するか臣従するかさらなる対抗をするかである。

華琳ほどの相手は無視することすらできない。あまりにも目立ちすぎるからである。

そして、名門である袁紹は臣従すらできない。ならば、できることはさらなる対抗しかない。

そこで彼女が今、華琳に勝っているものといえば？ ……そう家柄だ。

だから、気が付いたら家柄を自慢ばかりするようになりあのような性格になったのではないか？

まあ、あくまで俺の予測でしかないのだが……ほぼ間違いないのではないかと思っっている。

その素養があったのかもしれないが華琳がいなければもう少しまともであったのかもしれない。

ある意味でチートすぎる華琳の犠牲者であるのかもしれない。

「それにしても、よく大人しくしてたな？ 春蘭」

「ん？ 毎度のことだからな」

そういつて団子をひたすら食べ続けている。

華琳の悪口を一言でも聞くと即座に斬りかかる春蘭ですら慣れるぐらいなのか……。

まあ、これは俺がでしゃばるようなことではないか……？

「さてと、そろそろ帰りましょうか？」

「ん？ まだよるところあったんじゃないのか？」

「ふふつ、休みは今日だけではないでしょ？ 一日で周ってしまっ  
ては次の楽しみがなくなるわ」

……あー、なるほど。

だから、どつりで今日は都で暮らすのに最低限必要なものばかり紹  
介していたのか。

初めから全て計算ずくな行動だったわけか。

まあ、確かにまだまだ長い間、都で過ごすことになるんだ。

一日で全て案内しつくす必要はないな。

他のところは今度の楽しみに取っておこう。

「そうだな。また次の休みの日、案内よろしく頼む」

「ええ、まかせなさい」

そして、俺たちは次の休みもその次の休みも同じように華琳たちの案内をうけることになる。

さすがに、下着専門店につれていかれそうになったときは抵抗したが……

まだ、必要ないだろ？ そう口に出そうとしてやめたのは最良の選択だったように思う。

そうやって休みの日に出歩くと必ずとっていいほど袁紹たちと出会う。

そして、華琳と言い争いをしているのを見て顔良さんと苦笑している。

そんな何でもない日々がいつまでも続けば幸せだろう。

しかし、乱世という二文字は否が応にも俺たちにはつきまとうてくる。

手を取り合うことが可能ならばいいのだが、袁紹たちとはいずれ戦う日が来る可能性はあるだろう。

袁紹と華琳……お互いに背負って立つものが違いすぎる。

それでも、その日が来るまではこの幸せな日々を大切にしたい。

それが俺たちにとっては辛い思い出になろうとも

過ごした日々は掛け替えのないものになることには違いないから……



## 第十四話（後書き）

麗羽さま登場。

然くんの史実的人物像はある意味、彼女によって爆破されました。袁紹は情けない人物にされるのが多いけど人望もあり実力も兼ね備えてました。

善政を布いていて民にも人気のあったカリスマ性……それがどうしてこーなった。

まあ、三国がメインだから仕方ないのかもしれませんが……。



## 第十五話（前書き）

忙しくなつてまいりました。

12月からは更新が遅れそうです。

## 第十五話

都に着てからすでに二年が経つ。

毎朝、続けているこの鍛錬も板についてきた。

十二歳にもなると体も徐々に出来上がってくる。

戟を振るう力の最適化のおかげか氣をほとんど使わなくても

この朱雀火戟を振るえるようになった。

華琳たちもその武にますます磨きがかかっている。

もう並の大人では相手にすらならないほどである。

春蘭にいたっては相手できる大人を探す方が困難である。

最近、俺や愛華とばかりやりあってる気がする。

世間の情勢はさらに悪化の一途を辿っている。

朝廷では何皇后の威を借る何進が徐々に力をつけ始めている。

そしてそんな中、王美人が陛下との間に子供を為したことで自体はさらに混乱する。

何皇后が嫉妬から陛下の寵愛をつけていた王美人を暗殺したのだ。

そして、母を亡くしたその子は陛下の生母である董太后が育てることとなった。

そして、董太后と宦官である十常侍は手を結び、その子 劉協様を皇太子にしようと暗躍し始めた。

もう、昼ドラ真っ青のどろどろな愛憎劇が宮中では繰り広げられていた。

現在、曹嵩さまが三公の一つである太尉となっている。太尉とは軍のトップの役職で今でいう国防長官や防衛大臣にあたる。そして、各地に指示を出し今のところ賊などを押さえ込んでいる。それもまた、ただの応急処置にしかならないのだが……さらに宮中の争いが徐々に曹嵩さまにまでもおよび始め。今の役職も何かの理由をつけられ下ろされる可能性がある。

「本当に、何を考えてるのやら……現状が見えていないのかな？」

「いえ、見えていても自分の欲を抑えられないのでしょ？　そして、自己評価が甘いのよ」

「つまりは、自分が上に立てば何とかなるとか思ってるわけか？」

「過信で身を滅ぼすいい反面教師ね」

こんな風に華琳とはたまに現在の状況を話し合い考察しあっている。まだ官職についてるわけではないので政治には手を出すことはできないが  
こうやって情報を整理し考察し後々の糧として役立てることは可能だ。

やはり、華琳の頭脳はすさまじく回転が速い。

これならば軍師など必要ないのではないかというほどに……

まあ、一人でなんでも出来るとはいっても華琳は一人。

今はいい手が足りないことも出てくるだろう。

だが、華琳は一人が全てをやってしまうことの弊害すらも熟知しているのだ。

だからこそ、華琳は優秀な子を好む。

自分のように……いやそれ以上にこなせるものを常に求めている。

もし、自分が上に立ったとき自分なしでは何もできないなどということがないように……。

休みの日は都に来た頃とは違い各々が好きなことをしている。

俺は珍しいかもしれないが秋蘭と狩りにでかけることもある。

都とはいえ少し馬で離れば山もあり森だって存在する。

初めは、皆で狩りにいったのだが自然とこのような形となった。

春蘭は狩りには向いておらず、愛華は弓の扱いが壊滅的に下手だった。

正面を狙って真上に飛んだときにはさすがに自分の目を疑ったものだ。

華琳はできるにはできるのだが狩り自体をあまり好まなかった。

そして、最終的に残ったのが俺と秋蘭といったわけである。

まあ、お互いに弓の扱いには得手としているもので競いあっている。

秋蘭は特に風を読むことが異常に優れている。

風を読み風に寄せたり風の隙間をぬったりして遠くまで矢を飛ばし命中させる。

かなりチートな技をお持ちなのである。

それにしても、秋蘭が場の空気を読むのに長けているのとなにか関係しているのだろうか？

だから、空気を全く読めない春蘭は狩りが下手なのか？？

俺も風はある程度読めるのだが秋蘭ほどではない。かなり遠い獲物は外すこともある。

自分の体を自由に操ろうが相手の気を読もうが外的要因である風まではどうしようもない。

弓矢というものはなかなか奥深く難しいものである。

そこで、それをどうにかできないものかと試行錯誤し一つの考えに思い至った。

風を読めないなら逆に風を気にしなければいいじゃないと……

要するに風に影響されなければいいのではないかと。ということ。

つまりは風さえも貫けばいいんじゃないかと……。

そこで、ふと楽進の技を思い出したのだ。

楽進の氣弾をみてから俺もずっと練習していたのだが楽進ほど上手く氣弾を形成できずにいた。

やはり、才能というものが関係しているのか氣弾が出来上がるまでの流れなどは理解できている。

氣を体外に流すことも可能だ。しかしながら、氣弾という形を為すには至らなかつた。

やっぱり、あれは楽進ゆえの異能力と言っても過言ではなかつたのだらう。

非常に残念である。二本の指で、繰氣弾っ！とかやってみたかつた

……。

それはさておいて、氣を弾としてゼロから作り上げることが不可能に近いのだが

形あるものに氣を纏わせるということは俺にもできるようだ。

つまりは、矢自体に氣を流し込み風など物ともしない勢いで飛ばそうとしたのだ。

だが、それもそうそう上手くはいかないものである。

矢に氣を流し込みすぎたのかいきなり矢が爆発したときにはかなりびびった。

そして、単純に氣を込めれば速度が上がるといったものでもなかった。

そこで、思いついたのが銃弾である。

いや、銃弾をつくるということではなく銃弾の仕組みである。

要するに矢を回転させればいいのではないかと……

銃弾は銃身に螺旋の溝が刻まれており回転しながら発射される。

そして、回転することにより弾道が安定し精度が上がるときいたことがある。

矢でも羽根による空気抵抗で回転させているらしいのだが

それを氣で代替しさらに回転を加えることができなかと考えたのである。

早速、矢を放つ瞬間に氣を螺旋状に流し矢に回転を与える。

すると、弾道が安定したのか飛距離がのびた。

精度も今までよりも遠くの箇所でも狙った箇所へと的中するようになった。

それとは別に、鏃に氣を流すことで貫通力を増すことにも成功した。これからもいろいろ試してみようと思う。

狩った獲物は自分たちが使うもの以外は都の店に安く卸している。初めは昔みたいに配ろうかと思っていたのだが

労力にはそれなりの対価が必要、無料の奉仕はすぎると返って毒であると華琳に諭された。

その通りなのかもしれない。そういうものは優しさとは言わない。

そこで店にいろいろ安く卸すことにしている。店の人には大変喜ばれている。

狩りを生業としている人の仕事をうばってしまうのではないかと危惧したのだが

最近、都では狩りをする人が少なくなっているらしい。やはり、賊が原因である。

都の周りでも賊は出てはいるがさすがにそこまでの数は存在しない。地方で襲う方が安全だからだ。それでも存在しないというわけではない。

都では探せば他の仕事だって存在する。ならば危険を伴う狩りをしなくとも生活はできるのだ。

それでも、狩りの職にプライドを持ってやっているものは存在する。だが、数が減ってはきているのか店も少し困っていたそうだ。

だからこそ、安く卸してくれる俺たちには感謝してくれているようだ。

そして、この店とのやり取りには一つの思いがけない利点が発生した。

それは情報網である。商人同士の情報網は舐めてはいけない。様々な箇所からの行商人から情報が集まってくるのである。俺たちは獲物を安く卸す代わりにそういった情報を得ることに成功していた。

「何から何が手に入るなんて……本当に世の中わからないものね」

確かに瓢箪から駒といったようなものはある。

俺は残りの獲物を秋蘭と二人で調理し華琳たちに振る舞いながらそういった情報を伝え、整理し話し合っているのだ。

振舞った料理も華琳にはようやく合格点を頂いている。

そのうち、前世の料理も調理してみようかと思っではいる。

「それで、諸侯がちよつとした小競り合いを始めてるのね」

「孫堅、劉表あたりがきな臭くなっているらしい。そこに袁家の後押しがどうか……」

「袁家？ 袁紹のところですか？」

「いや、袁術の方だな」



「袁術？ 確か、父母を病で亡くし本人もまだ幼いと聞きましたが……？」

「ああ、だから袁術派の袁家ってことだな」

袁家には現在、有力な人物が二人、袁紹と袁術がいる。

袁紹と袁術は従姉妹同士であり両人とも早くに親を流行病で亡くしている。

そして、現在、叔父が袁家を取りまとめているのだがその叔父には子がいない。

故に、袁紹、袁術共に袁家の跡取り候補なのである。

どちらも名門である事は疑い無いが袁紹は実は妾の娘であるのだ。それに比べて、袁術は父母ともに家柄は高く袁家の嫡流として生まれた。

名門である袁家は家柄を大切に重んじ跡取りは本来なら袁術になるのだが

袁紹の方がなぜか人望があり跡取りへと押す声大きい。

もちろん、その叔父が袁紹の養父であるということも大きいのだろう。

そこで現在、袁家は二つに分かれ始めているのである。

あくまで袁紹を跡取りにする者たちと家柄もよい袁術を正統とする者に……。

まあ、袁紹本人はそんなこと気にしておらず袁術を妹として可愛がっているらしいが

案外、こういうところが人望に繋がっているのかもしれない。

意外ではあるが彼女が大物の器を兼ね備えているのは間違いはないのだろう。

「然と秋蘭はそのまま情報を集めて続けてちょうだい。今は情勢を知ることが重要よ」

「はっ、わかりました、華琳さま」

秋蘭が恭しく一礼する。おれも頷き了承の意を示す。本当に情勢が悪化の一途を辿っている。

都だろうが地方だろうが争いの火種が徐々に撒かれ始めている。

これがいつどこで爆発するか見極めなければならぬ。

まだ、俺たちは子供ではあるが情報があるのとないのとでは対処できる幅が変わる。

周りの情勢にはつぶさに気を配っておかねばならない。

下手すると気が付けば『詰んでました』ということになりかねない。

俺は本当に大変な時代に生まれついたものだなと嘆息しつつ

自分で作った料理を食べた。おっ、中々いけるな……

## 第十五話（後書き）

銃、弓の回転だとかあんまりつつこまないでくれると嬉しい。  
氣すげー程度に思ってくれると助かります。

## 第十六話（前書き）

連日、睡魔に負けまくり。  
ちよっと期間があいたけど16話です。

## 第十六話

目の前には地獄が広がっている。そう……まさに、地獄絵図である。建物は壊され、焼かれ、その焦げ跡が生々しく残っている。

人だったものがそこらに転がっておりそこら中に血の跡がこびりついている。

母を捜す子が泣き叫び子を亡くした母が呆然と座り込んでいる。

ああ……これがこの世界の現実なのだと改めて実感させられた。

都にすでに三年住んでいることになる。

つまり本格的に武を磨いて三年ということになる。

俺が朱雀火戟と出会い三年でもある。

「でえやああああっ!」

三年ともなるとこの相棒とも慣れたもので春蘭の斬撃を受け流せるようになった。

俺はお返しとばかりにそのまま力を利用し戟を回転させ春蘭に打ち込む。

「ぐっつー!!」

春蘭も振り下ろした刀をギリギリのところまで返し俺の戟に合わせる。力比べでは分が悪いと悟ったのか春蘭が距離をとり構えなおす。俺は油断せず何処からでも対処できるように春蘭を見つめる。

「はあああああーっー!!」

気合一閃、物凄い瞬発力で間合いを詰めてくる。

春蘭はその勢いのまま目に見えぬほどの速さの太刀筋を俺に向け放つ。

だがしかし、俺の眼はそんなに甘くはない。

その太刀筋を眼で捉え、またも戟を合わせ受け流す。

今度はそこに自分の力を上乘せし春蘭に向け振り払う。

それすらもその瞬発力から返そうとした春蘭の大刀を足の裏で押さえ込み

春蘭の首元で戟をピタリと止める。

「終わり……だな？」

「むう……まいった。……もう一度だっ、もう一度っ!!」

「むっ、春蘭。次は私の番であったはずだ」

初めこそ武器というものの扱いがわからなく戸惑ったもの  
今ではこの相棒を手足の延長のように扱えるようになった。

当時の春蘭の攻撃をまともに受け武器ごと吹っ飛ばされていた頃が  
懐かしい。

受け流せるようになってやっと吹っ飛ばされる回数が減り  
カウンターを覚えて勝ち数が増え始め、相手の力すら利用し始めて  
勝ちが上回った。

俺だって男だからずっと負けっぱなしなのは多少悔しいのである。

「ここは年上にゆずるべきだ」

「それを言うなら年下の私にゆずるべきです」

愛華の武器は全体的に高い水準の身体能力である。  
スピードもあり力もあり平均的に能力が高いのだ。

そして、叔母仕込み正統派の剣技を使いこなす。

確かに春蘭のような怖さはないが正統派ゆえに隙という隙がない。  
これといった弱点が見当たらないというのが愛華の長所である。

完成された剣技というものは崩すのが容易ではないのだ。

「姉者、愛華、そこまでだ。もうそろそろお爺さまに呼ばれていた  
時間だろ？」

お爺さま本人が言つてた通り三年という月日が日々彼から力を奪つていく。  
今では杖をつかねばならぬほど体には衰えが見える。  
氣の力も徐々に小さくなり三年ほど前と比べると本当に衰えたといえる。

「もう、そんな時間か」

そんなお爺さまからの久しぶりの呼び出しである。

何か特別な日であつたかなと思ひ浮かべるが何も思い当たるものはない。

まあ、行けばわかるだろうと考えるのやめ広間へと移動する。

そこに待ち受けているものが俺たちに重く押し掛かるものだとは知らずに……

広間に向かうとすでに華琳とお爺さまは座っていた。  
互いに無言であり場の空気が少しばかり重い。原因はお爺さまであるろう。

ただならぬ雰囲気を感じ、目を閉じ静かに沈黙している。

「遅くなつてすいません。これで全員揃いました」



そういつとお爺様は閉じていた目を静かにあける。  
その眼光は衰えた老人のものではなく鋭く俺たちに突き刺さる。  
そう、あの覚悟を問うてきたときの眼と同じである。

「よく集まった。まずは座りなさい」

俺たちは席につきお爺さまの改めて方へと向き直る。  
そして、唐突に語り始める。

「三年……お前たちに僕の全てを教え込み三年がたった」

三年。短いようで長い。

この三年の間、本当にいろいろなことを学んだ。

「お前たちの才覚はすばらしく、そのほとんどを吸収しそれぞれに  
素晴らしい才能を発揮しておる」

もちろん、お爺さまだけからというわけではないが  
政治学、軍略、地理、武術などなど吸収できるものはなんでも学ん  
だ。

「教え込むべきことは全て叩き込んだと思っておる」

本当にこの三年間は濃密な時間を過ごしたと思う。

現場を経験していたからこそ知っている話はこれから先、必ず役に立つだろう。

実戦経験者との実践的な稽古も必要不可欠なものだった。

お爺さまやその知り合いの人たちにはとても感謝している。

「だが、お前たちに一つだけ足りぬもの……教えておらぬものがある　実戦じゃ」

ついに来たか。俺の感想はこの一言である。

実戦を経験するには十三歳とまだ早いのかもしれない。

しかし、十三歳で戦場を経験しているものもいる。

さらに言つならば、お爺さまの時間の問題もあるのだろう。

「さきほど、この洛陽から少し離れた村に50人ほどの賊が現れたという報告をうけた」

「……賊ですか？　村の方は？」

「すぐに斥候を放つたが、賊はすでに村から逃げた後じゃ」

都の周辺で50人規模の賊が現れ村が襲われること。それこそが国の力の弱体化を物語っている。

「それではその賊を？」

「うむ。……だが、まずはその村に行ってもらおう」

「なぜ？ 村に？」

「……現実をその目に焼き付けてくるのじゃ 儂もいこう」

それだけ言うとお爺さまは自ら出掛ける準備を始める。

皆、一様に止めはしたがこれだけは譲れぬとお爺さまは頑なに貫いた。

そうして、俺たちは曹嵩さまを通じて官軍などに許可を取り

昇華さまが将として曹家の私兵150人の精鋭を引き連れ

俺たちはそれについていく形で一路、襲われた村に向かう事となった。

村についてすぐに目の前に広がった光景に俺たち5人は言葉をなくした。  
伝え聞いていたものと実際に目にする光景は同じだとしても感じ方は全然違う。

現実を目に焼き付けろ……たしかにこれは戦場を知らぬ俺たちになれば非現実的な世界である。

そして、いずれ経験するだろう現実である。

「これが現実……」

誰の呟きだろうか？ ゴクリツと喉の音がする。

昇華さまたは兵たちに指示を出し救援活動をしている。

俺たちはお爺さまの言われたとおり瞬きもせずはこの光景を眺めた。目をそらすことはできない。これは俺たちが目に焼きつけねばならぬ光景。

この現実をどうにかするために俺たちは三年間ずっと学んできたのだから……

「知ったな？ 現実を……。これらは今、この国のあちらこちらでよくある光景じゃ」

「ぐっ」

春蘭の拳が怒りに震えているのがわかる。

いや、俺たち全員が拳を握り締めている。

「こうやって民が犠牲になり続けておる。弱き民は虐げられる……。しかし、これを為したのも元はといえば民であることには違いないのじゃ。ある意味では奴らも被害者といえるのじゃろう」

食うに困り賊になるしかなかった。そういう人も存在するだろう。

「だが、許すわけにはいかぬ。見逃せば……。それはさらなる犠牲が産む この光景をみよっ！！ 放っておけばこれがこの地獄がまた繰り返し広げられる」

ああ、正論だ。被害者だからといって見逃せばさらなる被害を受ける人々がいる。

彼ら 日々をただ一生懸命いきっているだけの人たちがただただ犠牲になり続ける。

それを許せるか……？ 許せるはずがない。

「だからこそ賊は討たねばならぬ。そして、それは誰かが為さねばならぬのじゃ」

そう、人殺しなんて誰しもやりたいわけではない。

だが、俺たちは税を収め懸命に生きている人たちを背負っているのだ。

官軍はあてにはできない。ならばそれは

「そう、これからはお前たちは民を背負うことになるじゃろう。だから、お前たちは民を守るため獣に堕ちた者どもを討たねばならぬ」

民を守るために堕ちた民を討つ。それは矛盾。  
俺はもう一度、この光景を目に焼き付ける。

「そして、その死、犠牲すらも背負って前に進まねばならぬ。それがそれこそが上に立つものの役目だからじゃ！」

殺したものを背負って守るべきものたちを守るため生きねばならぬ。  
い。

それはひどく重い責任。だが、やらねばならない。  
この光景を見て腹の底から怒りが沸いてくる。

しかし、怒りのみで行動しては駄目だ。それは違う。  
それを教えてくれたのはあの村で出会った楽進。彼女の怒りは純粹に前を向いていた。

だから、俺が……俺たちがやるべきことは討つことではなく守ること。

民の命だけではなく生活や心を守らなければならない。

賊は討つべきだが討つことを目的としては駄目だ。

民を守るために討たねばならない。

やることは同じかもしれないが俺たちはそのさらに先を見なければ  
ならない。

賊を討てば終わりというわけではないからだ。

「その教え、この曹孟徳、この心に刻み生涯忘れませぬ」

華琳が一步前に立ちお爺さまに頭をたれる。

俺たちも同じように一步前に進み、お爺さまに頭をさげる。

「この後、賊の根城に夜襲をかける。各々覚悟をきめておけ、そして、その覚悟を儂に見せるのじゃ!!」

そういつてお爺さまは去っていく。

それから俺たちは村の復興の手伝いをし、村の現状をしっかりと目に焼き付ける。

「何で守ってくれなかったんだ!!」

こちらに向け泣き叫び怒りをあらわにする者もいる。

なんでもっと早く来てくれなかったんだと理不尽な怒りをぶつけられる。

これもまた受け止めなければならない、目をそらしては駄目だ。

「  
ありがとう」

ポロポロになりながらもそういつて笑ってくれる子がいた。

俺たちはこの笑顔を守らなければならない。

その子の笑顔を脳裏に焼き付ける。

守るべきものは見失ってはいけない。

怒りを向けるべき相手を間違ってはならない。

そう心に刻み付けながら俺たちは黙々と村の復興作業を手伝っていた。

そうして、俺たちは様々な光景を目にし、夜に向け己の心の準備を整えるのだった……。



## 第十六話（後書き）

そろそろ初の実戦。

あと念のために春蘭は弱いわけではないですよ。  
然は春蘭にとって相性が悪すぎる相手なだけですから

## 第十七話（前書き）

戦闘描写、少し残酷な表現もあり。  
苦手な方はお気をつけください。

## 第十七話

優秀な斥候により賊の根城はほどなくして割れた。

この村より3里ほどはなれた場所にある廃墟　　名すらも忘れられた村の跡である。

お爺さまはさすがに体調からか参加はできずに村に残ったが

俺たちは昇華さまの指揮のもとすでに村を発ち賊の根城へと行軍している。

斥候によると賊の数は70人前後、20人ほど増えている。

村を襲った人数以外にもその根城で待機していた賊もいたのだろう。

こちらもさらに先行していた部隊を加え200人になっている。

俺たちの軍は数の上でも質の上でも賊に勝っている。

「初陣か……」

「あら、怖いのかしら？」

「ああ、怖いね」

俺は華琳の質問に素直に即答した。

これから、殺し殺されの舞台が目の前で広がるのだ。  
怖くないわけがない。

「その割には余裕そうにみえるのだけれど……」

「そうかな？ これでも緊張してるんだけどね」

「……私もよ」

まあ、当たり前か。

いくら未来の英雄であっても今はまだ子供。

そして、これが初陣なのである。緊張しないわけがない。

「ちょっと、手を握ってもいいかしら？」

「ああ」

そういつて俺たちは手を握る。

お互いの手の温かみがそこに存在するのだと認識させてくれる。

俺は目を瞑り、今まで出会った人たちの顔を思い浮かべる。

そして、目を開け愛華、春蘭、秋蘭……最後に華琳を見る。

華琳もこちらを見つめ二人で頷きあう。

「もう、大丈夫よ。私はやれる」

そついい華琳は手を話し春蘭たちの下へと行く。  
どうやら浮き足立っていた春蘭たちを落ち着かせるみたいだ。  
俺も愛華に近づき、そつと頭に手をのせる。

「愛華、心配するな。お前は俺が守ってやる」

そついつて愛華と顔を合わせニカツと笑顔作ってみた。

「ふふっ、似合わないですよ。そんな台詞」

「そうか？ たまにはかっこつけてみたんだけどなあ」

俺はそつ頭をかきながら前へ進む。  
後ろから『ありがとつございます』と小さく呟くのが聞こえた。

根城である村が見えてきた。

そこは人の気配はするものすでに寝静まった後なのかとても静かである。

昇華さまは兵に指示を与え部隊を二つにわけ村の反対側に伏せさせた。  
どうやら昇華さまがいる部隊で村に突撃し敵を前面から包囲しながら殲滅しつつ  
敵を後方へ後方へ誘導しそこで待ち構えている別働隊に殲滅させる  
といった作戦である。

「曹操たちは別働隊の後方部隊にいなさい」

華琳は少し不満を漏らしそうになったがここでは昇華さまが指揮官である。

……というより突撃したかったのか？ 華琳……。

「今は戦場の空気を感じることに専念しなさい」

そういつて昇華さまは奇襲の準備に入る。  
俺たちは副官が率いる別働隊とともに村の向こう側へと周りこむ。  
そして、そこで静かに待ち構えることになった。

重苦しい……これが戦場の空気なのか？  
皆、静かに瞑目し今か今かと待っている。  
俺も高ぶる精神を目を瞑りゆっくりと静かに落ち着かせる。  
そして、俺は静かに村の方角へと目をやる。

オオオオオオオオオオオオオオ

ドクンツと胸が跳ね上がる　どうやら始まったようだ。  
騒がしい声とともに村のあちらこちらに火が灯り始める。  
こちら側にはまだ賊の姿は見えない。

(長い……)

まだ数分もたっていないだろうがとても長く感じられる。  
ドクン、ドクン、ドクン……やけに心臓の音がうるさい。

(来たっ!!)

村から盗賊がわらわらとこちらに向かってくる。  
奇襲が上手くいき過ぎたのか統制がとれてはいないのか思ったより  
数が多い。

副官の人が手で合図を送り兵に矢の準備をさせる。  
こちらに気づかずに向かってくる賊たちを充分に引き付ける。  
何も知らずにこちらに駆ける賊を引っ付け、引きつけ、引き付け

「つてーっ!!!!」

その声と共に一斉に放たれる矢。

それは放物線を描き次々と賊に向かって降り注ぐ。

「容赦はいらぬ！ 総員、賊を殲滅しろっ！」

そう言った瞬間、全てが動き出す。

いろいろな場所で飛び交う怒号、悲鳴、怨嗟の声。  
そして、血の匂いが漂い、断末魔の音が響き渡る。

(これが……戦場)

目の前で繰りひげられる阿鼻叫喚。

その地獄を呆然とした御面持ちで俺たちは見つめていた。

それらは何か他人事のように遠く感じ、己の心臓の音がうるさく響く。

「うっ……」

愛華が吐き気を催したのだろうか……そのうめくような声でハッと  
する。

そして、徐々に己の頭がクリアになり……一つの疑問が頭をよぎる。  
それでいいのか？ 　ただ、見ているだけでいいのかと……。  
俺の目の前では曹家の兵と賊たちが互いの命を奪い合っている。



そんな他人任せでいいのだろうか？

いや、いいのではないか？ 今日初陣だ。俺にはまだ早い。いずれは奪うこともあるだろうが今することではないのではないか？

いろいろな声が俺の頭の中で飛び交う。

その考えは甘く俺の中へと深く優しく浸透し

何を考えているっ！

俺はすでに覚悟を決めたのではないか？

お爺さまに誓ったではないか？

愛すべきものたちを守ると華琳を支えるのだと……

今、この甘い声に逃げていたらこの先ずっと逃げたままではないのか？

俺は華琳を見る。彼女は何かに耐えるかのように戦場を見つめている。

愛華の方へ顔を動かす。顔色が悪く何かにおびえながらも戦場からは目を離さない。

己の手を見る　手を汚す覚悟はあるか？　と自答する。

すでにその答えはここにある。

俺の覚悟や信念は嘘じゃない。嘘にしてはいけない。

今、行動を起こさねば逃げることを覚えてしまう。

逃げたい気持ちを己の覚悟で塗りつぶす。

ドクンッ、ドクンッ、ドクンッ……

心臓の音がうるさい。俺はそれを己の意思でねじ伏せる。

己の体は俺の意思でなんとでもなる。

ならば、この心拍数ですら操ってみせる。

緊張で凝り固まった体に火をいれる。

俺は戟を地面に突き刺し背負っていた弓をかまえる

そして、心の引き金を引く。

### 曹子孝、参る

俺は息を吐き、弓に矢を番え狙いを定め 放つ。

矢は曹兵の背後から命を刈り取るうとする賊の頭に寸分の互いもなく突き刺さる。

瞬間、心を押しつぶすかのような罪悪感にさいなまれそうになるがそれすらも己の精神力でねじ伏せる。お前の全ては俺が頂き糧とする。

もう、一射、二射と矢を放ち、俺は地面に刺した己の相棒である朱雀火戟をギュッと握りしめ

「おおおおおおおーっ！！！！！！！！！！」

力の限り、己の全てをねじ伏せるが如く咆哮する。

そして、戟を構え戦場へと飛び込もうとする。

「然？」

ふと心配そうな華琳の声が聞こえる。

戦場にあてられ暴走したのかと想ったのだろうか？

俺はゆっくりと振り返り

「大丈夫、冷静だよ。……でも、今、逃げたらきつと後悔するから」

俺は華琳に向かい口元を吊り上げ心配は要らないとばかりに告げる。言葉が足りないかもしれないが華琳ならこれだけで理解してくれる。

250

「ええ、そうね。私の中にも戦わずに逃げるといふ言葉は存在しないわね」

そついうやいなや華琳の目に覇気が宿る、いや体中からあふれださんばかりに吹き上がる。

それにあてられてか春蘭、秋蘭……愛華の目にすらも火がともる。

俺にさえ力がたぎってくるのがわかる。

なるほど、これが英雄、王というものなのかもしれない……と頭のどこかで納得する。

「先陣は俺が切る。華琳は俺の後ろに、春蘭、愛華はその横で華琳を頼む。秋蘭はその背後から俺たち全体の援護を！」

このままでは華琳が先陣を切ると言わんばかりだったので俺は矢継ぎ早に指示を出す。

華琳以外が一齐に返事を返し、華琳も仕方がないと言わんばかりに頷く。

「いくぞっ！！！！！」

そして、俺は一気に血が飛び交う戦場へと駆け出す。

俺たちの存在に気づいた賊がいい獲物がきたとばかりにこちらに向かってくる。

俺はそれを手に氣をたぎらせもっていた戟で一閃する。

「おおおおおおおーっ！！！！！！」

手にいやな感触が伝わるが今はそれを無視する。

そんなこと、この場では考えていられない。考えている暇はない。

「ガキがなめて」

最後まで言葉なんて吐かせない、次に向かってきた賊の首を跳ね飛

ばす。

戦場で駆け回る子供をみてこちらが穴だと考えたのか賊が殺到する。背後から秋蘭による複数の矢が飛び春蘭、愛華が咆哮する。

俺は賊からの剣撃を跳ね飛ばし返す戟で切り裂く。

背後から大鎌が横に一閃し、俺の横合いから突っ込んできた賊を斬り飛ばす。

「 あら、援護は必要なかったかしら？」

背後からそんな冷静な声が返ってくる。

そんな華琳に俺はニヤリと口を吊り上げることで返し

こちらに向かってくる賊たちを次々と斬り、刈り、叩き潰す。

不思議な感じだ

他者の命を奪っているのに妙に頭は冷静に物事を考えている。

目の前の光景は前世では考えられぬほどの所業を為しているにも関わらずだ。

ふいに奪った命が光の玉となり大きな河へと流れ込む様子を幻視する。

ああ………そういえばそうだった。死ねばあの世界へと向かうのだった。

死んだ魂はあの美しい河へと合流し流れ、そしてまた、それぞれの世界へと生れ落ちる。

俺はそれを知っている。俺もそこにいたのだから……

ならば、せめて

この賊たちも来世ではもつとましな人生を歩めることを願おう。  
もつと生まれ落ちる世界が平和な世界であることを願おう。

勝手な願いかもしれないが今の俺にはそれしかできない。

だから今は、俺の俺たちの糧となれ。

俺は、俺たちはその糧を決して絶対に無駄にはしないと誓おう。

この真名にかけて

第十七話（後書き）

こういうのはやっぱり難しいね。

いろいろ試行錯誤してみるがどこか破綻してそうな気がしてならない。

やっぱり、いろいろなもの読んで勉強するしかないね。

これからも頑張って更新していきます。

## 第十八話（前書き）

12月とはなぜにこんなに忙しいのだろう。  
来週あたりは忘年会とかあるっぽいし……。  
酒が激弱い俺には苦痛の日だ……。



## 第十八話

彼女はただ見つめる。己の爲したことを忘れぬように……  
血の匂いがあたりを覆い、無残に切り捨てられたものが転がる。  
それらを表情を消し、ただただ見つめる。  
彼女は何を見つめ、何を想い、何を考えているのだろうか？  
ただ、その目には迷いはなく何を決意するかのようにだった。

夜が空け東の空が白み始めたころ、賊はほぼ殲滅されたとの報をうけた。

今は逃げ延びた賊がいないか辺りを兵たちが搜索しているところだ。作戦は無事成功したということだろう。

村に突入した昇華さまも怪我もなく無事に今は搜索の指揮を執っている。

ただ、兵が全て無事というわけではなく少ないが死者はでた。

怪我人も少なからず存在し、そこから応急処置がなされている。

俺たち五人はというと怪我もなく無事に夜明けを迎えることができた。

初陣ということもあり今は休むように言われている。

そして今、華琳は戦場であった場所に立ちその惨劇の跡をジッと眺めている。

春蘭たちも各々、やはり何か思うところがあるようで皆、一様に黙  
り込んでいる。

そんな光景を俺もただ見つめていた。

人を斬った感触は今だにこの手に残っている。

俺は自分の為したことに後悔は決してしない。

いや、俺だけではなく彼女たちもそれは同じであろう。

だが、この手に残ったものはとても気持ちのいいものではなかった。

これから俺はこれを何度も何度も繰り返すのだろう。

洗えば血はとれる、しかし、この汚れまでは落ちてはくれない  
だろうな

血に濡れた己の手のひらを見つめ、ふとそんなことを思う。

東から朝日が昇り、日の光が辺りを明るくする。

俺はふと顔を上げ光の差す方へと目を向ける。

そこには日の光に照らされた少女の姿があった。

惨劇の上に立つ血に濡れた彼女の姿はなぜかとても綺麗でとても儂く

それでいて強く強く輝いているように思えた

事後処理も終わり俺たちは一路、野営のある村へと帰還した。

俺たちが村へはいるとそこには村の人たちが集まり暖かく迎えてくれた。

その表情に浮かぶのは歓喜であり安堵であり……涙するものさえもいた。

罵っていた人でさえも俺たちに感謝の言葉を投げかけてくれる

ああ、この人たちはただ不安だったのだらう。

またいつ襲われるかもしれない恐怖に怯えていたのだらう。

だから、何かにあたらずにはいられなかったのかも知れない。

「よく戻ったな」

そういつてお爺さまは俺たちを迎えてくれた。

お爺さまは血塗れた俺たち、一人一人の姿を凝視し静かに深く一度頷いた。

「たしかに見せてもらった。もう、儂が言うことなぞなにもないじやろつ……」

そういうと何か思うところがあるのか目を瞑り何度も何度も頷いた。そして、汚れを軽く落とすように言い何処かへと去っていった。

俺たちは武器や服などについた血糊を軽く拭き取りしばし休憩した。そうこうしているうちに、俺たちは先にお爺さまや怪我人たちと共に都へと戻ることとなった。

「こつこついうことは警戒しすぎるくらいが丁度いいんだ」

そういつて昇華さまはこの村に残り、周辺をしばらくは搜索することにしたみたいだ。

俺たちが帰ってすぐに別の賊が来ましたでは話にすらならない。

もう二度と賊に使われないように例の廃村も打ち壊し焼いて更地にするそうだ。

当分の間は戻れないだろうから愛華を宜しくと頼まれた。

頼まれなくとも面倒は見るつもりだが、元々手のかからない妹なので心配はしていない。

そして、昇華さまたちと別れ、俺たちは帰路につく。

その帰り道はやけに長く遠い道のりのように感じた……

夕方には都に到着し、すぐに屋敷へと戻り華琳たちは先に風呂へと通された。

一緒に入ろうと言われたがさすがに断ることにした。

その間に俺は相棒である朱雀火戟の手入れをすっかりしておく。

今日はこの相棒にずいぶんと助けられた。

あんなに人を斬ったのにも関わらず刃こぼれ一つないのは不思議である。

俺は丹念に血糊を拭きとり、感謝の念を込め綺麗に磨き上げた

これからも宜しく頼むな

華琳たちが風呂からあがったと報告を侍女から受けたので

武器を自分の部屋に戻し俺も風呂に入ることにする。

洗い場で自分の汚れを丹念に落とそうとしたのだが

やはり、血は落としても落としても汚れがとれないような気がした。だが、そんなことばかり気にしてはいられないと洗い流し風呂に浸かり一息つく。

お湯の温度も心地よく忙しかった一日の疲れが吹き飛ぶようだった。筋肉痛にならないように筋肉をほどよくほぐし氣を体中に循環させる。

こうしておけば明日に疲れは残らないだろう。

風呂から上がり脱衣所で用意されていた真新しい服を着て少し腹ごなししようかとも考えたが今日はこのまま寝るのが一番だろうと

そのまま何処にも寄らず部屋に戻り布団に横たわる。

氣も体も精神も何もかも酷使したからだろうか

俺は何も考えることなくそのまま深い眠りにいざなわれた……

あの初陣から一週間がたつ。

あれから特に変わったこともなく前と同じように日々を過ごしている。

いや、実戦を経験したことにより確かにいろいろ変わった。

特に多人数相手に対するイメージがしやすくなり訓練も前よりも身が入った。

春蘭たちもそれは同じようで動きが前よりも鋭くなったように思う。ただひとつ、氣になることは休憩の時間に華琳がよく一人いなくな

ることだった。

特に変な様子はなかったのでそれっきりあまり気にせずにはいたのだが

今日、そんな華琳から俺たち4人に広間に集まるように言ってきたのだ。

集まってみたものの広間には俺たち4人の姿しかなく……

「なにか知ってるか？」

いつも一緒にいるだろう春蘭たちに聞くも首を横に振り聞かされてはいないようだった。

まあ、春蘭たちにわからないものが俺にもわかるわけもなく、ただ時間だけが過ぎていった。

「待たせたわね」

そういつて颯爽と現れた華琳を見て驚いた。

彼女は動きやすそうな紺と紫を中心とした衣装を身に纏っている。

ここまではいい、それは彼女にとても似合っている。

髪はツインテールに紫のリボン、髑髏の意匠の髪飾り

さらには手に持つ絶にも髑髏をあしらった装飾が為されていた。

そう、髑髏である。確か、華琳にはそういった趣味はなかったはずだ。

「華琳さま？ それは……？」

思わず、春蘭が声を出す。その目はキラキラ……キラキラ？  
よく見ると春蘭は目を輝かんに華琳を見つめ頬を紅く染めて  
いる。

ああ、カッコイイと思ったんだね。たしかにカッコイイとは思っよ。

「あら？ この一週間で職人に作らせたのだけど……似合わないか  
しら？」

いや、物凄く似合っている。

その大鎌との相乗効果でまさに死神少女といったところだろう。  
春蘭は似合っておりますと今にも飛びつかんとばかりに興奮してい  
る。

普段、無表情な秋蘭でさえも頬を染めよくお似合いでと褒めている。  
愛華もカッコイイですと心からいつているぐらいだ。  
だが、聞きたいのはそういうことではなく

「似合っていることは似合っているんだが……突然どうした？」

女性が普段とは違う格好をするってことは何かあったときだと  
父が涙ながらに語ってくれた。お前は失敗するなよと……。  
それにわざわざ俺たちを集めてお披露目したんだ間違いないだろう。

「皆に集まってもらったのはそのことよ。今から話すわ」

華琳はそのまま中央へと歩き出し上座に移ると俺たちを見回し、静かに語り始める。

春蘭たちもさきほどの興奮とは打って変わり真剣な面持ちで華琳に向き合う。

「私は賊とはいえたくさんの人を殺した。彼らにも何か理由があったのかもしれない。私はそれに同情するつもりも後悔するつもりはない。例え、どんな理由があろうとも賊を許すつもりもない。彼らを放っておけば次に犠牲になるのはさらに弱き者だからよ」

それは俺も同じだ。後悔も同情もする気はない。

彼らの中には国による犠牲者もいたのかもしれない。

だが、それを許してはさらなる悲劇がまっているだけだから……

「賊によって殺された者、賊にならざるを得なかった者、賊との戦いで命を落とした者……彼らの死を私は決して忘れはしない」

あの日はたくさんの死をみた。

村の人たち、賊、兵たち……平和な時代であれば必要がなかった犠牲だろう。

「その犠牲を無駄には決してしない　その犠牲を、その死を、私は背負おう」



ああ、これが乱世の英雄……俺が見た気高く眩しい魂。  
この輝きに俺は惹かれこの世界に生れ落ちた。

「 鬪體はそんな私の決意の証として己への戒めとしてこれより  
これを戦場での正装として身につけることにしたのよ」

初心を絶対に忘れないよう死の象徴である鬪體を身につけ己を縛り  
付ける。  
それはどこまでも彼女らしい生き様であろう。

「 ……私にはまだ迷いがあった。これより先どう生きるべきか  
彼女もまだ若い。どんなに優れていても迷いもあるだろう。  
だが、彼女はそれを乗り越えたのだろう。」

「 だけど、もう迷いはない。ここに……お前たちに誓おう。これよ  
りこの曹孟徳は 」

そう、彼女の眼には既に迷いはなく己の進む道をすでに決めている。  
彼女は手に持った絶を天に掲げ……

「王となろう。これより先、数多の犠牲は出るだろう。だが、それすらも背負ってみせる」

俺たちに……己に誓う。

そして、天に宣誓するように真っ直ぐに高らかに言う。

我が進む道は霸王の道なりと

身に纏う覇気はすでに王のもの。

その姿は神々しく日輪が如き輝きを発する。

俺は、俺たちはただその姿に魅せられた。

「ついてきてくれるかしら？」

俺たちはそうするのが当然と言わんばかりに臣下の礼をとる。

華琳、君が霸王の道を往くのなら俺はそれを支えよう。

行く道に遮るものあれば矛と為り蹴散らしてみせよう。

歩む道を邪魔するものがあれば盾と為り君を守ろう。

だから、君は君の思うがままに進めばいい。何があるうとも

俺はそのあるがままの君を受け入れるよ

この後、俺たちは華琳に倣い各々に髑髏の意匠の物を戦場では必ず身につけることになる。

春蘭は左肩に秋蘭は右肩に髑髏の肩当を、愛華は髑髏の首飾りとバツクルを……

俺は両の手に髑髏を模した手甲を身につけ、それぞれの証とした。そして、それぞれが持つ信念のもと、私たちは己が髑髏に誓う

我ら四人は華琳一人には全てを背負わせまいと、我らで彼女を支えるのだと……

## 第十八話（後書き）

霸道と王道。

無印の場合は霸道に偏ってましたが

真恋姫の場合は華琳って両方兼ね備えてますよね。

## 第十九話（前書き）

会社の忘年会も終わった。

あとは年末まで突っ走るだけだ！頑張るぞ！

## 第十九話

華琳が十四になる頃、お爺さまはこの世を去った。

あの初陣から暫くして、もう自分の役目は終わったのだとばかりに床に伏せり

起き上がることもできないほど衰弱していった。

お爺さまは一代で漢のトップにまで登りつめた傑物であった。

その人生は壮絶で波乱万丈であっただろう。

「子や孫たちに囲まれて死ぬる。こんなに嬉しいことはない……」

彼は死ぬ直前にそういつていた。

そして、笑みを浮かべ静かに目を閉じ静かに静かにその長き人生に幕を閉じた。

彼のその身体は出会った頃と比べると衰えとても小さくみえた。

ただ、その死に顔は満たされており本当に幸せそうであった。

やるべきことはすべてやりきったからであろうか？

己の全てを託せるものを見つけ、それを為せたからであろうか？

その死に様は俺には眩しく とても羨ましく思えた。

お爺さまの死後、曹家では新たな問題が起こる。 次の当主の相続問題である。

順当にいけば、長男である華琳の父親が当主の座に座り実質的に妻の曹嵩さまが権力を握る。

だが、ここで華琳の父親が『自分は当主の器ではない』と当主の座を放棄したのだ。

華琳の父親は情けなく頼りないとよく言われるが己の器を知りそれ故にでしゃばらない人である。

元々、補佐的な役割を好み曹嵩さまを影で支え続けている人である。傍から見ると奥さんに振り回されている情けない旦那に見えるかもしれないが……

政略的な結婚であるのに関わらず夫婦仲はとても良く話の節々に惚気が入っていることに本人たちは気づいていない。

……いや、実は気づいていてわざとなのか？

そんな人が独断で事を決めるはずもなく曹嵩さまも了承済みのようである。

次男であるうちの父は当の昔に放棄済みでありその意思はない。そうなってくると次の曹家の当主は誰になるかと言えば……

華琳である。

齡十四の少女が当主だなんて何人もの一族のものが抗議にきたのだが

華琳の姿をみると一様に納得して帰るということが繰り返されている。迷いを捨てた華琳は圧倒的なカリスマを放ち、その姿はもう王そのものである。それはお爺さまに勝るとも劣らないもので皆、彼女なら任せられると判断したようである。

華琳に比べれば曹嵩さまでさえ霞んでしまっただけである。

皆やはりというかこれから先の時代に不安を抱えていた。だからこそ、圧倒的な力で一族を纏め上げ引っ張ってくれる人材をどこか欲していたのである。曹嵩さまは優秀ではあるがお爺さまと比べると見劣りし本人もそれに悩んでいた。

自分たちより娘の華琳の方がふさわしい

そう二人は考えたのだろう。それほど華琳の才覚は凄まじかった。だからといって子供に押し付けることになることにひどく心を痛めていた。

そんな両親の迷いを感じ取った華琳が俺たちにしたように宣言した

私は王となると……

「心配は無用。一族の当主ぐらいやってのけないで何が王か」

そう実の両親に向かって言い放ったのだ。



その言葉で曹嵩さまたちの心は決まったらしい。  
私たちの持てる力、全てを用いてこの子を表に裏にと支えていこう  
と……

こうして齡十四歳の新たなる当主が誕生し曹家は華琳のもと一つに  
纏まり始めた。

その間、俺は昇華さまの横に付き周辺の賊討伐をしていた。  
昇華さまから部隊を率いるノウハウを学ぶためである。

華琳を王とするには俺もいずれ部隊を率いて戦うことになるだろう。  
個人の武だけならなんとかなるのかもしれないが部隊運営はそうは  
いかない。

部隊全体を見て部下と信頼関係を構築し彼らに戦えと命令を出さね  
ばならない。

つまり、彼らの……部下の命を預かるのである。

人の上に立つというものはそれだけで重圧がある。

ましてや、他人の命を預かるのだ重くないわけがない。

しかし、俺は俺たちはその頂点に華琳を立たせようというのだ。

これぐらいの重圧跳ね除けられねば申し訳が立たない。

いや、華琳の横に立つ資格すらない。

俺は手にある髑髏の意匠を見る。

この覚悟は決して嘘じゃない。嘘にしてはいけない。

犠牲が少なくすむために俺がさらに努力し成長すればいい。

例え、犠牲が出たとしてもそれを絶対に無駄にはしない。

もう前に進むしかない、俺はそうこれに誓ったのだ。

それにしてもここ最近、やはり賊の出現数は日に日に増えている。

官軍の本拠地である都、洛陽の周辺でさえこのありさまなのだ。

都から離れた地方ではかなりの数の賊が出始め荒らしまわっているらしい。

だが、それらに対抗するように諸侯が自ら軍備を増強し力をつけ始めている。

そして、各地で義勇兵なる民で構成された兵が現れ始めてもいる。

これが後に英雄と呼ばれる存在を生み群雄割拠の布石となっていくのである。

俺も来年には十五になり成人として世に出なければならぬのだ。

これから華琳を王とするために何をすべきなのかしっかりと考えなければならぬ。

春蘭たちは華琳の傍で彼女を補佐し彼女のための剣になるだろう。

俺も彼女達のように華琳の傍で補佐すべきなのだろうか？ それとも……

俺は彼女のために何ができるのであるのか？

「あら？ あなたはたしか華琳さんの……」

休みの日、先のことを考えながら街の中をふらふら歩いているとふいに俺に向け声をかけられた。

振り返るとそこにいたのは派手な衣装の名家の姫さんこと袁紹さんその人である。

珍しくお供の二人も連れずに一人で行動しているようだ。

「ああ、本初さん。お久しぶりです」

「ええ、お久しぶりですわ。袁紹でよろしくてよ？ 子孝さん」

「ありがとうございます。こちら曹仁でかまいませんよ」

そういえばまともに話をしたのは初めてかもしれない。

いつも会うときは華琳が傍にいたのでこちらをそっこのけで言い争いをしていたし

俺はもっぱら顔良さんと文醜さんと会話をしていた。

「それにしても一人つてのは珍しいですね。いつもの二人はどうしたんですか？」

「そうなんですの！ あの二人ときたら私が歩いてるうちに迷子になったんですわ。おかげで目的地もわかりませんわ！」

そう、プリプリと怒ってはいるが……それはあなたが迷子になったっていいませんか？  
言っても認めはしないのだろうけども……

「たいへんですね。ちなみに何処へいこうと？ 俺が知ってるところであれば案内しますよ」

「あら、気が利きますわね。あれは顔良さんが」

目的地はどうかやら顔良さんが見つけたおいしいお菓子屋さんらしい。お菓子の内容から俺が知っている店に間違いはないようだ。

伊達にグルメな華琳にいろいろな場所に連れまわされてはいない。

情けない自慢ではあるのだが

「そういえばどうかしましたの？ さきほど、何かに悩んでいますっ

て顔をしながら歩いてましたけど……」

そんなに悩んでるように見えたのだろうか？

表情は消していたはずで顔に出していたおぼえはないんだけど……  
普段はあれな感じなんだけどこの人、実は物凄く鋭いんじゃない？

「いや、そんなたいしたことじゃないですよ」

「そうですもの？ ならいいんですわ」

あまり、他人に話すような悩みではないので軽く誤魔化した。  
彼女は別にそれほど聞きたかったわけでもなくすぐに興味をなくしたようだ。

道すがら、特に話すこともなくこれでは気まずいと適当に話し掛けることにした。

「そつえば、その服すごいですね……」

「あら？ わかる人にはわかるんですね。この素晴らしい意匠は

「

思わず適当に口から出たのだが振る話題を間違った気がしないでもない。

赤に金をあしらった衣装などめつたにお目にかかるものではない。なんというかある意味でその豪華さ、派手さはすごい。そして、華琳もそうなのだがミニスカートをはいている。流行っているのだろうか？

この時代ミニスカートなんてものがあるのかという疑問は最早、意味のない問いだろう。

まあ、似合っているし、俺も男であるから文句はないのだけどね。

「ええ、とてもあなたに似合っていて綺麗ですよ」

「へ？ あ……当たり前ですわ！ わ、わたくしに似合わない服はありませんわ！ おーっほっほっほ！ それに」

明らかに照れ隠しであるのは明白であるがそれはそれでかわいらしいものである。

女性の服はとりあえず褒めるべしと父からの教えは間違っではないようだ。

まあ、お世辞ではなく本当に似合っているのだからいいのだろう。それからも興がのったのか袁紹さんによる衣装の自慢話は終わらない。

俺はそれを聞きつつ適当に相槌をうってはいたのだが……

「わたくしの内面からにじみ出る高貴さ！ それを表現するには外側からも着飾らなければいけませんのよ」

ふむふむ、確かに内面は大切だけど外側もきちんとしていなければ外側？

その一言で俺の頭の中である考えが次々と浮かぶ。俺が悩んでいたこれからのこと、その道が見え始めた。

「ちゃんと聞いてますの？ 子孝さん？」

「ああ、ありがとう！ 袁紹さん！ あなたのおかげで助かりました」

「へ？ ……お、おーっほっほっほ！ 何のことかわかりませんが名家として当然のことをしたまでですわ！」

まあ、感謝の理由をわかっていないのだろうが彼女の何気ない一言のおかげで自分の道が開けた。世の中、本当に何がきっかけで幸いとなるものが解らないものである。

「本当にありがとう！ ああ、目的地はすぐそこですよ！ さあ、行きましよう！」

「え？ ちょ……し、子孝さん？」

俺は袁紹さんの手を握り目的地のお菓子屋さんまで引っ張るように連れて行く。

頭の中は、先ほど浮かんだ考えでいっぱいであった  
目的地には顔良さんたちがキョロキョロと周りを見回しているのが  
みえた。

そして、すぐにこちらに気づいたようで……

「文ちゃん、あそこ！」

「あー、姫みつけた!!! って曹仁の兄ちゃんも一緒か？」

顔良さんは心配していたようですぐに駆け寄ってきた。  
少し心配ではあったが目的地があつたようでよかった。

「二人してどうして手をつないでるんだ？」

……言われて初めて気が付いた　少々、うかれていたようである。  
女性の手を握って街中を引っ張りまわしてしまうという迂闊なことを  
したようだ

「すみません。悩みが解決したもので少々浮かれてたみたいですよ」

「か、かまいませんわ。……ごほんっ、そ、それよりも斗詩さん、



猪々子さん！ 迷子になるなんて 「

まあ、よかった。それほど気にしてはいないようだが二人に理不尽な怒りをぶつけ始めた。

しかし、目的のお菓子を手にしたことで袁紹さんはすぐに機嫌をなおしていたが……

俺は顔良さんにこっそりと袁紹さんを送ってくれたことに礼をいわれたが

こちらもいろいろと助かったことをいうとやっぱり不思議そうな顔をされた。

袁紹さんが役に立ったということが想像できないようである 何気に失礼な気が……。

その後、一緒にそのお菓子でお茶をしないかと誘われたのだが……

「せつかくですが、俺はこれから少し用があるのでこれにて失礼します。今日はいろいろ楽しかったですよ」

「残念ですわ。用があるのならば仕方がありませんね」

今、頭に浮かんでいる考えを一人で纏めたいので誘いを断ることにした。

それと、華琳たちへお土産にとお菓子を買って帰ることにする。

「それでは失礼します」

「ええ、またお会いしましょう、曹仁さん」

そういつて彼女達と別れ俺は家路を急いだ。

自分がこれからすべきことが何なのかその考えを纏めながら……

余談ではあるが、その後、休みの日に街をあるいてみるとよく袁紹さんたちと会うことになる。

どうやらどこにかはわからないが興味をもたれたようでよく話しかけられようになった。

俺も特に嫌というわけでもなく応じているが、彼女は話してみると中々に面白い人であることがわかった。

さすがに華琳が真名を預けるだけのことはあるのかもしれない。

その姿を華琳に見つかり、いろいろとからかわれたりするのだがそれはまた別の話である。

## 第十九話（後書き）

麗羽再び登場。

華琳さん同様に目をつけられた様子。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6171o/>

---

あるがままに生きる 真・恋姫十無双

2011年6月24日00時56分発行